

578-345



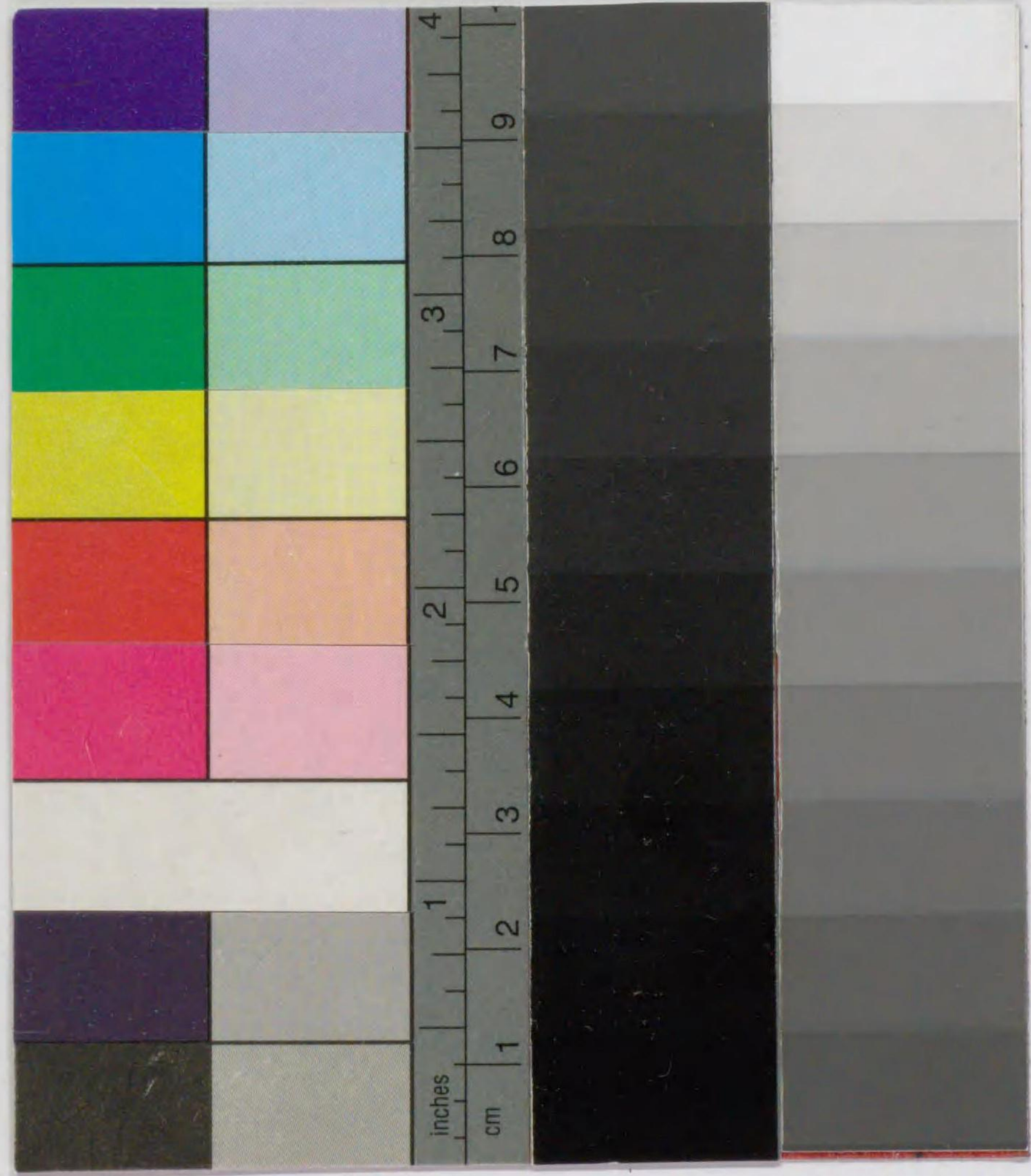
1200501520848

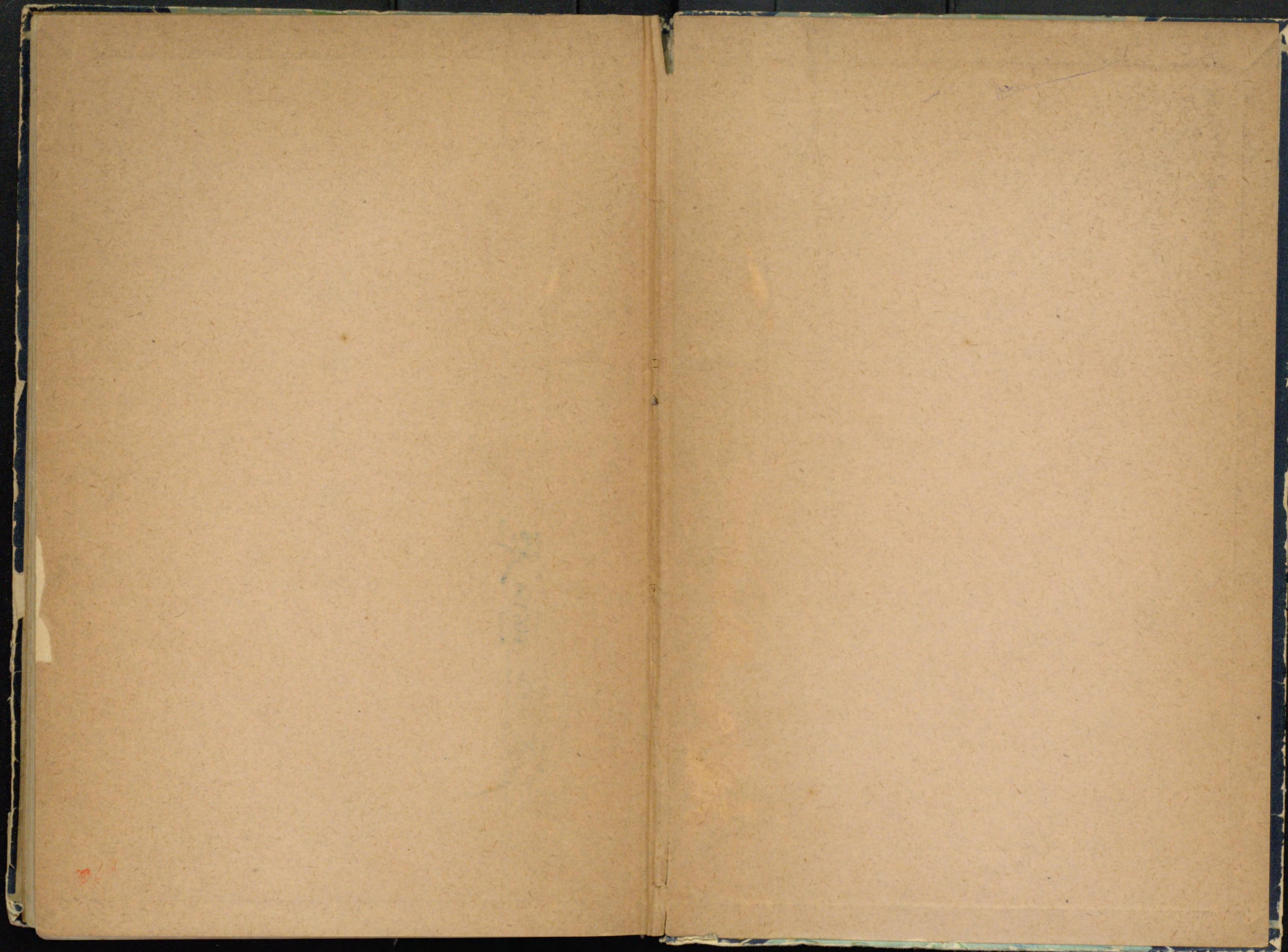
78

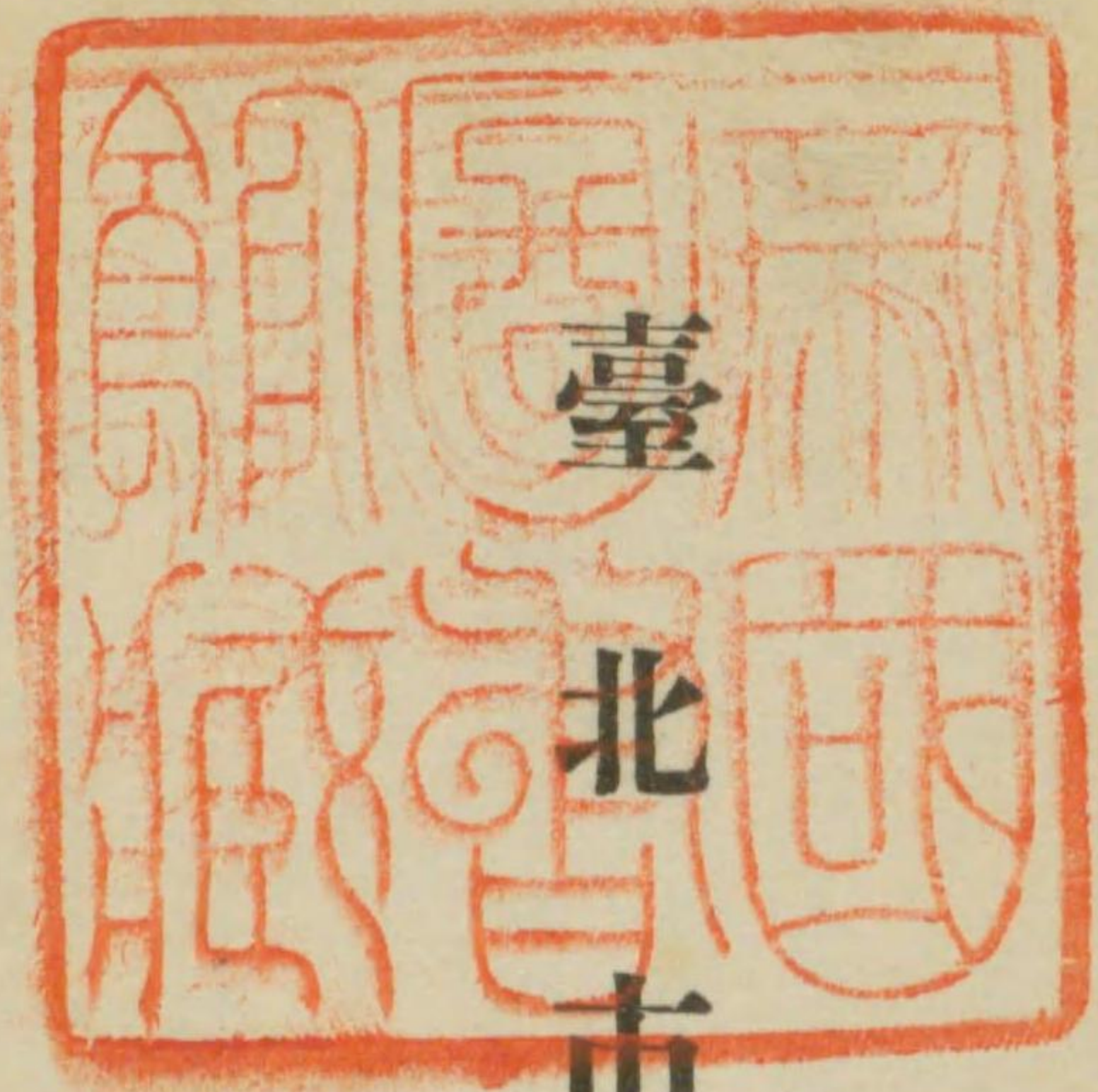
345

台北市十年誌

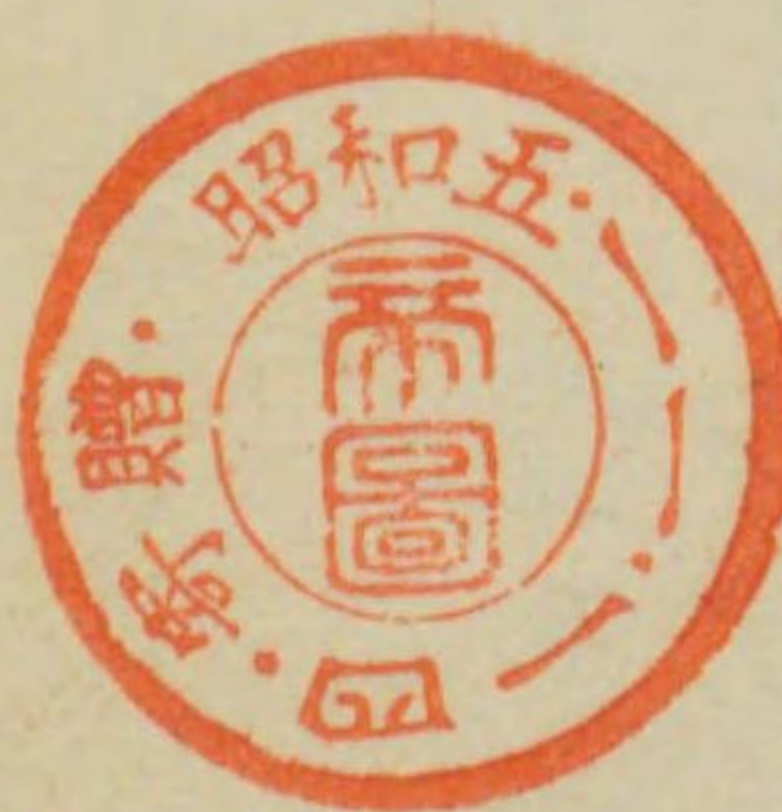
口 複写







臺
北
市
十
年
誌



發行所寄贈本

附圖貳枚

578-345

卷頭辭

吾が臺北市は臺灣總督府を置かれて已に三十有六年、市制實施以來早くも十年の記念日を迎へたのであります。

回顧すれば大正十二年陽春四月、今上未だ東宮に在せし日、攝政國務御多端なる際に臨みて臺灣に行啓を仰ぎ本市に鶴駕を駐めさせられ給ひ、市民親しく其の恩光を拜し奉りたるを初めとし、秩父宮高松宮兩弟宮殿下、北白川宮大妃殿下、朝香宮鳩彦王殿下、久邇宮朝融王殿下、久邇宮邦彦王殿下、伏見宮博義王殿下、東伏見宮妃殿下と前後相踵いで御台臨を忝うし、奉迎の赤誠を披擲し得たるは臺北市民の無上の光榮として、記憶に新たなる所でありまして、聖恩の一人深きを覺へ恐懼感激措く能はざる所であります。

翻て過去十年間に於ける臺北市の市勢の上から見ますれば、市制施行當時の人口十七萬人に對し、現在は二十三萬人を超へ三割五分三厘の増加を示し、市の歳

入出に於ても大正十年度の豫算額百六十三萬餘圓に對し昭和五年度の豫算額は三百八十七萬餘圓を計上し是亦二倍に達し、更に市の生産額に於ても大正十年の二千八百八十七萬餘圓に對し昭和四年には三千三百二十六萬餘圓を突破し特に本市産業の大宗たる特産品として包種茶烏龍茶金銀紙の偉大なる發展は大に刮目に値すべく、若し夫れ教育方面……小學校並公學校に就て見ても大正十年度に於ける學級數二百五十八、兒童數一萬四千五百五十三人に對し昭和五年度には學級數三百六十七、兒童數二萬二千七百八十五人を算し異常の進暢を示し、こゝにも伸び行く偉大の力を感ずるものであります。この外市の主なる新規施設事業に就て一瞥を與へますれば、重要なものに、皇太子殿下行啓記念事業として圓山運動場の設置があります、之れは本市に於ける諸官衙銀行會社等官民有志の多大の援助と寄附を仰いだものであります。皇太子殿下の御台臨を忝うし其の後屢々各宮殿下の御成りを仰ぎ、爾來學校生徒兒童の行啓記念大運動會を開催して市の主なる年中行事となつて居るのであります。次で社會事業施設の一つと

して市營職業紹介所及簡易宿泊所の新營、公共施設として市營プール新設等がありました。夫々市民に利用せられつゝある現状であります。又陸軍用地買収問題は同地が市の樞軸を成し京町本町榮町の三町に跨がり市區改正……市の繁榮……市の美觀等に至大の關係を有するものであります。熱烈なる市民の聲と陸軍當局の同情の下に圓滿解決せられたのであります。又昭和四年度に於て中央卸賣市場の新設があります、之れは市民の生活に一日も缺く能はざる魚菜類の卸賣市場でありまして一箇年の取引高魚類約百三十八萬圓、蔬菜類約百萬圓に達するの盛況を呈して居ります。又本市に於ける交通機關は多年の懸案でありましたが機運漸く熟しまして本年度に於て資金二十五萬圓を以て市營バスを經營し五月一日より事業を開始致したのであります。幸に開始以來非常の好況を呈し常に乗客滿員一般市民の要望を充たす能はざるの實狀であります。現今平均一日の乗客數一萬二千人、收入約一千二、三百圓に上り豫想以上の實績と效果とを收めつゝあります。尙一般市民の爲に施設の改善を著々實行し更に必要に應じて増車

の計畫をも建て、進んで第二期計畫にも移り、市民交通の利便と本市永遠の福祉とを増進せんとするものであります。

更に本市が現に工事に著手し、成功を急ぎつゝある重なる事業に就て述べますれば、草山を水源とする上水道擴張工事でありまして、二百五十萬圓の豫算を以て四年繼續事業として昭和二年度起工、同五年度に竣工の豫定であります。之が完成通水の曉は、優に市民三十二萬人に給水せらるゝ見込であります。又南門下水幹線工事は七十五萬九千圓の豫算を以て三年繼續事業として昭和四年度起工、同六年度に成功の見込であります。之れは龍口町大正町間延長二千二百餘間の幹線下水道でありまして、之が完成の上は市内一帯低地の排水を便にし、従つて衛生上大の効果を齎すことゝ信じられます。又京町の市區改正工事も完成に近く本年度内には成功して市街に一段の美觀光彩を添へることゝ思はれます。又多年懸案たりし本市御大典記念事業たる市公會堂建設も三箇年繼續事業として豫算八十萬圓を計上し、不日適地を選び起工の準備中であります。

申す迄もなく、吾が臺北市は臺灣の首府であり、政治經濟の樞軸であるばかりでなく、文化の源泉として中外に對しては特に重大なる責任を有して居るのであります。従つて將來に於ける地位は益々確固たるを必要とするのであります。茲に市制施行十周年を迎ふるに、方り今日の小成に安んずることなく、將來益々發展の途上にある臺北市としては、時勢の進運に伴ひ施設を要するものゝ餘りに多きに困むものであります。今試に其の重要にして且つ緊急を要するものを擧ぐれば

- 一、市廳舎の新營
- 一、小學校並公學校の増設及補修學校の新設
- 一、御成街道の路幅擴張工事
- 一、傳染病院の改築
- 一、腸チフス撲滅施設
- 一、市區計畫

一、道路下水の完成

一、北門町御成町鐵道踏切問題

等があります。是等は舉げて市民の自覺と努力とに俟たざるべからざるは勿論直接間接に總督府並州廳の同情と援助を仰ぎ國庫の惠澤に浴さざるべからざる次第であります。

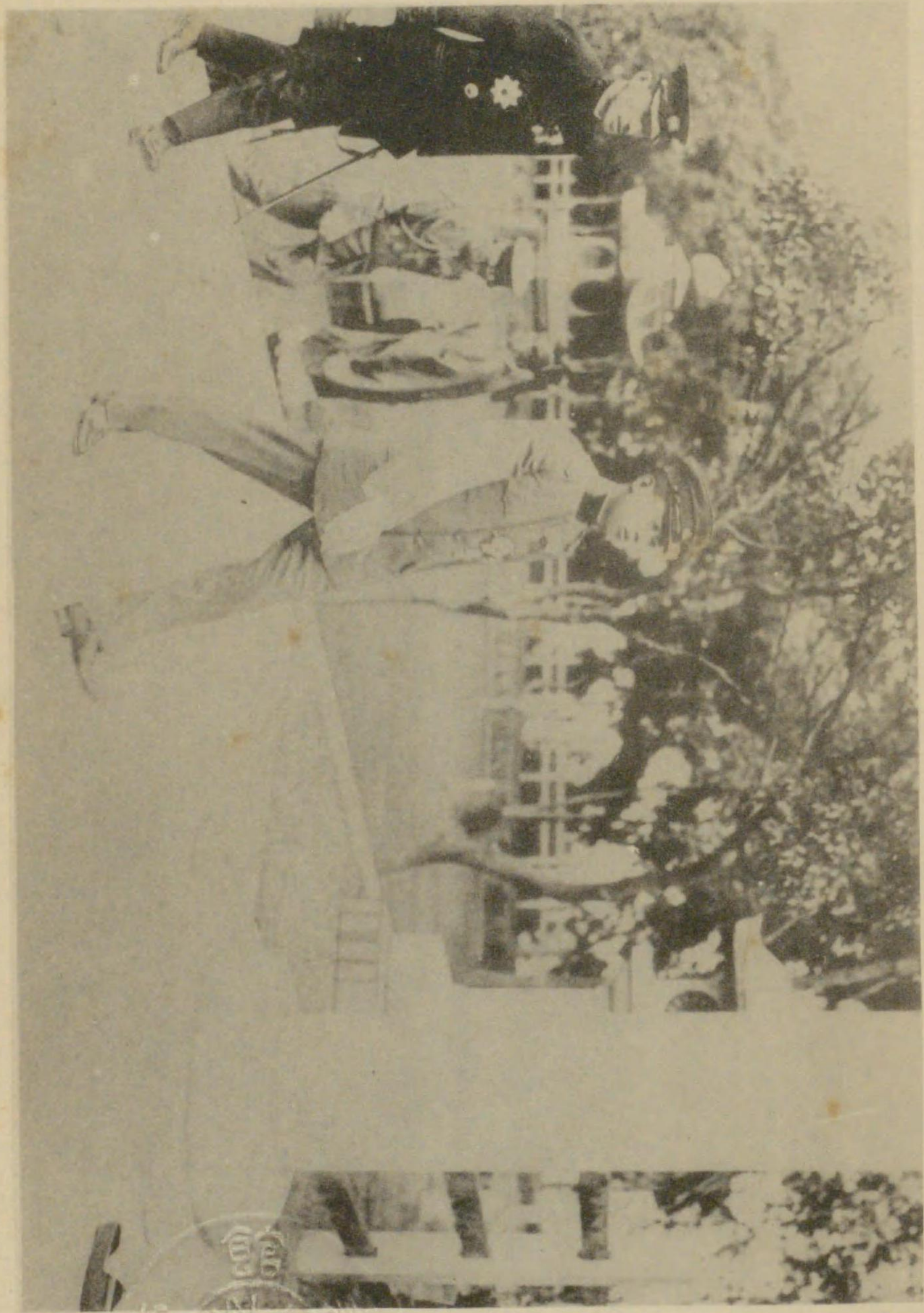
時恰も舉國一致整理緊縮消費節約を要望するの際、國策に順應して新規事業は大に顧慮を要する譯でありますが徒らに退嬰や萎縮の意味でなく又徒らに増税等に依らず他に適當の方途も案出せらるべく所謂窮すれば通ずるの理を以て、大に市財源の根幹を培ひ財政を適切に按排し大に積極的施設を爲すべきであると考へられます。

この市政十年を記念すべき最も意義ある十月一日を迎ふるに方り更始一新更に市民の覺醒に依り一層緊張したる精神を以て一致協力鋭意懸命の努力を以て市勢の發展を遂ぐるか將亦無爲に終るかは一つに市民諸君の自覺如何―努力如

何に在ること、思ひます。幸に賢明なる市民諸君の愛市心に訴へ將來の施設を完からしめ眞に内容外觀物質的にも精神的にも名實俱に島都たる大臺北市の完成を期待する次第であります

昭和五年十月一日

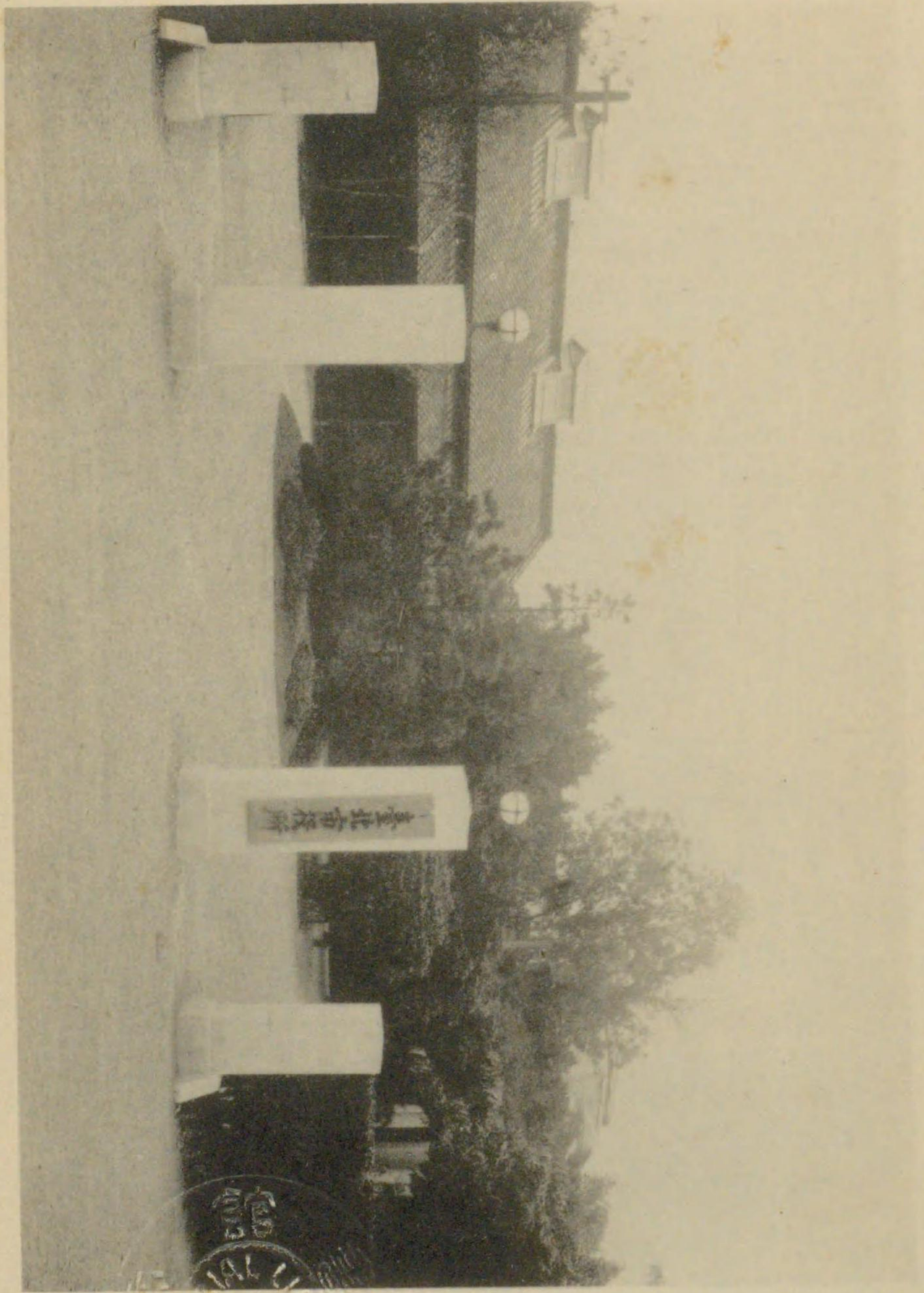
臺北市尹 増 田 秀 吉

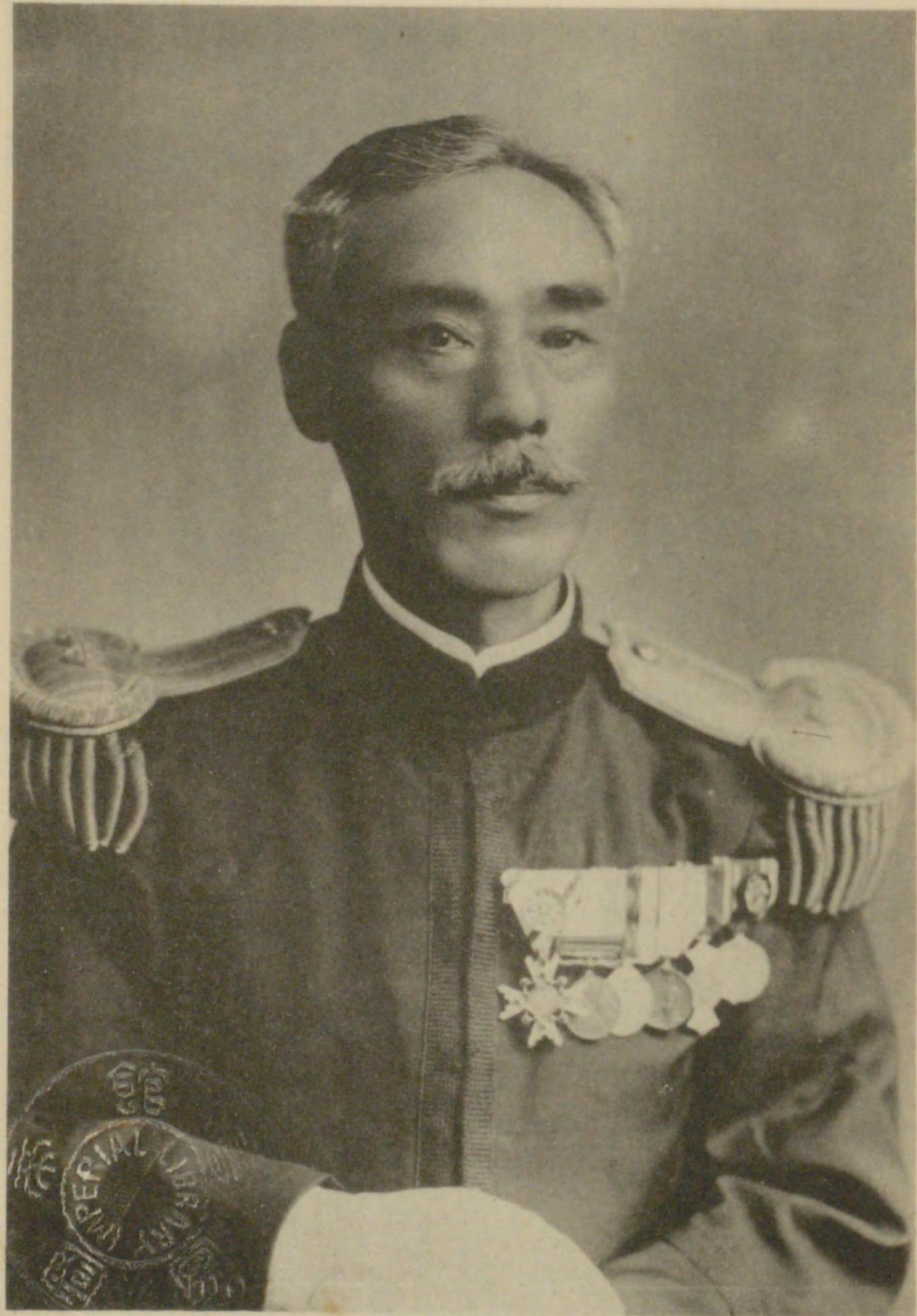


拜參御社神灣臺下殿子太皇 (日七十月四年二十正六)



臺北役所





故武藤五郎氏 初代臺北尹市





氏一 吾 田 太 尹市北臺代二

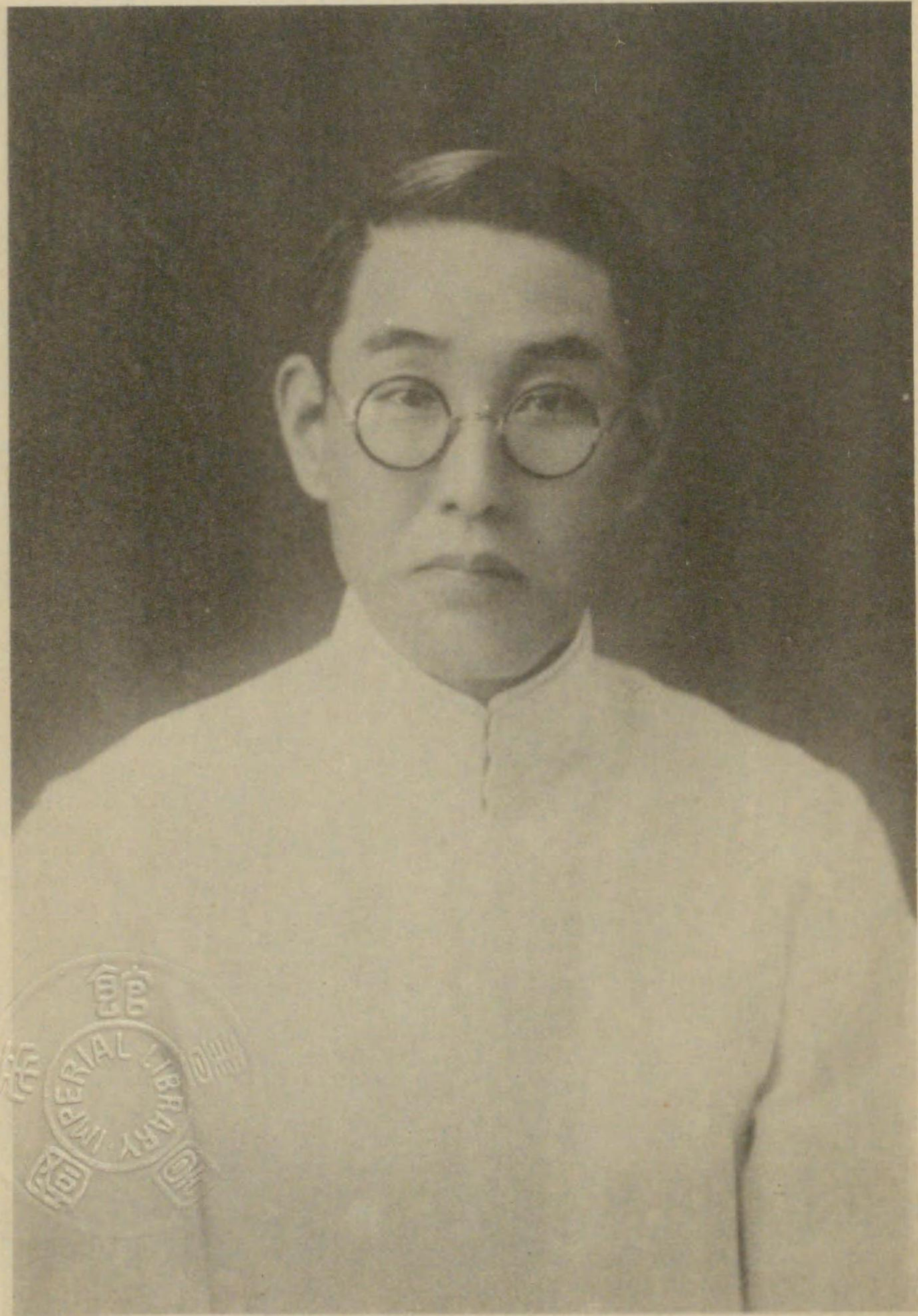




三代北臺市尹 田端幸三郎氏

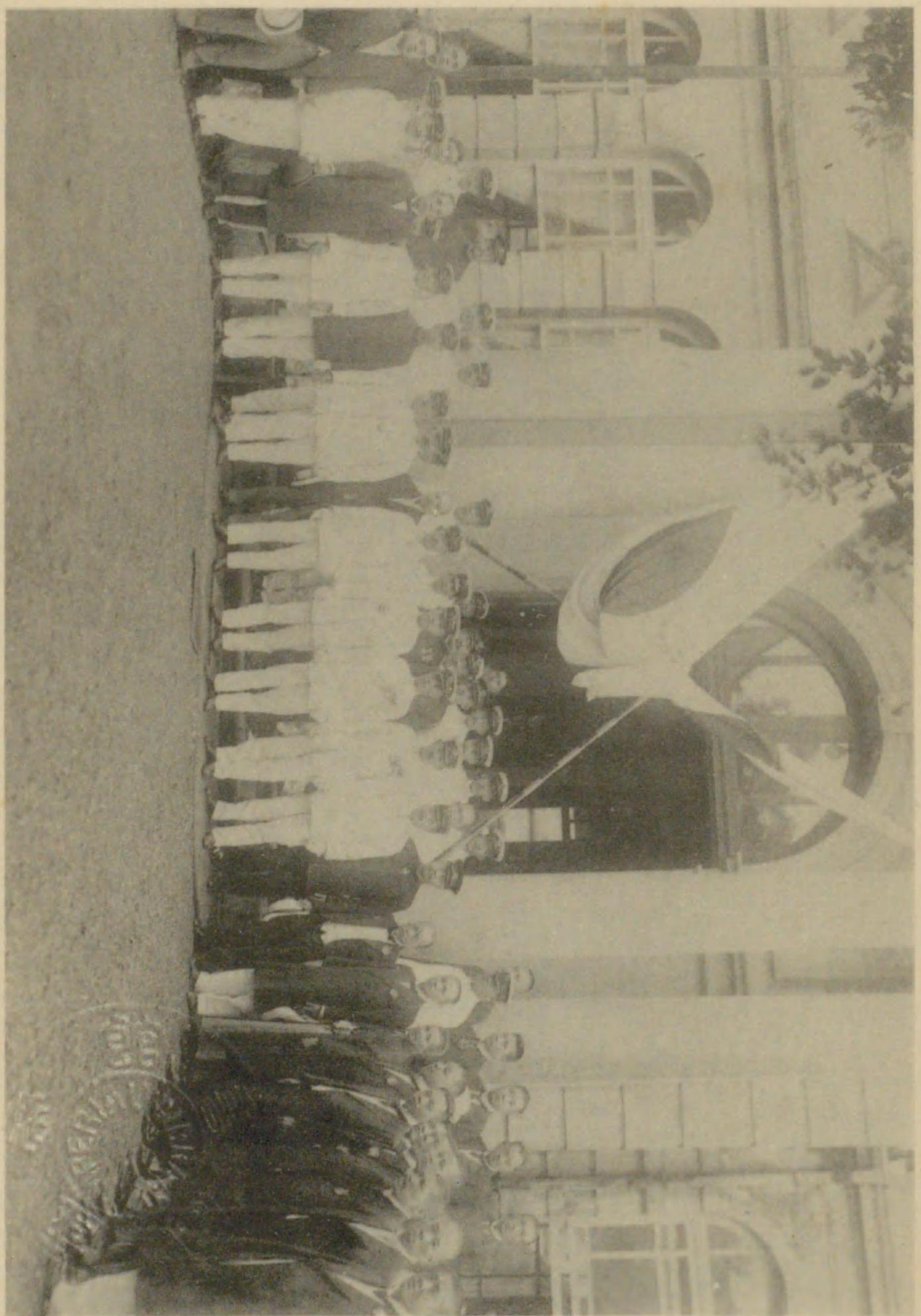


三代北臺市尹 田端幸三郎氏



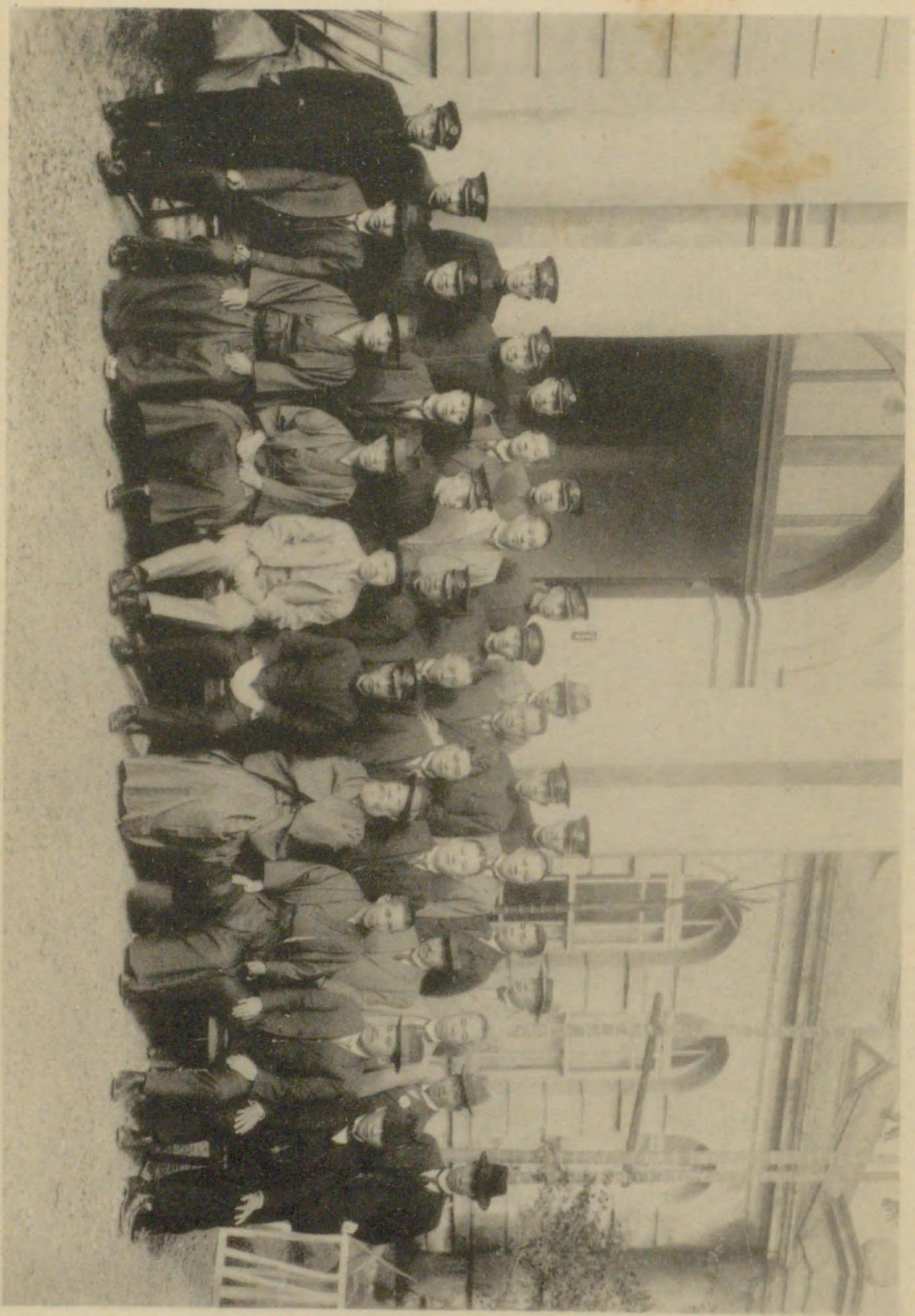
氏吉 秀 田 增 (任現)尹市北臺代四





市制實施祝賀會 (大正九年十一月一日)





第一回臺北協議會 (大正十三年)



目次

第一章 地理	一
位置……地勢……區劃	
第二章 土地及人口	四
一 土地	六
地價	
二 戶數及人口	三
第三章 市政の沿革	一
一 市の成立	
二 市制施行後の重要事歴	
第四章 市機關	五四
一 行政機關	二
二 諮問機關	



三 補助機關

第五章 市の財政

一 豫算

二 市有財産

三 市公債及借入金

四 税務

第六章 社寺宗教

神 社……………神 道……………佛 教……………基督教……………舊慣に依る寺廟

第七章 教 育

一 市の教育

小學校……………公學校……………幼稚園……………書 房

二 社會教育

青年教習所……………國語講習所……………同風會……………青年會

第八章 社會事業

方面委員……………社會事業助成會……………窮民救助……………職業紹介所
簡易宿泊所……………公設貸舖……………主なる私設社會事業

第九章 兵 事

在郷軍人

第十章 産 業

一 市の産業
農 業……………工 業……………鑛 業……………畜 産……………水 産……………商 業
金 融……………家畜市場……………中央卸賣市場……………消費市場……………蔬菜園

第十一章 公共施設

公園及動物園……………運動場……………水泳場

第十二章 土木水道

市區計畫……………道路橋梁……………市民家屋建築……………河川護岸工事

上水道……………下水道

第十三章 交 通

第十三章 市營乗合自動車

第十四章 保健衛生

傳染病……醫療機關……市營稻江醫院……清潔法及汚物掃除

尿尿殺菌池……市有墓地及葬儀堂……火葬場

第十五章 警備

消防機關

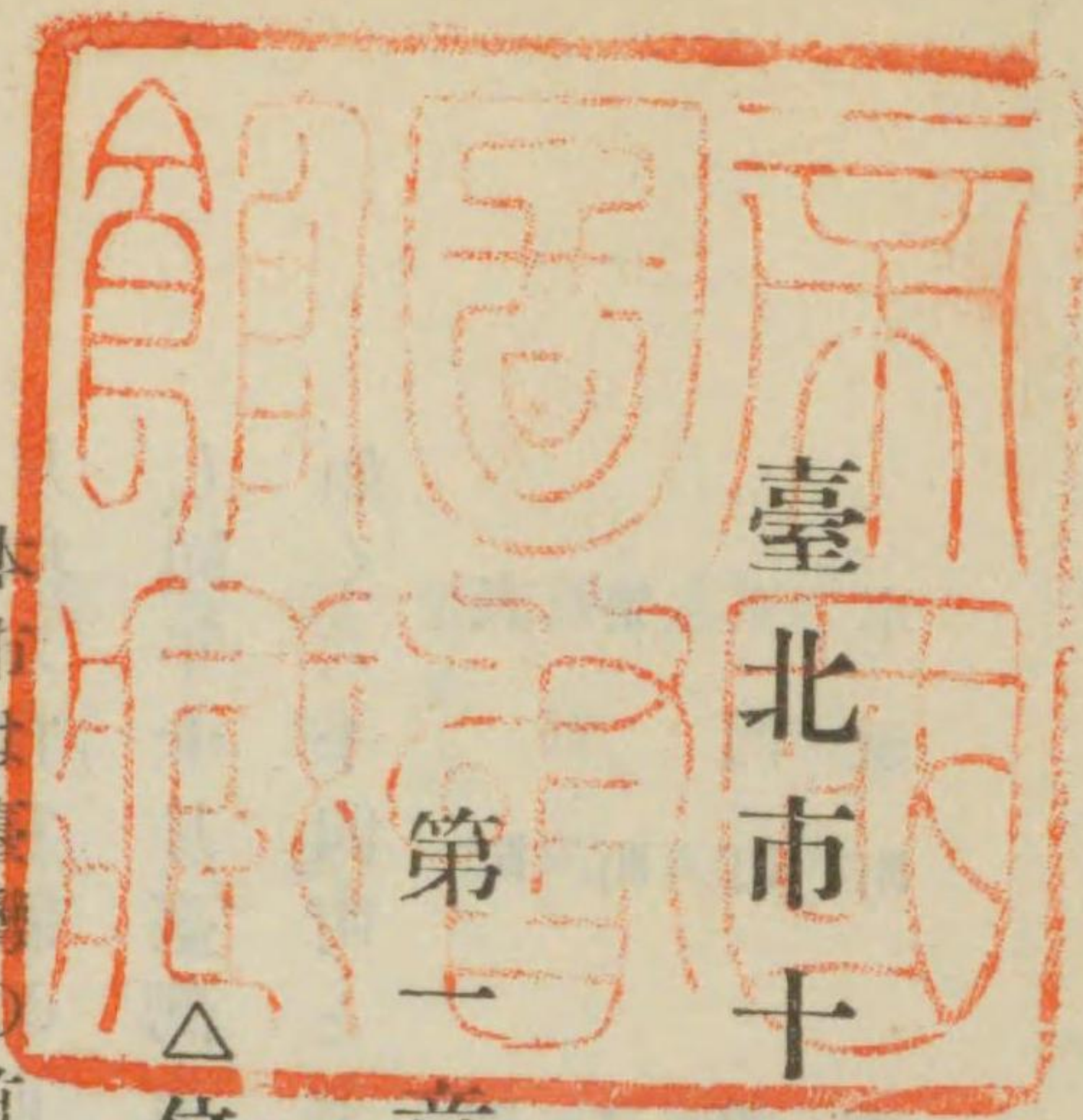
附記

臺北市の徽章

附錄

市制施行當時の臺北市地圖

現在の臺北市地圖



臺北市十年誌

第一章 地理

△位置

本市は臺灣の首都、總督府並軍司令部の所在地にして、西は淡水河を狭んで新莊郡と對し、北は劍潭山を以て七星郡士林庄と界し、東は七星郡松山庄と接し、南東は山岳を以て文山郡と連り、南西は新店溪を以て海山郡に隣り、頗る形勝の地を占む、これを地學的に示せば東經百二十一度三十一分、北緯二十五度二分、海拔七メートルに位す。

△地勢

地勢概ね平坦にして、東南より西北部に緩傾斜し、廣袤東西二里八丁、南北二里十

二丁面積三方里〇六を有し、臺北平野の中樞を占め、沃野穰々として遠く連り、道路四通八達し、鐵路南北に走り、運輸交通の便に富み、頗る地の利を占め、實に島都たるの名に耻じざるなり。

△區劃

市制施行前は、本市を艋舺區、大稻埕區、古亭村區の三區に大別更に之を百四十五街に分割せられ、その地域概ね狭小にして、街名稱呼頗る繁雜なりしが、大正九年九月地方官官制改正の結果、三區の別を撤し、郊外の部落を併合して、大臺北市を形成し、同年十月臺灣市制を施行せられ、越えて同十一年四月町名改正が行はれ、左記の如く六十四町と郊外十部落に區劃せられ、今日に及べり。

水道町	東門町	榮町	表町
南門町	旭町	文武町	明石町
龍口町	大安	乃木町	北門町
佐久間町	下内埔	書院町	本町
兒玉町	六張犁	樺山町	京町
古亭町	富田町	幸町	大和町

川端町	壽町	若竹町	龍山寺町	馬場町	宮前町	御成町	大正町	下埤頭
千歲町	築地町	八甲町	綠町	上奎府町	日新町	大宮町	三橋町	西新庄子
新榮町	濱町	新富町	堀江町	下奎府町	永樂町	圓山町	中庄子	
錦町	西門町	老松町	柳町	建成町	港町	大直	朱厝崙	
福住町	新起町	入船町	東園町	太平町	大橋町	河合町	上埤頭	
末廣町	元園町	有明町	西園町	蓬萊町	大龍峒町	泉町	中崙	

○童謠

露

南門小學校 矢部千賀

星さんあなたは泣いたでせう 草になみだが落ちてたよ
 それをお日さままでらしたら しんじゆの玉に みななつた
 そつと私がつまんだら しんじゆがお水になつちやつた

第二章 土地及人口

一 土地

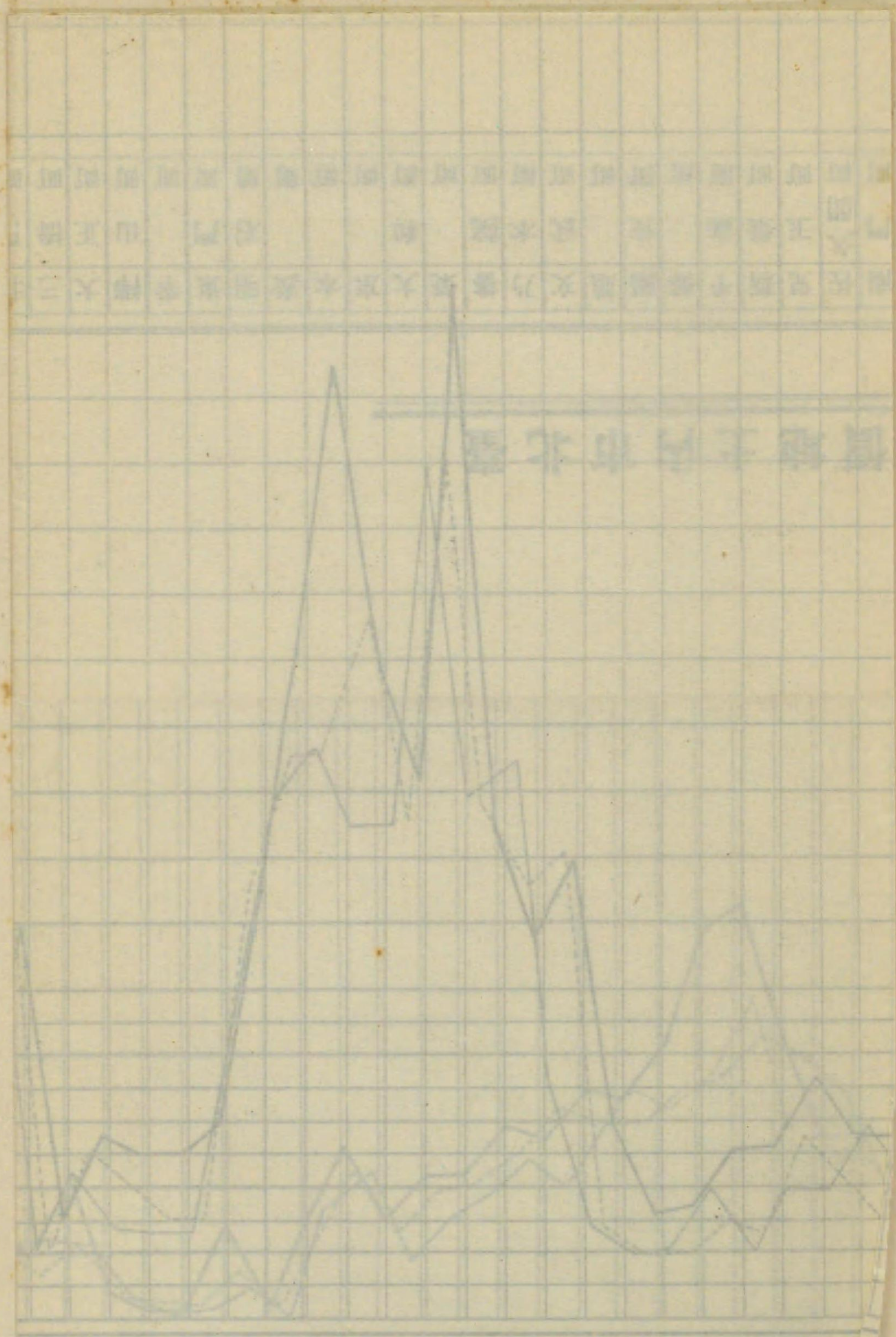
本市は大正九年九月一日地方官官制の改正と同時に郊外部落を合併し區域擴大せり、市街地を除けば概ね水田、畑、山林等にして總面積四千百二十六甲五分八厘四毫七絲あり其の内譯左の如し。(昭和五年一月一日現在)

地目	數	
	官有地	民有地其ノ他
田	六二、四三三	一、九三七、七四三
畑	六三、二三八七	五五、六二五一一
養魚池	—	〇、六三六三
建物敷	二四八、六六〇	五五二、一四三〇
池沼	一四、三八九八	二七、五五四六
山林	一〇五、五二六	一四七、一七一四
計	—	—

△地價

種類	計	官有地	民有地其ノ他
原野	六、二九八四	—	二一、一三三七
祠廟敷	〇、一八〇七	—	五九、七〇二七
墳墓	三、〇四一八	—	八九、五八四九
鐵道用地	三、四〇四四	—	〇、五二二六
公園	〇、三九三六	—	一八、六三〇〇
練兵場	四〇、九八六四	—	四〇、九八六四
鐵道	五、一〇七	—	二〇、七四四四
用路	〇、〇一一九	—	四、〇六五五
溝渠	〇、〇五一六	—	一九、一九九二
堤防	—	—	〇、〇一八三
雜種地	二六、九〇六〇	—	〇、四七七六
合計	六一〇、〇七五九	—	三、五一六、五〇八八

本市十年間に於ける地價の趨勢を見るに市勢の發展と共に人口の増加は自然



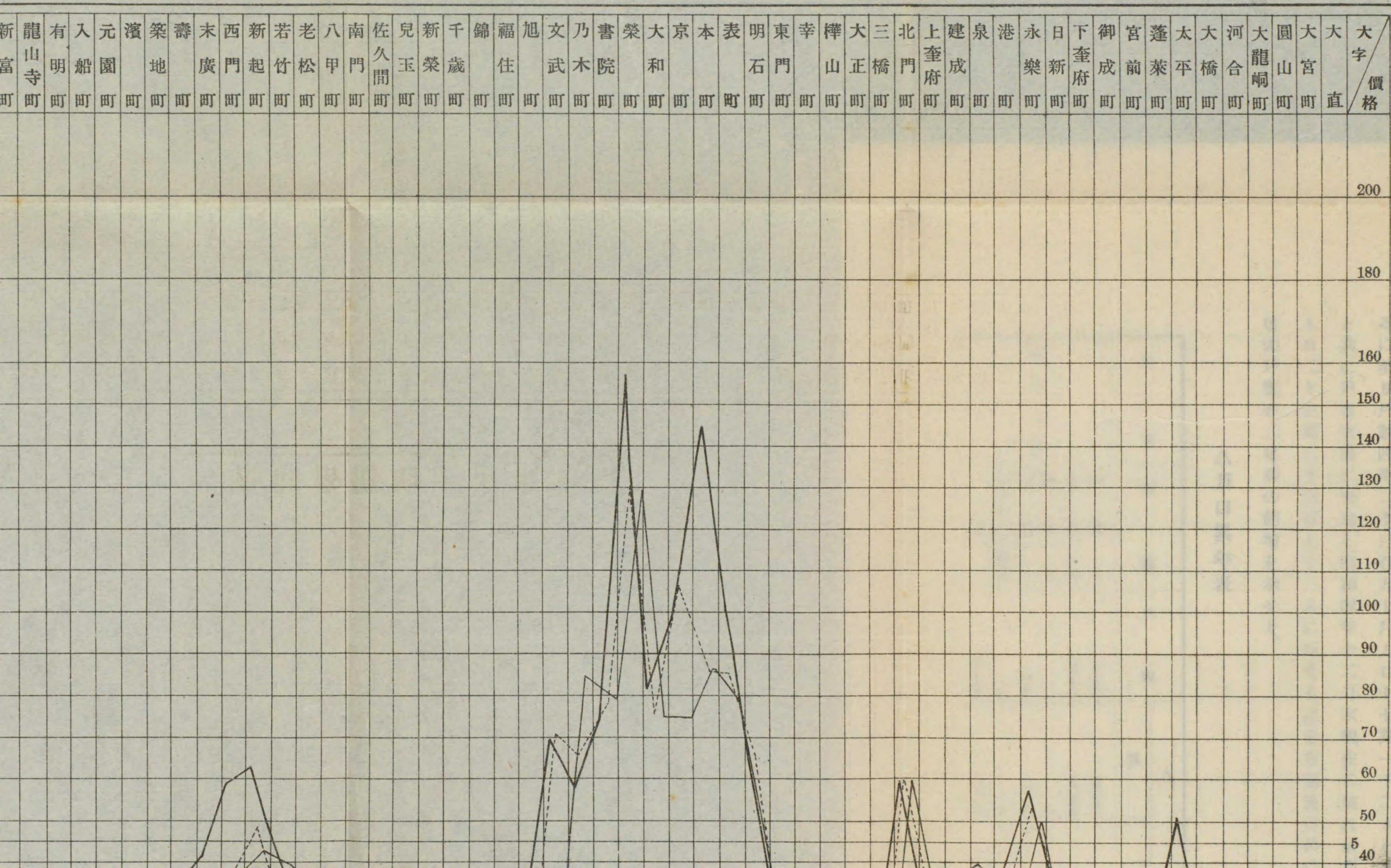
市制施行直前即ち大正八年十二月末に於ける臺北市は、戸數二萬九千四百二十

二 戸數及人口

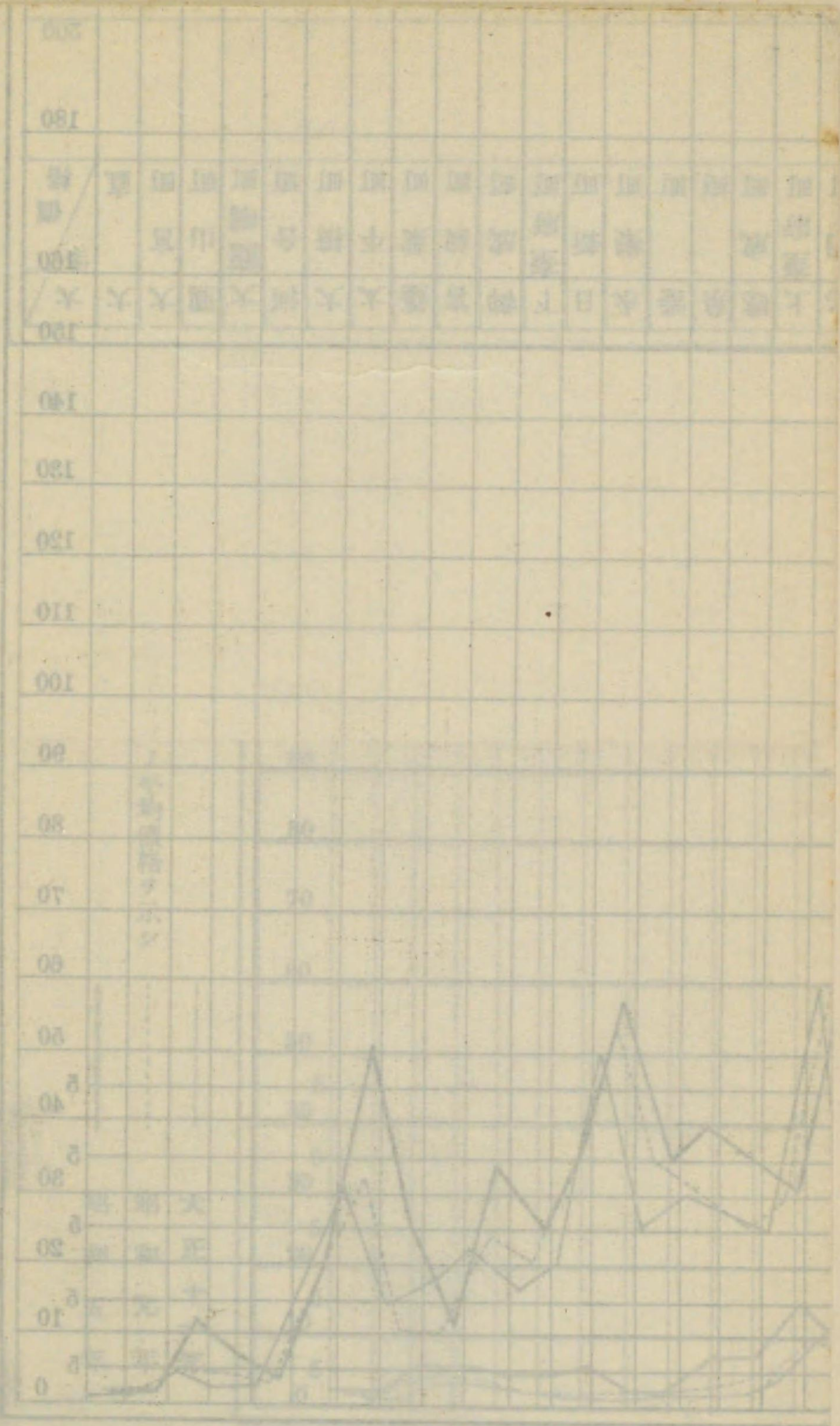
方	面	大正十一年	昭和元年	昭和五年
榮大町	正山町	二二	二五	二八
圓山町	樂山町	四	五	一一
永樂町	起樂山町	四九	五五	五七
新起町	龍起寺	四〇	四七	五三
龍起寺	富田	九	一五	二〇
大富町	安町	三	四	六
		一三八	一三〇	一五七

市區計畫線以外に住宅地を選定し家屋を建築する者漸次増加し爲に地價の騰貴を招來せり今試に方面別一坪當地價を示せば左の如し。

臺北市內土地價格圖表



四戶人口十一萬二千九百七十八人...



四戸、人口十一萬二千九百七十人なりしが、同九年九月制度改正郊外部落を合併するに至り、戸數四萬二千三百九十戸、人口十七萬一千二人を算せり。然るに爾來年と共に戸口次第に増加し、昭和四年十二月末現在に依れば、戸數五萬四千七百二戸、人口二十三萬三千三百七十一人に達せり、之を市制施行前に比較すれば、人口約二倍強戸數亦二倍弱の劇増を示せり。

△戸口累年表

年次	種族	戸數	人口		計
			男	女	
大正九年	内地人	一三、七二一	二四、二八〇	二一、八七五	四六、一五五
	本島人	二五、九八三	五八、五四四	五七、〇五六	一一五、六〇〇
	朝鮮人	八	一五	一	一六
	支那人	二、六四九	七、一三〇	二、〇四六	九、一七六
	其ノ他ノ外國人	二九	三三	三三	五五
計		四二、三九〇	九〇、〇二二	八一、〇〇〇	一七一、〇二二

大正十年	同十一年	同十二年
内地 朝鮮 支那 其ノ他ノ外國人	内地 朝鮮 支那 其ノ他ノ外國人	内地 朝鮮 支那 其ノ他ノ外國人
一四、三七七 二六、六八九 二、九一五 八 三 四三、九六六	一四、七七七 二七、三八〇 九 三、一三一 四 四三、三三一	一五、二七五 二八、〇一七 一 三、二九三 六 四六、六六三
二五、六三六 六一、一四一 二 八、三五八 四 九五、一七三	二七、〇二〇 六三、七九六 二 八、八四四 五 九九、七三三	二七、四八〇 六四、八三〇 二 九、〇〇六 六 一〇一、四〇八
二二、六八三 五九、〇四九 一 二、二五五 三 八四、〇四二	二二、七五七 六一、九四二 一 二、四九〇 三 八八、三三九	二四、八七一 六四、一八一 三 二、八一五 四 九一、九三五
四八、三一九 一一、〇六一 三七 一〇、六一三 八 一七九、二二五	五〇、七七七 一二、五七三 三 一、三三四 六 一八七、九七一	五二、三五二 一三、四一八 五 一、九六一 九 一九八、六二九

昭和元年	同十四年	同十三年
内地 朝鮮 支那 其ノ他ノ外國人	内地 朝鮮 支那 其ノ他ノ外國人	内地 朝鮮 支那 其ノ他ノ外國人
一五、五九〇 二九、三八五 一 三、六五八 四 四八、六九三	一五、二一九 二八、五九七 四 三、五五〇 五 四七、四二〇	一五、一五六 二八、四五八 一 三、五〇一 五 四七、一八一
二八、六六四 六九、二七八 二 九、四五五 四 一〇七、四六七	二八、〇四五 六七、八八八 一 九、三八五 四 一〇五、三七九	二七、四六四 六七、三八八 二 八、七九一 五 一〇三、七一五
二六、一三三 六九、三二五 三 三、七九〇 四 九九、三二二	二五、八一九 六七、八〇四 三 三、五二六 四 九七、二二四	二四、八八八 六六、七八〇 三 三、一七〇 四 九四、九一四
五四、七九六 一三八、六〇三 五 一、三二四 八 二〇六、七八八	五三、八六四 一三五、六九二 四 一、二九一 九 二〇〇、六二〇	五二、三五二 一三、四一八 五 一、九六一 九 一九八、六二九

昭和二年	同三年	同四年
内地人	内地人	内地人
本島人	本島人	本島人
朝鮮人	朝鮮人	朝鮮人
支那人	支那人	支那人
其ノ他ノ外國人	其ノ他ノ外國人	其ノ他ノ外國人
計	計	計
一六〇九〇	一七二〇五	一八二六八
三〇、一六〇	三〇、九二五	三二、八七三
一一	一六	一九
四、一〇七	四、四二七	四、四九〇
四八	五三	五二
五〇、四一六	五二、六二六	五五、七〇二
二九、八八二	三一、九八七	三四、一九三
七、七〇五	七、六五〇	七、六七七
三三	二八	四〇
九、五一六	九、八九九	一〇、二四五
三七	四八	五四
一一、一六三	一一、五六二	一二、一〇八
二七、三二六	二八、六〇八	三〇、七〇五
七、四七二	七、四二八	七、六七七
三三	四五	五四
四、一七一	四、五九八	四、六八八
三三	三九	四〇
一〇、〇二五	一〇、七五一	一一、二二三
二七、一九八	二八、五九五	三〇、七〇五
一四、一七二	一四、七、八七八	一五、三、三五二
五五	七三	九四
一三、六八七	一四、四九七	一四、九三三
七二	八七	九四
一一、四一八	一二、一三〇	一二、三七一
五七、一九八	六〇、五九五	六四、八九八
一四、三、七七	一四、七、八七八	一五、三、三五二
五五	七三	九四
一三、六八七	一四、四九七	一四、九三三
七二	八七	九四
一一、四一八	一二、一三〇	一二、三七一

第三章 市政の沿革

一 市の成立

大正九年七月臺灣地方官官制改正と共に、律令第五號を以て臺灣市制公布せらるゝや、市役所を現在の臺北市樺山町六十九番地(當時三板橋字大竹圍)に設置し、樺山小學校の建物を襲用して之を市廳舎に充て、『臺北市役所』の大標札が墨痕鮮かに掲出せられ、茲に市の新装を見たり。同年九月一日の吉辰を以て之が開廳式を舉行せり。

越えて十月一日市制の實施を見るや、全市到る處歡呼の聲に滿ち、市民舉つて市の前途を祝福せり。斯くて同日午前十一時より樺山小學校に於て、田臺灣總督臨場の下に市民大祝賀會を開催せり、式は武藤市尹の式辭次て田總督の訓示あり、了つて直に開宴に移り、先づ市内學校生徒の『君が代』の合唱に初り、次て市尹の發

聲にて『天皇陛下萬歲』三唱、總督の發聲にて『臺北市萬歲』を唱へ和氣霽々たる中に宴を了れり、この日朝來降雨ありたりしも來賓は總督を初めとし官民約一千餘名にして頗る盛會を極めたり。又當日午後六時より臺

總督諭告

諭告第三號

我臺灣帝國ノ版圖ニ屬セシ以來歴代ノ總督夙夜懈ラズ覆幬厚仁ノ聖旨ヲ奉體シ但タ厥愆無カラントナ惟レ畏レ專ラ疆土ノ安寧ヲ保持シ民衆ノ福祉ヲ増進シ拮据經營茲ニ二十有五年今ヤ庶績漸ク舉リ産業日ニ興リ教化盛ニ行ハレ人文愈々彬ナリ之ヲ領臺始政ノ初期ニ較レハ殆ント隔世ノ感アリ孰カ其進步發達ノ駿速ナルニ驚歎セザラン然レハモ更ニ思チ潛メテ我明治維新以後ニ於ケル國運ノ發展ト文明ノ開進トニ對照セハ其間尙ホ逕庭アルヲ覺ニ是レ畢竟海外ニ孤懸シ久シク世界ノ文明ト隔絶スルアリ且ツ我ヲ統治ノ日亦タ淺キニ由ルノミ敢テ之レヲ恠ムニ足ラスト雖苟モ生チ茲土ニ享クル者豈夫レ奮然トシテ作興セサルヘケンヤ

竊ニ惟ミルニ大凡ソ事ニ本末アリ物ニ前後アリ先ツ其根幹ヲ培ヒ而シテ後枝葉ニ及ササルヘカラス本總督ハ深ク世運ノ進轉ト本島民衆ノ實狀トニ鑑ミ謹テ

聖裁ヲ仰キ曩ニ地方官制ヲ改正シ今復々新ニ州制及ヒ市制街庄制ヲ制定公布シ正ニ本日ヲ以テ其實施ヲ見ルニ到レリ新制度ニ於テハ初メテ地方公共團體ノ成立ヲ認メ以テ自治ノ基礎ヲ確立セリ則チ其結果トシテ地方分權トナリ文治的施設トナリ處務簡捷トナリ公共團體其ノモトニ於テハ法定ノ人格トナリ隣保共同ノ主體トナリ公共事業ノ自營トナリ克ク官民分治ノ珍域ヲ明ニシ據テ以テ公益ヲ伸暢シ教化ヲ宣敷シ社會ノ安寧ト民衆ノ福祉トヲ増進スルノ途ヲ開ケリ

北公園に市民參集提灯行列を舉行す參加人員約一萬人を算し頗る盛觀を呈せり。大正九年九月一日臺北市尹武藤針五郎氏以下理事官技

師、屬等の任命あり、次て同年十月一日臺北市協議員員稻垣長次郎氏外二十九名の任命ありたり。

斯くて同年十月一日臺北市訓令

報附錄臺北市報に掲載するを以て公告式となす旨定めたり。

抑モ地方公共團體ハ國家組織ノ一分子ナルヲ以テ其健全鞏固ナル發達ヲ遂クルト否トハ直ニ國運ノ汚隆ト富強ノ消長トニ至大ノ關係ヲ有ス而シテ地方公共團體ノ發達ヲ促サント欲セハ先ツ其ノ民衆タル者須ク郷國ヲ愛護シ私ヲ捨テ公ニ徇シ小ニシテハ隣保相佑ケ大ニシテハ義勇公ニ奉シ健全ナル公德心ヲ發揮シ進テ忠良ナル臣民トシテ敢テ國家ノ責務ニ任スルヲ要ス是レ

明治聖帝ノ宣示シ給ヘル教育勅語ノ神髓ニシテ古來ノ聖賢乃チ修身齊家ノ道ヲ説キ直ニ以テ治國平天下ノ根源ト爲シタルモノト其揆一ナリ顧フニ我帝國カ立憲法治ノ制ヲ敷キシ以來既ニ幾多ノ星霜ヲ過セリ其間法制上政治上臣民ノ權利ハ漸ク擴張セラレ隨テ其義務モ亦漸ク嚴明チ加ヘタリ是レ立憲制ノ通則ニシテ國運ノ發展民力ノ増進皆之ニ因テ發生シ社會ノ安寧民衆ノ福祉亦之ニ因テ保障セラレ若夫レ權利ノ擴張アルヲ知テ其負荷スル所ノ義務ヲ忌避スルカ如キアレハ何ヲ以テ國家ノ重器ニ任シ臣民ノ責務ヲ盡シ海外ノ萬邦ト對峙シテ帝國ノ光輝ヲ發揚スルコトヲ得ンヤ深ク猛省セルヘカラス

本總督茲任日尙ホ淺シト雖熟々全島ノ民情ヲ視察シ其ノ忠順公ニ奉シ勤勉業ヲ勵ミ教化日ニ普ク人文月ニ進ミ風化最モ順境ニ在ルヲ洞觀シ漸次立憲法治ノ民タルノ資質アルヲ認識シ爰ニ新制度ヲ實施スルニ到リタルハ寔ニ欣躍止ム能ハサル所ナリト是ニ於テ本總督赤心ヲ披瀝シ敢テ一般官民ニ誥ク庶クハ能ク斯旨ヲ體得シ其慶ヲ享受シ忠實履踐其利ヲ擴メ其弊ヲ除キ國家ノ爲メ民衆ノ爲メ本制度ヲシテ克ク有終ノ美ヲ收メシメ更ニ進テ一層改善進步ノ境ニ達センコトヲ

第一號を以て臺北市事務分掌規程施行細則を定め、市に庶務、財務の二課を置く。又同日臺北市告示第一號を以て臺北市公告は臺灣日々新

臺灣總督 男爵田 健治郎

二 市制施行後の重要事歴

一四

大正九年

△十月一日第一回國勢調査を執行す。△十月二十日久邇宮殿下御台臨あり同日臺灣神社へ御參拜、二十一日臺北公園に於ける體育協會發會式に御臨場あり、同夜直轄學校及小學校の提灯行列を台覽に供したり、翌二十二日南部御巡啓の途に向はせらる。△十月二十七日久邇宮殿下には南部御巡啓を了はらせられ御歸北あらせらる、翌二十八日は臺灣神社大祭につき殿下には御參拜、次て博物館に御成り二階ベランダに出御臺北艦艀検査の手踊、本島人固有催物行列竝に鹿兒島縣人の棒踊等を台覽に供す。三十日は市内小學校聯合運動會三十一日は公學校聯合運動會へ御臨場を忝うし、翌十一月一日臺北驛御發、基隆にて香港丸に御座乗御歸還あらせらる。△十二月五日本年八、九月の兩月に於ける、本島暴風雨の爲被害不尠趣被聞食、天皇皇后兩陛下より御下賜相成たる罹災者救恤金壹萬貳千圓の内金參百五拾四圓を本市管内へ配付せられたり。

大正十年

△三月二日英國軍艦カーライル號基隆入港艦長以下幹部六名卒約百五十名上陸來北せるを以て大に之を歡待せり。△三月十五日英國大使エリオット博士來臺鐵道ホテルに於て歡迎會を開催せり。△三月二十二日向井侍從武官來臺。同日帝國第二遣外艦隊新高春日の二艦及勞山丸基隆入港兩艦長以下將校二十名准士官十六名下士以下四百四十名來北臺灣神社參拜市内巡覽せるを以て大に之を歡待す。△四月二十六日及二十九日鐵道協會々員團長男爵辻良太郎以下二百二十餘名來北、五月三日鐵道ホテルに於て歡迎會開催出席四百名餘頗る盛會を極めたり。△五月十日柴軍司令官の送別會を開く。△六月三日福田軍司令官著任せり。△六月十三日帝國軍艦須磨及唐崎竝潜水艇三隻基隆入港松村司令官以下將校兵卒多數來北せるを以て大に之を歡待せり。△六月十七日臺北市規則第四號を以て、臺北市常設委員規程を定め勸業委員二十五名、學務委員十八名、衛生委員二十名、土木委員十七名、社會事業委員二十名、財源調査委員十八名の任命あり。又同日臺北市規則第五號を以て臺北市町委員規定を定め町委員九十四

一五

名の任命を見たり。△七月七日特務艦野島丸基隆入港艦長以下將校准士官十二名下士卒百名餘來北せるを以て之を歡待せり。△七月二十二日下村賀來新舊總務長官著北臺北驛に出迎ひ盛んなり。△十月十二日比律賓總督ウッド將軍米艦ニユー、オルリアンス號にて基隆入港來北直に米國領事館に入り正午は軍司令官の午餐會に午後は總督晚餐會に臨み午後六時臺北發歸艦せらる。△十一月十五日日軍艦利根基隆入港艦長八角大佐以下將校三名卒百八十名來北鐵道ホテルにて茶菓の接待をなせり。

大正十一年

△二月九日山縣元帥國葬日なるを以て偕行社に於て神式にて遙弔式執行參拜者約四百名に達せり。△二月十日臺北市及七星、海山、新莊郡の一市三郡蔬菜聯合品評會を西門市場構内に開く。△六月六日特務艦野島丸基隆入港乗組員將校八名下士以下百名來北鐵道ホテルに於て接待せり。△六月二十八日市召集事務査閲あり査閲官西原少佐以下七名佐藤參謀長も臨場せり。△七月三日東伏見宮殿下御葬儀當日なるを以て全國歌舞音曲停止せらる。△七月三十

日明治天皇十年式祭遙拜式を新公園に於て執行す。△九月三日大橋理事官國勢院事務官兼祕書官、大藏省事務官に榮轉發表。△九月六日村田遞信局監理課長の市理事官後任發表あり。△十一月二十七日日本朝寒氣強く室内四十六度大屯山に降雪平地に降霜ありたり。

大正十二年

△一月十五日米國觀光團約四百名來北せり。△一月二十日帝國練習艦隊磐手、淺間、出雲の三艦基隆入港司令官谷口中將以下將校約五十名士官候補生二百名准士官十六名來北各所觀光樺山小學校に於て中食の接待をなす。△一月二十四日皇太子殿下行啓記念圓山運動場の地鎮祭を執行す。△一月二十七日より二月三日迄連日皇太子殿下奉迎準備打合會を開く。△二月十四日伏見大宮殿下國葬日なるを以て偕行社に於て遙拜式舉行當日歌舞音曲を停止し市中弔旗を掲揚せり。△二月二十五日西園寺式部次長戸田式部官八田侍醫等賀來總務長官と共に來臺直に鐵道ホテルに入り暫く休憩後臺灣神社參拜圓山運動場太平公學校等下檢分を爲せり。△四月二日北白川宮殿下、同妃殿下、朝香宮殿下佛國

御留學中(四月一日)御召自動車並木に衝突成久王殿下は二十分後御薨去被遊妃殿下竝朝香宮殿下御重傷を負はせられたる爲 皇太子殿下本島行啓御延期の旨發表あり本日より三日間宮中喪仰出さる。△四月六日 皇太子殿下臺北市奉迎委員會規程を定め、會長、副會長、委員、幹事、書記を置き、事務分掌を總務係、土木係、設備係、運動會係、衛生係、會計係と定め著々奉迎準備を進行せり。△四月九日 皇太子殿下本島行啓御日程(四月十二日)御出門同月二十七日御還啓發表せられたり。△四月十六日

皇太子殿下御沙汰書

皇上

臺灣ニ巡幸セムコトヲ思ハセラルルモ未ダ果シタマハス今回予此ニ來リテ誠意アル歡迎ヲ受クルハ満足スル所ナリ
予親ク斯地ノ多數官民ニ接見シ地方ノ狀況ヲ視察シテ行政司法教育産業交通衛生等ノ成績並國防ノ充實昭著ナルハ既往官民ノ和衷協力ニ出ツルモノ多キヲ知リ心深ク之ヲ喜ブ將來益々相和協シテ共ニ文化ノ發達民生ノ安定ヲ圖リ遠邇均ク康福ヲ享ケ以テ 皇上仁愛ノ盛意ニ副ハムコトヲ望ム

午後一時二十五分 皇太子殿下基隆御著御上陸、基隆驛御乘車、臺北驛御下車特別鹵簿にて御泊所總督官邸に御著遊ばさる。田總督は御泊所に伺候し奉迎の辭を

臺北市尹奉迎文

恭ク惟ミルニ

皇太子殿下溫恭允塞元良ノ姿ヲ備ヘ少陽ノ位ヲ正シ仁孝自然ニ發シ明德内外ニ顯ハル曩年親シク泰西各國ヲ歴訪シ敦ク國交ヲ輯メ博ク文獻ヲ採ラセラレ車駕到ル處龜協ヒ箠從フ次テ萬機ヲ攝政セラレ夙興夜寐庶績咸熙リ萬邦瞻仰ス臺灣ハ改隸以來茲ニ二十有八載天南遠隔ノ地ニ孤懸シテ克ク一視同仁ノ雨露ニ沐シ長利ヲ建設シ文教ヲ廣敷スルヲ得タリ

先帝

今上ノ兩朝ニ於テ島民ノ災告ニ遭會スル毎ニ則チ必ス内帑ヲ頒賜シ格外ノ優卹ヲ行ハセラル聖恩洪大誠ニ恐懼憂惶ニ堪ヘス今茲又何ノ幸カ陽春脚アリ澄海波ナク臺灣ノ臣民辱クモ

殿下ノ威儀ニ咫尺シ得ントハ是レ實ニ空前ノ恩寵千載ノ盛事ニシテ三百五十萬ノ島民カ歡天喜地自ラ措ク能ハサル所思フニ臺灣ノ風氣此ヨリ一新シ奉公ノ念益盛ナルモノアラシ臺北市ハ全島ノ首府統治政策ノ發祥地ニシテ市民感激特ニ切ナルモノアリ唯當ニ奮勵努力以テ皇運ヲ扶翼シ天恩ノ萬一ニ報效センコトヲ期スヘキノミ伏シテ冀クハ

殿下皇天ノ眷佑ニ賴リ康壽萬福ニ渡ラセラレン事ヲ臣針五郎臺北市民ヲ代表シ誠恐誠惶恭シク奉迎ノ微詞ヲ進ム區々ノ忱倘睿鑒ヲ賜ハラハ則チ天南ノ臣子子々孫々億萬斯年咸餘榮アラシ

大正十二年四月十八日

臺北市尹從五位勳四等

臣武藤針五郎

奉呈し夜に入つて臺北市官民二萬の提灯行列を齎はす。此の日 天皇陛下より本島社會事業及教育獎勵の思召を以て金十萬圓を御下賜相成り、臺灣神社へ先帝の御服一領、太刀一振を奉納遊ばさる。△四月十七日 皇太子殿下には臺灣神社御參拜、總督府御成臺北市内學校生徒兒童の奉迎旗行列を

御台覽次で植物園内臺灣生産品展覽會、中央研究所農業部へ行啓あらせられ、芝山巖へ御使御差遣あらせられたり。同夜御泊所に於て清樂演奏を御聽聞に達せり。

△四月十八日 皇太子殿下には中央

研究所、臺北師範學

校、同附屬小學校、太

平公學校、軍司令部、

高等法院、臺灣教育

品展覽會、醫學專門

學校へ行啓あらせ

られ、御泊所にて蕃

御發車中南部及澎湖島御巡啓の途に就かせられたり。△四月二十四日 皇太子殿下には御召艦金剛御坐乘澎湖島より基隆御著御召艦よりクルールベ一濱に御成

皇太子殿下奉迎歌

一

新緑かたる春四月 九重高き雲井より

八重の潮路をはるくこ ひつぎのみの此の島に

いでまし給ふかしこさよ 萬歳 萬歳 萬々歳

二

あふげば高き御光に 千草の花も百鳥も

舞ひつ歌ひつさりにくひ ひつぎのみの御榮を

こそほさまつる心地して 萬歳 萬歳 萬々歳

三

島の歴史にためしなき 榮ある今日の嬉しさを

三百餘萬島人は 心に銘じかたりつぎ

いひつぎゆかむ萬代に 萬歳 萬歳 萬々歳

人の舞踊を御台覽、

衛戍病院、警察官及

司獄官練習所、臺北

工業學校へ御使御

差遣あらせらる。

△四月十九日 皇

太子殿下には臺北

御泊所御出門午前

八時四十分臺北驛

り海上より佛國戰役將士の英魂を弔はせられ御召艇にて港内築港工事御巡覽重砲兵隊行啓基隆驛御乗車午前十一時三十五分臺北驛御著車臺北御泊所に入らせられ午後博物館に御成り次で圓山に於ける全島學校聯合運動會へ行啓御臺覽を仰ぎたり。△四月二十五日 皇太子殿下には草山及北投に御清遊途中基隆河に於て家鴨放飼を御台覽に供し御還啓後御泊所に於て島内官民七百名に御賜茶の榮を賜はりたり。△四月二十六日 皇太子殿下には歩兵第一聯隊御成營庭にて御閱兵、專賣局第一高等女學校、武德殿第三高等女學校御巡啓次で圓山に於ける臺灣體育協會陸上競技大會へ行啓御台覽を仰ぎ、御還啓後御泊所に於て總督以下官民八十名に御陪食仰付けられ次で市民の赤誠を罩めたる臺灣固有催物行列の台覽を仰ぎ嘉賞を賜はり金壹千圓の御下賜を忝ふし無上の光榮に浴したり。△四月日田總督を召され御沙汰書を賜はり、明石總督墓前に御使を差遣せらる。△四月二十七日 皇太子殿下には午前九時御泊所御出門九時十分臺北驛御發車基隆に於て御召艦金剛に御坐乘御還啓の途に上らせられたり。△四月二十八日午後三

時より總督官邸に於て 皇太子殿下奉迎關係官民壹千餘名を招待慰勞會を開催せり。△五月四日午後三時より鐵道ホテルに於て 皇太子殿下奉迎委員及關係者約三百五十名を案内し慰勞模擬店を開催せり。△八月六日福田軍司令官以下更迭發表ありたり。△八月二十八日加藤内閣總理大臣遙悼式を偕行社にて執行參列者軍司令官、總務長官以下二百二十有餘名。△八月二十八日鈴木新任臺灣軍司令官來任す。△九月一日東京地方大震災火災の報午後三時に到る。△九月二日山本内閣新任式は大震災火災の爲赤阪離宮芝生の上にて行はれ田臺灣總督は農商務大臣に親任せられたり。△九月三日東京地方大震災火災の報頻々として到り人心憂鬱に鎖され其の詳報を聞かんことを熱望するを以て臺北市役所に於ては災害情報事務を開始し市内に七箇所掲示板を特設し時々刻々に至る電報に依り一般市民に狀況を迅速に報導せり。△九月四日東京地方大震災火災の被害甚大なるを以て義捐金募集を爲す應募者市役所に殺到し義捐金取扱事務開始以來締切迄に本市に於て取扱ひたる市民の義捐金は十五萬四千九百九十一圓二十一錢官

吏側三萬七千九百四十四圓四十六錢民間側十一萬七千四百六十六圓七十五錢に達せり。△九月六日前民政長官内田嘉吉氏臺灣總督に親任發表せらる。△九月十三日關東地方震災避難民として基隆入港の備後丸にて本間國一外一名の渡臺を魁とし爾來便船毎に陸續渡來者あり漸次其の數増加の傾向あるを以て本市に臨時應急施設として罹災民の收容及職業紹介事務を開始す斯くて收容したる者二百二十六名に達し其の内就職せる者百十八名を算せり。△十月四日關東地方大震災救恤品に關する事務を開始す受附點數は衣類五千七百二點綿二十貫元丹(清涼劑)一萬五千袋を算す。△十月十五日内田新總督著任せり。△十一月二十八日ポーランド公使本島視察の爲來北せり。

大正十三年 △一月十七日 皇太子殿下御成婚奉祝の件に關し市尹室に市協議會員及町委員總代を招集し打合せを爲せり。△一月二十三日 東宮殿下御成婚奉祝の爲軍艦大井馬港より基隆入港將校二十名下士以下二百五十名來北臺灣神社へ參拜鐵道ホテルに於て中食を接待し陸軍側の案内にて市中を觀光せり。

△一月二十六日 皇太子殿下御成婚奉祝の爲臺北公園に於て官民合同の祝賀會を舉行參會者四千五百名を超へ空前の盛觀を呈せり、夜は市民提灯行列を行ひ總督府廳舎前廣場にて各團萬歳を唱へ左右に轉回し壯觀を極めたり參加人員二萬五千名に達せり。△二月十日一市四郡の蔬菜品評會を開催壽小學校に於て褒賞授與式を行ふ。△三月二十二日帝國第一艦隊陸奥を始め天龍、迅鯨、驅逐艦、潛行艇等二十餘隻基隆入港翌二十三日鈴木司令長官高雄より來北將校約二百名の歡迎會を開催す、本日より三日間に亙り將校以下水兵多數來北例に依り大に之を接待せり又市中及驛頭は軍艦團體拜觀の爲極めて雜鬧せり。△四月十六日 皇太子殿下行啓第一回記念日に相當するを以て臺灣神社に於て献燈式を舉行し行啓記念圓山運動場に於て市内學校生徒兒童の聯合運動會を開催せり。△四月二十七日特命檢閱使財部海軍大將一行高雄より來北せり。△五月七日植物園内物産陳列館にて家庭副業展覽會を開催す。△五月三十一日 皇太子殿下御成婚奉祝晚餐會を鐵道ホテルに於て開催出席者約五百名頗る盛會を極む、市中は御饗宴期間

中五日間一般に國旗提燈を掲げ各町筋には電飾を施し晝夜花火を打揚げ、臺北公園には餘興舞臺を設け毎夜各種の餘興を催し各町團體並本島人團體は相競ふて行列催物屋臺等市中を練り廻り全市舉て奉祝の誠意を表し非常の賑を呈したり。△七月十二日松方公爵七月二日薨去國葬に決定遙弔式を偕行社に於て施行す。△八月五日暴風雨襲來新店溪氾濫の爲富田町は百餘戸全潰市中十三日 天皇皇后兩陛下より暴風雨罹災者御救恤として御下賜金三千七百圓の内金百二十四圓を本市へ配付せらる。△九月一日伊澤多喜男氏臺灣總督に任せられ内田總督依願免官となる。△九月六日暴風雨あり前回より雨量少なきも風

御大典奉祝童謠

臺北市樟山尋常小學校

尋三 宮 下 清 次

めでたいごんぎ

花も鳥もよろこんで

笑つて歌つておめでたい

浸水家屋夥しく被害頗る多し。△八月二十日第二十師團長菅野尙一氏臺灣軍司令官に補せられ鈴木軍司令官朝鮮軍司令官に榮轉す。△八月二

強く幸に浸水は少なかりしも市内各所に被害ありたり。△九月十九日賀來總務長官依願免官となる。△九月二十二日總督府事務官後藤文夫氏總務長官に任せらる。△十月十日暴風雨罹災御救恤として御下賜金一萬圓の内本市へ金百六十圓六十錢を配付せらる。△十月十二日全國新聞協會大會を本島に開催するを以て内地より會員六十六名來北せり。△十二月五日行政整理行はる。△十二月二十三日武藤臺北市尹臺灣總督府土木局長に榮轉發表せらる。△十二月二十五日臺灣總督府官制改正せらる。同日新竹州警務部長太田吾一氏臺北市尹に補せられ、村田理事官臺北市助役を命ぜられたり。

大正十四年

△一月四日恒例に依る消防出初式を舉行し併て十五年勤績者表彰式を行ふ。△二月十一日社會事業獎勵の御思召を以て臺北仁濟院外七團體に三千四百圓御下賜ありたり。△二月二十四日東園園藝研究會及品評會を開催す。△三月六日第一遣外艦隊對馬基隆入港野村司令官以下來北翌七日八日乗組員來北例に依り鐵道ホテルに於て招待す。△三月九日佛領印度支那答禮使山縣

公爵一行歸途本島視察の爲來北鐵道ホテルに於て官民有志合同歡迎會を開く。

△四月一日臺北市大橋公學校を新設す。△五月九日秩父宮殿下奉迎に關し市協議員並町委員總代を鐵道ホテルに招集打合會を開けり。△五月十日 天皇皇后兩陛下御結婚滿二十五年式臺北市官民合同奉祝會を臺北公園に於て開催出席者約二千名にして非常の盛會を極む當日全市國旗を掲揚し晝夜奉祝花火を打揚げ、夜は市内學校生徒兒童約九千名より成る提燈行列を催し、市中は各種の假裝行列にて頗る賑ひを呈し奉祝の誠意を表せり、又文武官一同より献上品を奉呈せり。△五月三十日秩父宮殿下には英國御遊學の御途次本島御巡視遊ばさる。本日御召艦出雲にて基隆へ御入港御上陸、基隆驛御乘車臺北御著御泊所總督官邸に入らせられ直に臺灣神社御參拜途中家鴨放飼を台覽に供し、次で總督府へ御成り諸員に拜謁を賜はり、軍司令部、歩兵第一聯隊、師範學校、專賣局、商品陳列館、博物館、中央研究所等の御視察を了はらせられ、御泊所に於て市内本島人一千餘名より成る本島固有催物行列を台覽に供し、夜は市民の熱誠を罩めたる提燈行列を行ひ御旅情を

慰め奉れり、この参加人員二萬三千餘名を算し頗る盛觀を呈せり。翌三十日は圓山運動場に御成りを仰ぎ市内小公學校聯合運動會を御台覽に供したり、斯くて同日午前九時三十分臺北驛御發角板山御巡視の途に上らせられ、次で中南部地方及澎湖島の御巡視を了へさせ給ひ、六月三日軍艦出雲に御乘艦澎湖島御出發香港に向はせられたり。△六月十六日第三十回始政記念式を舉行、記念展覽會を本市に開催す會期中連日連夜各種の催物餘興等にて市中雜鬧を極む。△六月十八日臺北橋開通式を盛大に舉行す。△九月十五日朝來暴風雨、雨量多き爲東園町、川端町等浸水家屋多數、焚出救助約八百名に達せり。△九月十九日伊太利飛行機淡水港に著し鐵道ホテルに於て歡迎會を催す。△十月一日市制五週年記念懇親會を開催す。△十二月六日皇孫内親王殿下御誕生の公報あり、花火を打掲げ市民に之を周知し各戸國旗を掲揚祝意を表せり、越へて十二日御命名奉祝會を臺北公園に開催出席者二千餘名にして頗る盛會を極む。△十二月二十二日臺北市助役村田三郎氏臺中州南投郡守に榮轉し臺北州七星郡守石川定俊氏臺北市助役を命ぜらる。

大正十五年

(昭和元年)

△一月二十八日加藤内閣總理大臣薨去の報到る、二

月二日遙悼式を日蓮宗法華寺に於て執行す。△二月十一日第一回市民講演會を樟山小學校講堂に開く來聽者六百餘名あり盛會を極む。△三月二十一日軍艦春日基隆入港乗組練習生來北恒例に依り鐵道ホテルに於て接待す。△三月三十一日臺北市事務分掌規程改正庶務課、教育社會課、土木水道課、衛生課、財務課の五課を設置す。△四月十六日高松宮殿下には第一艦隊の南方巡航に際し、海軍少尉として軍艦扶桑に御乗組遊ばされ四月五日を以て馬公に御著以來高雄、屏東、臺南、臺中、鳳山等順次御巡視更に御召艦にて東臺灣海岸近く御通過四月十五日基隆御著外港に御假泊本日御上陸御召列車にて臺北御著御泊所總督官邸に入らせられ次で臺灣神社御參拜總督府に御成り諸員に拜謁を賜はり軍司令部、山砲兵大隊、歩兵第一聯隊、專賣局、臺北師範學校、醫學專門學校、太平公學校等の御巡視を了はらせられ御泊所に於て本島固有催物行列を台覽に供し夜は參加總人員二萬二千餘名の提燈行列を御覽に供し御旅情を慰め奉れり。翌十七日は植物園内商品陳列館、高等

法院、博物館、中央研究所等御成り遊ばさる。當日圓山運動場に於ける學校生徒兒童の奉迎運動會は雨天の爲中止せられたるを以て御泊所に於て活動寫眞御覽の上午後二時三十五分臺北驛御發、基隆御著築港御巡覽の後御乘艦四月二十日を以て御拔錨遊ばされたり。△四月十八日帝國第一艦隊歡迎會を梅屋敷に於て開催す、折悪しく本日は風雨の爲旗艦長門以下の各戰艦より岡田司令長官を首め各將校の上陸不能の爲出席無かりしも、司令長官代理古川司令官以下四百餘名の將校來著主催者側は後藤總務長官を首め官民三百餘名にして頗る盛會を極めたり。△四月二十三日日本米穀大會を本市に開く、二十四日州市主催にて參列員志村會頭以下二百名を梅屋敷に招待し園遊會を開催せり。△五月四日武藤前市尹逝去せらる越へて六日三橋町葬儀堂に於て葬儀を營む會葬者約八百名に達し盛儀を極む。△六月十日李玉殿下國葬日なるを以て廢朝仰出され歌舞音曲を停止せらる市民一般弔旗を掲揚弔意を表せり。△七月一日市營東門町水泳場新築工成り開場式を舉行す。△七月十六日伊澤總督東京市長に就任貴族院議員上山滿之進氏

總督に任ぜらる。△七月二十八日管野軍司令官軍事參議官に轉補田中國重中將臺灣軍司令官に親補せらる。△十月二十七日北白川宮大妃殿下には軍艦淺間にて基隆御入港御上陸夕刻御泊所總督官邸御著當夜市民一萬三千餘名の奉迎提灯行列を御覽に供し翌二十八日臺灣神社御參拜次で商品陳列館に御成り更に草山へ御成り遊ばされ御歸還の途次博物館に御成り南國の物變りたる陳列品を御台覽あらせられ終りて蕃族室南側ヴェランダに出でさせ給ひ、市民の熱誠罩めたる内地人各種催物、臺灣固有催物行列等を御覽遊ばされ御泊所に御歸還夜は裏庭に於て彰化煙火を御台覽に供し御旅情を慰め奉れり。斯くて二十九日臺北御發中南部へ向け御出發遊ばされたり。△十月三十一日大妃殿下には中南部より御歸還遊ばされ夜は御泊所に於て清樂を御聽聞に供し奉り、翌十一月一日には臺灣神社へ再度の御參拜明治橋袂にて家鴨放飼を御覽遊ばされ圓山運動場に於ける皇太子殿下行啓記念第三回聯合運動會場に御成を仰ぎ本市二萬餘名の各學校生徒兒童の運動競技を御台覽に供し奉り御歸途市内各女學校幼稚園聯合運動會場

たる臺北第一高等女學校に御成遊ばされ三千餘名の生徒園兒等の運動競技を御覽の上御泊所に御歸還午後一時半より全島に於ける主なる官民九十二名並同夫人に對し御賜茶の榮を賜はりたる後御旅裝を整へさせられ給ひ午後三時四分臺北驛御發基隆にて御召船に御乗船御歸還の途に就かせられたり。△十一月二十

大行天皇陛下崩御ニ付臺北市民ヲ代表シ謹

テ天機ヲ伺ヒ奉ル

右御執奏被成下度候

臺北市尹從五位勳五等 太田吾一

(宮内大臣宛)

二日全國中學校長會議を本市に開催せらる。

△十二月十五日臺灣神社に於て聖上陛下御

平癒祈願式を舉行す。同日市尹より天機奉

伺竝に皇后宮及皇太子殿下に御機嫌奉伺の

電報を奉呈せり。△十二月二十五日聖上陛

下本朝一時二十五分葉山御用邸に於て遂に崩御遊ばされたる旨發表あり恐懼措く所を知らず市民一般休業弔旗掲揚敬弔の赤誠を表す同日市民を代表し市尹より御弔電を奉呈せり。本日御踐祚式を行はせられ。大正十五年十二月二十五日以後を昭和元年と改元。△同二十七日臺北公園に式壇を設け奉悼式を舉行せり。

又各官衙學校奉悼式を舉行す。

昭和二年

△一月八日御踐祚の際賜りたる勅語奉讀式を樺山小學校講堂に

於て舉行す。△一月二十五日御大喪儀遙拜式の件に關し民間有力者十餘名を總

督府會議室に招集協議會を開催せり。△二月七日大正天皇遙拜式を臺北公園に

於て執行參列者官民約七千名にして式は頗る肅正莊嚴を極めたりこの日及八日

は官衙學校銀行會社及商店は休業喪章を附せる國旗及提灯を掲揚せり同日恩赦

の大詔下る。△二月十八日一市四郡蔬菜家禽品評會を臺北公園に開催す。△三

月六日社會事業御獎勵の思召を以て市内臺北仁濟院外十一團體に對し御下賜金

ありたり。△三月三十一日米國觀光團四百三十名來北す。△四月五日臺北市教

育會發會式を樺山小學校講堂に於て舉行す。△四月十三日帝國第二艦隊基隆入

港司令長官吉川中將以下幹部來北翌十四日將校五十六名及下士以下千二十六名

來北せるを以て大に之を接待せり次て十五日も士官兵卒來北前日同様接待をな

す。△四月十八日臺灣銀行内地及外國支店三週間休業上山總督臺灣銀行問題に

就き諭告を發す。△五月九日財界安定せる爲全島の實業家百餘名鐵道ホテルに總督以下關係幹部を招待せり。△五月十五日大龍峒孔子廟上棟式舉行。△六月十五日納涼展覽會及發明品展覽會を開催す。△六月二十五日臺北市事務分掌規程改正の結果臨時水道擴張課の新設を見たり。△七月二十七日太田臺北市尹は高雄州知事に榮轉、田端臺北州内務部長は臺北市尹に補せられ同時に石川助役は新竹州に榮轉、長谷川東港郡守臺北市助役に任命發表あり。△八月六日七星郡役所落成式を舉行。△九月十五日本市の依囑を受け内地市政視察員谷河梅人氏一行臺灣神社に參拜當日出發す。△十一月一日朝香宮鳩彦王殿下には御召船瑞穗丸にて基隆御入港午後四時三分臺北驛御著總督官邸御泊所に入らせらる。二日總督府御成諸員に拜謁を賜はり高等法院、軍司令部、臺北第一中學校、師範學校附屬小學校、山砲隊、歩兵第一聯隊、醫學專門學校等を順次御視察圓山運動場に於ける皇太子殿下行啓第四回記念運動會場に御成り臺北市に於ける中等學校以下二十七校參加生徒兒童約一萬三千名の運動競技を御台覽御歸路を樺山小學校講堂に

於ける第一回臺灣美術展覽會場に枉げさせられ御覽の上御泊所に御歸還遊ばされたり。翌三日臺灣神社御參拜次で商品陳列館植物園專賣局太平公學校博物館中央研究所を御巡視遊ばされ御泊所に御歸還あらせらる。四日午前八時二十分臺北驛御發中南部の御旅に上らせられたり。越て十一月十三日中南部の御巡視を了へさせ給ひ午後五時十五分御歸北直に草山へ向はせられ貴賓館に御宿泊翌十四日淡水ゴルフリングに御成り後藤總務長官を御對手にシングルプレーを遊ばされ草山御泊所へ御歸著遊ばされたり。次て十五日御微行にて淡水ゴルフリングに御成り正午迄御清遊零時四十分北投公共浴場に御成りの上臺北へ御歸還御泊所へ入らせらる。この日御泊所に於て官民百六十餘名に御賜茶の榮を賜はりたり。十一月十六日午後一時十四分臺北驛御發基隆に於て各所御巡視同三時四十分御乗船御歸還の途に就かせられたり。△十一月十八日内地市政視察員村松一造、谷河梅人、郭廷俊三氏の報告會を開きたり。△十二月二日松尾熊本市電氣局長來北す、越へて八日都市交通に關する講演會を開催せり。△十二月十四日古

刹龍山寺の新營落成式を舉行す總督軍司令官以下官民五百餘名列席頗る盛儀を極む。△十二月二十五日大正天皇御一年祭遙拜式を臺北公園に於て舉行す。

昭和三年

△二月八日米國觀光團三百二十五名ベルゲンランド號にて基隆入港來北市内觀光せり。△二月十二日貴族院議員青木信光氏外三名來臺せり。△二月十六日社會事業御獎勵の思召を以て本市管内臺北仁濟院外十一團體へ御下賜金ありたり。△二月二十四日臺北公園に於て花卉盆栽品評會を開催す。△二月二十七日朝鮮教育視察團一行十四名來臺す。△三月八日第二皇女久宮祐子内親王殿下薨去遊ばさる本日市民は弔旗を掲揚し歌舞音曲を御遠慮申上げ弔意を表せり、越へて十三日御喪儀當日も市民は弔旗掲揚歌舞音曲を御遠慮申上げ臺北市尹より天機奉伺御機嫌奉伺の電報を奉呈せり。△四月一日米國觀光團一行約四百名來北せり。△四月二日帝國第一艦隊基隆入港御座乗の久邇宮朝融王殿下には加藤司令長官以下幕僚と共に臺北驛御著直に御泊所總督官邸に成らせられ夫れより臺灣神社御參拜北投及草山へ御成り遊ばされ御泊所に御歸還御泊所

に於て御機嫌奉伺を受けさせられ同夜總督の御招宴に臨ませらる翌日午前九時二十二分御發中南部へ成らせられたり。同日第一艦隊乗組員半舷上陸約九百名の將卒來北臺灣神社參拜動物園參觀市中觀光をなす恒例に依り將校には午餐下士以下には茶菓を呈せり、四日も前日通り將卒を接待せり。同日午後三時より梅屋敷に於て加藤司令長官以下將校の歡迎園遊會を開催頗る盛會を極めたり。△四月六日久邇宮朝融王殿下には午前十一時十二分中部より御歸還臺北驛に於て三分間御停車基隆へ向はせられたり。△四月七日曩に(四月二日)基隆入港の獨逸練習艦乗組軍樂隊一行を聘し公園音樂堂に於て奏樂盛會を極む。翌日獨逸軍艦乗組士官及候補生百餘名來北接待大に努めたり。△四月十五日航空戰隊初めて基隆へ入港す、翌十六日及十七日司令官以下乗組隊員來北例に依り臺灣神社參拜市中觀光中食の接待をなせり。△四月二十七日久邇宮邦彥王殿下には臺灣軍特命檢閱使として御召船蓬萊丸にて基隆御入港午後四時十五分臺北驛御著御泊所たる總督官邸に入らせらる。四月二十八日臺灣神社御參拜御歸還直に御泊所大

廣間に於て軍司令官以下將官上長官に單獨拜謁を、尉官に列立拜謁を賜ひ、裏ペラ
 ンダに於て上山總督以下に單獨拜謁又は列立拜謁を賜ひ、總督府廳舎前廣場に於
 ける觀兵式場に御成り御閱兵の上御歸還遊ばされ、午後三時より植物園内に催さ
 る、總督主催の諒闇明け初めての天長節奉祝園遊會へ御成り遊ばれ、夜は三萬の
 市民より成る奉祝提燈行列を台覽に供し奉れり。翌四月三十日は自動車にて草
 山へ向はせられ、貴賓館に入らせられ一日を過させ給ひ歸途北投を經由御泊所に
 御歸還遊ばされたり。五月一日軍司令部、總督府へ御成り軍司令部に於ては所定の
 檢閲を行はせられ給ふ。五月二日軍司令部に御成り終日同部に於て御過し給へ
 り。五月三日守備隊司令部に御成り御檢閲。五月四日臺北練兵場に御成り幹部
 候補生竝に初年兵の教練を御檢閲、午後は歩兵第一聯隊に御成り御檢閲遊ばされ、
 五月五日山砲兵大隊の御檢閲を遊ばされ、五月六日午前七時二十分臺北驛御發車
 御南下遊ばされたり。△五月一日長谷川助役は内地觀光團十五名を引率し出發
 せり。△五月五日練習艦八雲出雲基隆入港御乗組の高松宮殿下には午後四時十

分臺北驛御著直に草山に御成り御一泊翌六日午後四時總督官邸へ御著午後四時
 二十分より御機嫌奉伺を受けさせらる。同夜官邸に於て御晚餐會を催さる。次
 で七日御泊所御發水源地へ御成りありたり。六日七日兩日に亘り練習艦乗組將校
 及士官候補生等三百名來北蓬萊閣にて臺灣料理を接待せり。△五月十四日久邇
 宮殿下には中南部各部隊御檢閲を終らせられ午後二時四十分臺北驛御著御泊所
 に御歸還あらせらる。△五月十五日午前中臺北衛戍病院臺北衛戍刑務所を御檢
 閲、午後二時より總督府廳舎前に於て舉行さ
 る、臺北在郷軍人及中等學校以上各學校教
 練御親閱式に臨ませらる。分列式は參加十
 一學校四千四百餘名にして頗る嚴肅盛觀を
 極め了つて各學校竝に在郷軍人に對し令旨
 を賜へり。五月十六、七兩日は基隆部隊を御
 檢閲遊ばされ、五月十八日草山御成、十九日は

久邇宮邦彥王殿下
 學校への御令旨

茲ニ教練ヲ閱シ成績概ネ良好ナルヲ欣ブ
 願フニ心身ノ鍛鍊ハ剛健ナル國民ヲ養成ス
 ル所以ノ道ニシテ教練ノ本旨亦茲ニ在リ諸
 子克ク之ヲ體シ力ヲ協ハセ心ヲ一ニシ以テ
 其ノ目的ヲ達成セムコトヲ望ム

昭和三年五月十五日

久邇宮邦彥王殿下

在郷軍人分會長へノ御令旨

親シク此ノ地ニ臨ミ帝國在郷軍人會々員ヲ閱シ
 テ意氣頗ル壯ナルヲ悦フ諸子常ニ本島特殊ノ情
 勢ヲ稽ヘ思テ責任ノ重大ナルニ致シ心身ヲ鍛鍊
 シ軍事ノ研究ヲ怠ラス一意奮勵愈々奉公ノ誠ヲ
 效シ重任ヲ完ウセムコトヲ望ム

昭和三年五月十五日

所へ御歸還遊ばされたり。五月二十八日御泊所御滞留。五月二十九日海山郡鶯歌原野に於ける歩兵山砲兵聯合演習御實視の爲御成遊ばされ午前十時八分臺北驛御著御歸還午後一時二十分御發草山に御成貴賓館に御一泊遊ばさる。五月三十日午後一時草山御發北投經由にて同五十分御泊所御著上山總督に對し令旨を賜はる午後三時より御泊所に於て奉迎關係者約三百名に對し御賜茶の御儀あり。五月三十一日田中軍司令官々邸に於ける御餐會に臨ませられ午後六時三十分よ

り御泊所に於て文武高官四十七名に對し御賜餐ありたり。△六月一日約一箇月間に亘りて臺灣軍各部隊御檢閲各所の在郷軍人學校教練御親閱遊ばされたる久邇宮殿下には午前七時四十六分御泊所御發臺北驛御發車基隆にて御召船扶桑丸に御乗船御歸還の途に就かせられたり。△六月十六日上山總督退官貴族院議員三村竹治氏臺灣總督に親任せらる。△六月二十六日後藤總務長官退官河原田稼吉氏總務長官に任命發表せらる。△七月五日川村新總督著任す。△七月十四日建功神社鎮座式舉行總督軍司令官以下各州知事文武官參列員遺族等約一千名頗る盛大に執行せらる翌十五日は臨時例祭執行兩日共各種奉納餘興等あり植物園及臺北公園は非常の賑を呈せり。七月十六日成毛拓殖局長官來北翌十七日太平公學校及西門町市場を視察す。△八月九日獨逸大使ゾルフ氏來臺翌十日市内を巡視す。△八月十日田中軍司令官軍事參議官に轉補菱刈中將臺灣軍司令官に親補せられ同十八日著任す。△九月十一日基隆臺北間縱貫道路開通式を舉行す。△九月二十一日日本西部水産大會を本市に開催せらる。△十月一日水野前文相

全國港灣協會々長とし
て來臺翌二日全國港灣
大會開催頗る盛會。△
十月二十七日臺灣美術
展覽會開催せらる。△
十一月一日 聖上陛下
御大禮臺灣神社に於て
祭祀執行せらる。午前十
時樺山小學校講堂に於
て總務長官臨場高齢者
に對し天杯及酒肴料傳
達式を行ひ。午後一時
市役所員奉拜及參賀奉

御大典 行進歌

一 秋蘭に菊薫る
今日の住き日にかしこくも
我が日の御子は御大典
あげさせ給ふいざ祝へ

二 我が大君は新らしき
御代のはじめにたふさくも
神酒神饌すゝめ皇神を
祀らせ給ふいざ祝へ

三 我が日の本は神代より
皇御國と定まりて
日々に新に進みつゝ
彌榮え行くいざ祝へ
萬歳萬歳萬々歳

祝式を舉行。同二時臺
北公園に於て臺北市民
の萬歳奉唱式を行ひ頗
る盛觀を呈す。△十一
月十一日午前九時より
圓山運動場に於て市内
小學校聯合奉祝運動會
を開き又馬術會にては
奉祝競技會を催す。翌
十二日午前九時より市
内公學校聯合奉祝運動
會。十三日午前九時よ
り各中等學校以上聯合

奉祝運動會を開催し夜は臺北公園に於て仕掛花火を催し盛觀を呈す又本日より
十七日迄臺北公園に於て奉祝菊花展覽會を開催せり。△十一月十四日午前八時
臺灣神社に於て大嘗
祭の式を行せらる市
役所に於ては午前十
時所員最敬禮の裡に
勅語奉讀式を舉行せ
り。△十一月十五日
午後六時より臺北市
民奉祝提燈行列を行
ひ折り柄の降雨にも
名にして頗る盛會を極め 天皇陛下の萬歳を三唱し記念の木杯を一箇づゝ家寶
に頒ち各員光榮に感泣しつゝ順次退散せり。次で正午より臺北市民奉祝會を樺

御大典奉祝童謠

臺北市樺山尋常小學校
尋六 桑田花子

民の苦しみあはれとおぼし
けふも罹災地御視察なさる
おめぐみ深き皇太子殿下

寒さ如何にさあはれにおぼし
けふも罹災民の衣を縫はる
おめぐみ深き良子女王殿下

拘らず非常の盛觀を
極めたり。△十一月
十六日午前十一時總
督官邸にて臺北に於
ける饗饌の清宴を開
かるこの日賜饌の光
榮に浴せる人々は河
原田總務長官を始め
文武官民二千百八十

山小學校講堂に於て開催す。參會者は總務長官を初め文武官民二千餘名にして奉祝氣分堂に充ち非常の盛會長谷川臺北市尹代理の式辭。總務長官の發聲にて天皇陛下萬歳三唱和氣霽然歡喜の中に散會せり。△十一月十七日臺北市民の熱誠を罩めたる各種の催物も降雨の爲中止の止むなきに至りたるも熱せる市民は歇み間を利用し市中を練り廻り雜鬧せり午後六時三十分より總督官邸に於て奉祝夜會を催し頗る盛會なり。△十一月十八日前日來降雨の爲豫定の催物を舉行し能はざりし市民は早朝より各其の町を出發豫定の順路を踊屋臺、花車、囃屋臺、樽神輿、假裝行列、本島人固有催物行列等夫れ夫れ思ひ思ひの趣向を凝らし臺北公園に參集廣場に設けたる舞臺に於て餘興を演じ又は市中を練り廻る等全市奉祝氣分横溢し非常の雜鬧を極む。又公園には角力音楽等の催しあり盛觀を呈せり。因に本市よりは御大典奉祝として石川欽一郎氏謹寫に係る次高山油繪を献上したり。△十二月十日英國巡洋艦プーイルベル號基隆寄港艦長及副官來北せり。

昭和四年

△一月五日佛國大使ドビー大使竝に極東艦隊司令官艦長以下將

士の歡迎會を鐵道ホテルに開催せり。△一月二十七日久邇宮邦彦王殿下薨去遊ばされたる旨公表ありたり翌二十八日宮内大臣、皇后宮大夫、山田宮内事務官へ御弔電を發す。越へて二月三日故久邇宮邦彦王殿下の遙拜式を舉行す。參拜せる者二千餘名に達す。△二月四日英國大使チイレ一行の歡迎會を鐵道ホテルに開催す。△二月九日貴族院議員蘇峰德富猪一郎氏令夫人と共に來北同十一日正午鐵道ホテルに於て歡迎會を催す。△二月十八日臺北市事務分掌規程中改正市に庶務課教育課社會課勸業課土木水道課衛生課財務課臨時水道擴張課の八課を置く。△二月二十一日築地町魚菜卸賣市場地鎮祭を舉行す。△三月十四日魚菜卸賣市場代行會社創立總會を開く。△三月二十三日臺北公園に於て家禽品評會を開く。△四月一日錦尋常小學校及大安公學校を設立す。△四月十三日後藤伯爵薨去の報に接す。同十六日圓山臨濟寺に於て官民合同遙弔式を舉行す。△四月二十日田端市尹は新竹州知事に榮任、總督府事務官増田秀吉氏臺北市尹に補せらる。△四月二十八日増田市尹著任す。△五月十二日伏見宮博義王殿下樺艦長として基隆

へ御入港、顏國年氏邸へ御一泊あらせられ翌十三日午前八時十分臺北驛御著臺灣神社へ御參拜後淡水ゴルフリングへ御成遊ばさる、十二日より十五日迄四日間に亘り樺桐乗組將校下士卒市内見學鐵道ホテルに於て晝食の接待を爲せり。△五月十七日比律賓水泳選手一行來臺午後一時より鐵道ホテルに於て同選手一行竝に本島選手及關係者招待會を催す。次で十八日十九日兩日市營プールに於て臺北交驪水上競技大會を開催し頗る盛況を呈したり。△五月二十五日海軍記念日を迎ふるに方り馬公より軍艦北上基隆へ入港將校下士卒來北市内觀光鐵道ホテルに於て接待翌二十六日も同様之を歡待す、二十七日は海軍記念日市中國旗掲揚午前九時四十分臺北公園に於て祝賀會を開催す來會者約五百名頗る盛會を極む。△六月二日伊號六十一潜水艦基隆入港遠藤少將以下二十七名來北晚餐を接待す。本日鹿兒島縣町村長六十六名の一行本島軍隊慰問竝に視察の爲來臺す。翌三日鐵道ホテルに於て歡迎茶話會を開催せり。△七月八日川村總督告別式を總督府會議室に行ふ。△七月十日午後三時より川村總督招待會を鐵道ホテルに於て開

催參會者約七百餘名頗る盛會。翌十一日午前七時二十分發川村總督離臺せられたり。△七月十四日救世軍少將山室軍平氏來臺す。△七月十九日午後三時より鐵道ホテルに於て河原田總務長官送別會開催。翌二十日河原田總務長官上京す。△七月二十八日樺山小學校講堂に於て來臺中の全國中等學校地理歴史教員約六十名を招待す。△七月三十日川村總督本官を免ぜられ貴族院議員石塚英藏氏臺灣總督に親任せらる。△八月二十七日石塚新總督著任す。△八月三十一日多年本島各種事業の爲貢獻せられたる前臺灣電力株式會社長高木友枝氏は午前十時臺北發離臺す。△九月十七日武富參與官一行來臺す。△九月二十五日全國上水會議を總督府會議室に開く同夜上水會議參列者一同を蓬萊閣に招待す。△九月二十七日軍事參議官鈴木大將來北す。△九月二十八日上水協議會一行は長谷川助役案内にて草山水道擴張工事を視察す。△九月三十日第三皇女内親王殿下御誕生の公報に接す。△十月一日樺山小學校講堂に於て在職十年以上の小學校教員表彰式を行ふ。△十月二日神宮式年遷宮祭遙拜式を臺北公園に於て舉行

す、當夜參列したる官民は約三千名を算せり。△十月六日第三皇女孝宮和子内親王殿下御誕生奉祝會を臺北公園廣場に於て開會極めて盛會なり。△十月九日午前九時より全國圖書館長會議を總督府會議室に於て開催せらる夜各館長を江山樓に招待す。△十月十六日大日本山林大會を臺北高等商業學校講堂に於て開催せらる。同夜本島軍隊慰問の爲來臺せる熊本縣下町村長を蓬萊閣に招待す。△十月十七日山林大會參列員招待會を江山樓に於て催す。△十月二十三日東伏見宮妃殿下には御召船朝日丸にて基隆御著臨時列車に召され午後三時四分臺北驛御著御泊所たる總督官邸に入らせらる。御少憩午後三時五十分より石塚總督以下百二十四名に對し單獨拜謁を仰せ付けらる。十月二十四日午前九時十分御發臺灣神社御參拜後總督府に御成り遊ばされ夫々單獨列立拜謁を賜ひ御少憩表玄關御座所に於て市内各小公學校五學年以上の兒童竝に高等女學校一、二學年生徒七千餘名の奉迎旗行列を台覽遊ばされ終つて愛國婦人會臺灣支部同附屬幼稚園へ御成次で建功神社御參拜、商品陳列館、林產物展覽會御巡覽、臺北第二高等女學校、

博物館御巡覽の後同館ベランダに於て本島固有催物行列詩意閣を台覽増田市尹より御説明申上ぐ、終つて御泊所へ御歸還あらせられ夜は階上會議室に於て臺灣

東伏見宮妃殿下

御諭旨

愛國婦人會臺灣支部第二回會員總會に臨み諸氏と相見るを欣ぶ
當支部は夙に會旨の普及と會員の増加とに勗め其の基礎年と共に愈固く事業の成績亦頗る見るべきものあり
是れ皆融和協調の致す所にして尤も嘉すべきなり
尙世運の趨勢に察し更に一層の成果を収めむことを望む

昭和四年十月二十五日

代に特別御下賜金を授與せられ同十一時四十八分御退場御泊所へ御歸還遊ばさる。同日午後一時七分御發專賣局南門工場御巡覽の上草山へ御成貴賓館に於て

映畫を台覽遊ばさる。△十月二十五日午前九時十分臺北公園内に設けたる愛國婦人會第二回總會々場へ御成諸員に拜謁を賜はり次で有功章授與式々場に台臨菱刈顧問人見支部長以下五百餘名の會員へ有功章を一々御親授あらせられ御退場便殿にて御少憩後婦人會總會に臨御會員一同に對し御諭旨を賜ひ廢兵及戰死者遺族總

御休憩午後三時四十五分草山御發御泊所へ御歸還遊ばさる。次で午後六時十六分鐵道ホテルへ御成あらせられ階上貴賓室に於て英米蘭の三國領事及同夫人に拜謁を仰付けられたる後大食堂に於て總督以下二百六名に對し御賜宴あり同八時四十七分御泊所へ御歸還。この日殿下には仁濟院愛々寮公設質舖盲啞學校馬偕病院へ御使として後藤評議員を御差遣あらせられ。又節婦四名へ御紋章入御菓子御下賜ありたり。△十月二十六日妃殿下には午前八時四十分臺北驛御發中南部地方御成りの途に就かせられたり。本日臺北高等學校落成披露式を行ふ。△十月三十一日東伏見宮妃殿下には中南部の御旅行を了へ午後四時四十三分臺北驛御著御泊所へ入らせらる。△十月三十一日午前九時御發御微行にて商品陳列館に成らせられ御歸還御少憩の後御泊所御發同十時三十八分御召列車にて臺北驛御發新竹州下角板山へ向はせられ御一泊の上翌十一月一日午後二時四十八分御歸還遊ばされ夜は會議室に於て活動寫眞台覽客間に於て謠曲御聽聞あらせられたり。△十一月二日午後一時より階上應接間に於て總督府職員其他に對し

記念品を御親授遊ばされ斯くて午後二時五十五分御泊所御發臺北驛より御召車に御乗車基隆御著扶桑丸に御乗船御離臺遊ばされたり。△十一月七日全島産業組合大會を臺北高等商業學校講堂に於て開催せらる。

昭和五年

△一月十二日武藤教育總監本島視察の爲來臺同日新任松木臺灣電力株式會社長著任す。△一月十六日吉澤支那公使來北。△一月二十一日南門下水幹線工事起工式舉行。△一月三十一日武藤教育總監太平公學校視察せらる。△二月四日高松宮殿下御結婚奉祝會を鐵道ホテルに於て開催す參會者三百五十名頗る盛會を極む。△二月六日熊本第六師團長荒木中將來臺同日朝鮮京城商業會議所員來北す。△二月十一日建國祭を樺山小學校講堂に於て開催會するもの約四百名引續き社會教化團體及納稅功勞者表彰式を舉行す。△二月十九日米國觀光船オースタラリヤ號乗組員三百三十名來北各所觀光見學せり。△二月二十一日明治橋新營地鎮祭執行。△三月八日市教育後援會總會を樺山小學校講堂に開く。△四月二十日帝國第一隊陸奥以下基隆入港司令長官一行來北翌二十一日

御校約四十名下士以下百十名來北臺灣神社參拜市中觀光例に依り接待す、午後三時より准士官以上四百名を梅屋敷に招待園遊會を開催頗る盛會を極めたり。△四月二十九日伊太利國軍艦及練習艦、帝國軍艦春日基隆へ入港せり。△四月三十日臺北市訓令第五號を以て臺北市事務分掌規程中衛生課の次へ自動車課を加へたり。△五月九日憲兵創始五十年記念祭を偕行社に行ふ。△五月二十五日軍艦五十鈴乗組員將校二十名下士以下二百十名來北臺灣神社參拜正午鐵道ホテルに於て茶菓を饗す。△五月二十七日第二十五回海軍記念日なるを以て市内小、公學校兒童旗行列を爲し又鐵道ホテルに於て祝賀會を催す會員約四百名極めて盛會。△六月二日菱刈大將は關東軍司令官に榮轉後任として航空本部長渡邊中將臺灣軍司令官に親補せられ。同月二十七日著任せらる。△六月二十九日農林次官高田耘平氏來臺。△七月一日臺灣軍狀視察の爲瀨川侍從武官來臺せられ七月二十一日龍山寺廟を視察せらる。△七月五日より十日間圓山動物園夜間開場。△七月二十二日内地見學旅行の爲市内小、公學校生徒八十名は中野太平公學校長に引

率せられ出發せり。△七月二十四日兒玉總督二十五周年法要を圓山臨濟寺に於て舉行官民約百名參列同日南菜園に於て兒玉總督遺物展覽會開催せらる。△七月二十八日暴風雨襲來近年稀なる豪雨各河川共増水甚しく市内浸水家屋一萬七千五百戸に及び非常の混雜を極めたり。△八月七日軍艦滿洲乗組員將校十名下士以下百名臺灣神社參拜後晝食及茶菓を接待す。△九月一日臺北市訓令第一三號を以て臺北市事務分掌規定中土木水道課を土木課水道課に改正せり。△九月二日日本日より向十五日間臺北公園に於て實業會主催市後授の下に納涼會を開催す。

○童 謠

初日の出

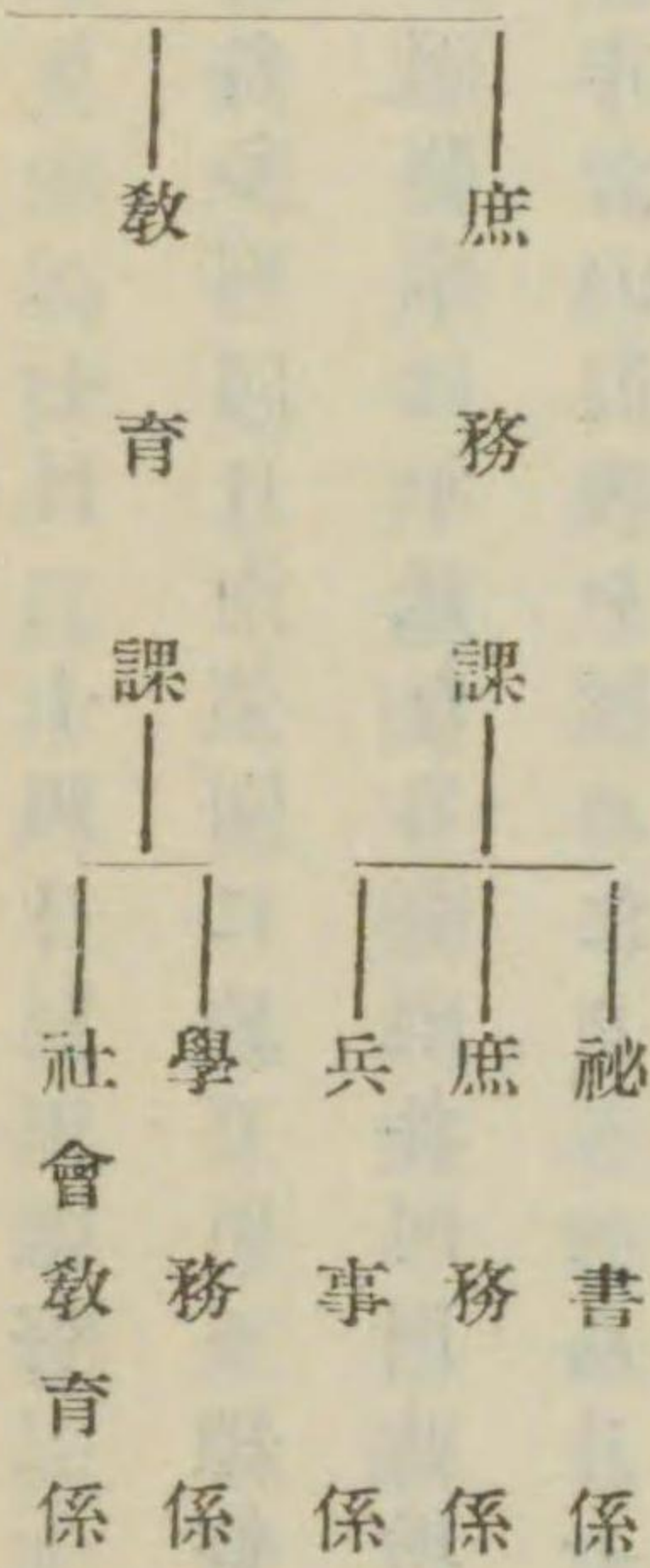
南門小學校 大津 哲夫

にこ／＼わらつた はつ日の出 まつかなまつかな はつ日の出
 ごきげんよろしう おめでたう

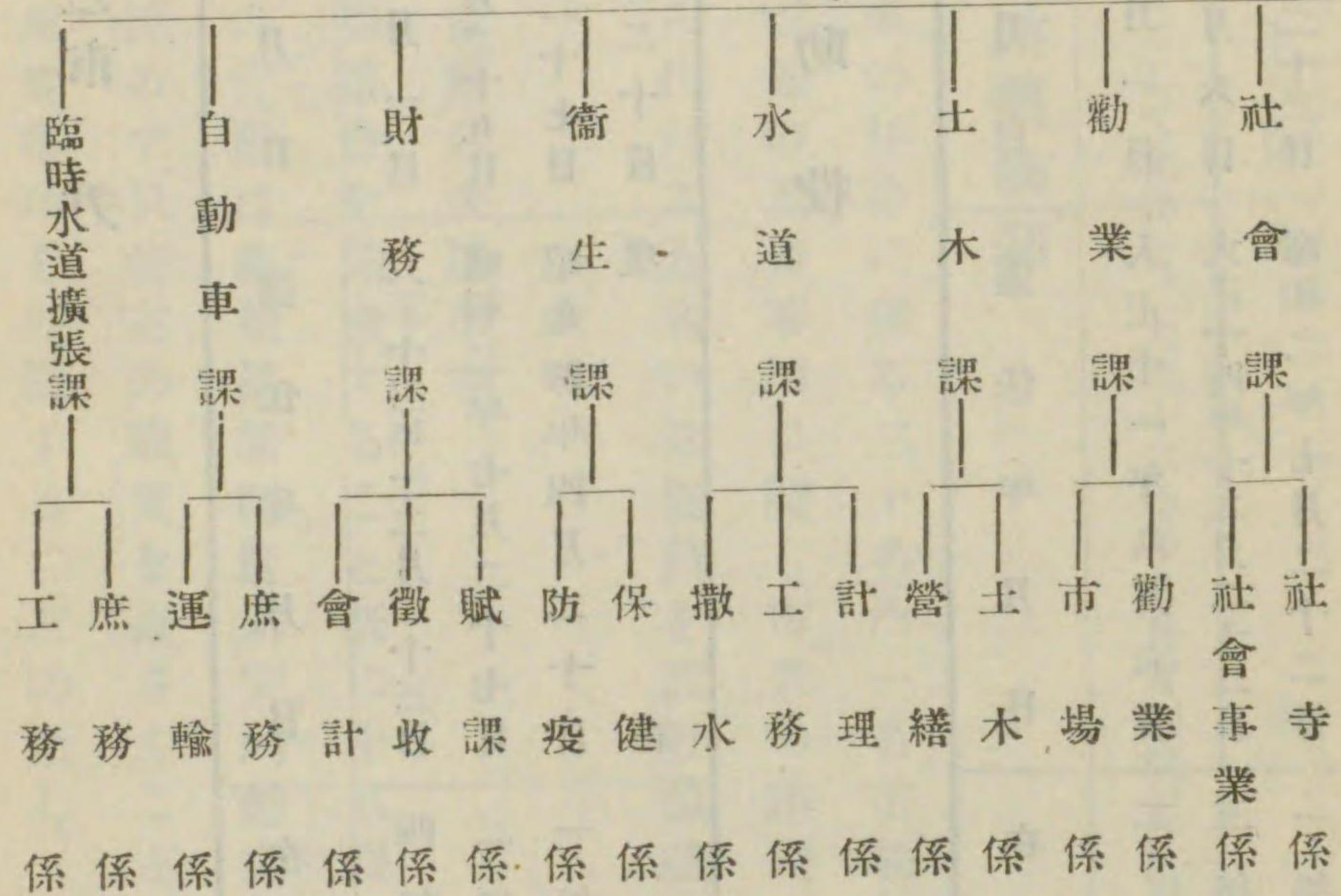
第四章 市機關

一 行政機關

臺灣總督府地方官官制に基き市尹助役、技師、視學、屬、技手を置かれ、別に臺灣地方待遇職員令に依り産業主事、産業書記、産業技手、土木書記、土木技師、土木技手、衛生書記、衛生技師、衛生技手、社會事業主事、社會教育書記を置き、又市制第五條に依る吏員として主事、技師、書記、技手を置いて、市尹統轄の下に、庶務、教育、社會、勸業、土木、水道、衛生、財務、自動車、臨時水道擴張の十課を設く。其の系統を示せば左の如し。



臺北市役所



△市尹

就任年月日	退任年月日	在任年月	氏名
大正九年九月一日	大正十三年十二月二十三日	四年三箇月	武藤針五郎
大正十三年十二月二十五日	昭和二年七月二十七日	二年八箇月	太田吾一
昭和二年七月二十七日	昭和四年四月二十日	一年十箇月	田端幸三郎
昭和四年四月二十日	現	在	増田秀吉

△助役

就任年月日	退任年月日	在任年月	氏名
大正九年九月一日	大正十一年九月六日	二箇年	大橋長行
大正十一年九月六日	大正十四年十二月二十二日	三年四箇月	村田三郎
大正十四年十二月二十二日	昭和二年七月二十二日	一年八箇月	石川定俊

昭和二年七月二十二日	現	在	長谷川録郎
------------	---	---	-------

備考 當初理事官として在任し、大正十三年十二月官制改正に因り助役の職名を設けられたり。

二 諮問機關

市協議會は知事の任命に係る三十名内一名市助役の協議會員(任期二年)を以て組織し、市豫算其の他の重要事項に關し、市尹の諮問に應ぜしむ。而して尙協議會員中より互選せられたる五名の常置員を設け協議會の委任に係る事項の議決を爲しつゝあり。

市協議會決議事項

市制實施以來、協議會を開會すること既に十八回に及ぶ、會議は毎々和氣霽々の中に進行し、會員の言動は終始眞摯穩健研究的態度を持ち、毫も内臺人の差別若くは黨派的色彩を認めず、只管其の職責を盡さんことに努めつゝあり、其の間協議會に於て決議せる重要事項を抄録するに左の如し。

大正十年

月 日	諮問案番號	件	名
三月十八日	議案第一號	大正十年度臺北市歲入歲出豫算ノ件	
同	同 第二號	市稅賦課徵收ニ關スル件	
同	同 第三號	小學校及公學校授業料條例設定ノ件	
同	同 第四號	臺北市公設市場使用條例設定ノ件	
同	同 第五號	臺北市動物園觀覽料條例設定ノ件	
同	同 第六號	臺北市公園使用條例設定ノ件	
同	同 第七號	臺北市手数料條例設定ノ件	
同	同 第八號	條規施行期日ニ關スル條例設定ノ件	
同	同 第九號	臺北市公設火葬場使用條例設定ノ件	
同	同 第一〇號	臺北市水道使用條例設定ノ件	
同	同 第一一號	起債ニ關スル件	
同	同 第一二號	手数料改正ニ關スル件	

大正十一年

月 日	諮問案番號	件	名
一月三十日	議案第一號	大正十一年度臺北市歲入歲出豫算ノ件	
同	同 第二號	大正十一年度起債ニ關スル件	
同	同 第二號ノ一	大正十一年度起債ニ關スル件	
同	同 第三號	大正十一年度特別會計市街地整理費歲入歲出豫算ノ件	
同	同 第四號	大正十一年度特別會計起債ニ關スル件	
同	同 第五號	臺北市稻江醫院使用條例ノ件	
同	同 第六號	家屋消毒手数料條例ノ件	
大正十二年			
三月二十四日	諮第一號	大正十二年度臺北市歲入歲出豫算ノ件	
同	同 第二號	大正十二年度特別會計公設實舖費歲入歲出豫算ノ件	

二月十四日	諮第六號	公共資源積立金處分ノ件
同	同第七號	公會堂建築積立金處分ノ件
同	同第八號	公設質舖資金ニ關スル件

大正十五年

一月三十日	諮第一號	大正十五年度臺北市歲入歲出豫算ノ件
同	同第二號	市稅戶稅割稅率ニ關スル件
同	同第三號	臺北市魚市場使用條例中改正ノ件
同	同第四號	臺北市水泳場使用條例設定ノ件

昭和二年

一月二十一日	諮第一號	昭和二年度臺北市歲入歲出豫算ノ件
--------	------	------------------

同	同第二號	臺灣市街庄稅規則施行細則中改正ノ件
同	同第三號	市稅戶稅割稅率ニ關スル件
同	同第四號	臺北市稻江醫院使用條例廢止ノ件
同	同第五號	臺北市家畜市場使用條例設定ノ件
同	同第六號	臺北市簡易宿泊所使用條例設定ノ件
同	同第七號	臺北市基本財產造成規定設定ノ件
同	同第八號	昭和二年度特別會計水道費歲入歲出豫算ノ件
同	同第九號	臺北市水道使用條例中改正ノ件
同	同第一〇號	水道擴張工事費繼續費年期及支出方法ノ件
同	同第一一號	水道擴張工事費借入ノ件

昭和三年

一月二十八日	諮第一號	昭和三年度臺北市歲入歲出豫算ノ件
同	同第二號	市稅戶稅割稅率ニ關スル件
同	同第三號	臺北市墓地使用條例設定ノ件

日期	案號	內容
一月二十八日	同 第四號	臺北市水泳場使用條例中改正ノ件
同	同 第五號	臺北市消費市場使用條例改正ノ件
同	同 第六號	臺北市魚市場使用條例中改正ノ件
同	同 第七號	臺北市家畜市場使用條例中改正ノ件
同	同 第八號	臺北市公會堂建築積立金廢止ノ件
同	同 第九號	臺北市公共資源積立金處分ノ件
同	同 第一〇號	市廳舍及公會堂新營費借入ノ件
同	同 第一一號	市場新營費其他借入ノ件
同	同 第一二號	昭和三年度臺北市特別會計水道費歲入歲出豫算ノ件
同	同 第一三號	自昭和二年 至昭和五年 臺北市水道擴張工事費繼續費年期及支出方法變更ノ件
同	同 第一四號	水道擴張工事費借入金變更ノ件
同	同 第一五號	土地買收費借入變更ノ件
同	同 第一六號	電氣軌道事業經營ノ件
同	同 第一七號	自昭和三年 至昭和四年 臺北市電氣軌道敷設費繼續費年期及支出方法ノ件
同	同 第一八號	昭和三年度臺北市特別會計電氣軌道事業費歲入歲出豫算ノ件
同	同 第一九號	借入金ニ關スル件
同	同 第二〇號	昭和三年度臺北市歲入歲出追加豫算ノ件
同	同 第二一號	自昭和三年 至昭和四年 魚菜卸賣市場新營費繼續費年期及支出方法ノ件
十月十九日		

日期	案號	內容
同	同 第二二號	昭和三年度臺北市歲出更正豫算ノ件
同	同 第二三號	市場新營費其ノ他借入變更ノ件
		昭 and 四年
一月三十日	同 第一號	昭和四年年度臺北市歲入歲出豫算ノ件
同	同 第二號	市稅戶稅割稅率ニ關スル件
同	同 第三號	臺北市墓地使用條例中改正ノ件
同	同 第四號	臺北市魚菜卸賣市場使用條例設定ノ件
同	同 第五號	小學校新營費借入ノ件
同	同 第六號	臺北市公會堂建築積立金ニ關スル件
同	同 第七號	臺北市公共資源積立金ニ關スル件
同	同 第八號	昭和四年年度臺北市特別會計水道費歲入歲出豫算ノ件
同	同 第九號	自昭和二年 至昭和五年 臺北市水道擴張工事費繼續費年期及支出方法變更ノ件
同	同 第一〇號	昭和四年年度臺北市特別會計電氣軌道事業費歲入歲出豫算ノ件
七月二日	同 第一一號	電氣軌道道路線變更ノ件

同	同	七月二日	諮第一二號	自昭和四年度至昭和五年度臺北市電氣軌道敷設費繼續年期及支出方法ノ件
同	同	同	諮第一三號	昭和四年度臺北市特別會計電氣軌道事業費歲入歲出更正豫算ノ件
同	同	同	同第一四號	借入金變更ノ件

昭和五年

月日	諮問案番號	件	名
一月二十九日	諮第一號	昭和五年度臺北市歲入歲出豫算ノ件	
同	同第二號	市稅戶稅割稅率ニ關スル件	
同	同第三號	臺北市墓地使用條例中改正ノ件	
同	同第四號	臺北市乘合自動車事業計畫ノ件	
同	同第五號	臺北市乘合自動車使用條例設定ノ件	
同	同第六號	臺北市圓山運動場使用條例設定ノ件	
同	同第七號	臺北市葬儀自動車使用條例設定ノ件	
同	同第八號	臺北市公會堂建築資金積立金廢止ノ件	
同	同第九號	臺北市公共資源積立金處分ノ件	

△市協議會員

第一回 大正九年十月一日任命

- | | | |
|--------|-------|-------|
| 正五位勳四等 | 稻垣長次郎 | 木村泰治 |
| 正五位勳六等 | 安田勝次郎 | 後宮信太郎 |
| 從五位勳五等 | 太田秀穗 | 花田節 |
| 從六位 | 河村徹 | 三卷俊夫 |
| 從六位 | 阿部嘉七 | 中辻喜次郎 |
| 正七位 | 梅田清次 | 高橋親義 |
| 正七位 | 大橋長行 | 吳昌才 |
| 從五位 | 白倉吉朗 | 陳天來 |
| 谷口巖 | | 李景盛 |
| 永田隼之輔 | | 謝汝銓 |
| 土屋理喜治 | | 葉清耀 |
| 池田常吉 | | 歐陽光輝 |
| 齋藤豐次郎 | | 陳智貴 |

○本任期間異動

郭 廷 俊
楊 潤 波

六八

林 清 月
許 丙

大正十年三月市外轉住退職

稻垣長次郎

大正十年三月十二日任命

正五位勳三等 堀内次雄

同年五月二十日死亡

高橋親義

同年六月一日任命

德丸貞二

富田榮太郎

幸 皆 的

同年六月一日依願解職

後宮信太郎

李 景 盛

同年七月中市外轉住退職

阿部嘉七

八月中 葉 清 耀

同年十一月二十日死亡

花田 節

同年十一月四日依願解職

齋藤豐次郎

白倉吉朗

同年一月十九日任命

今川 淵

谷河梅人

大川清一

吉鹿善次郎

同年一月二十六日任命

瀧田傳吉

同年一月中市外轉住退職

池田常吉

二月中 梅田清次

六月中 太田秀穗

第二回 大正十一年十月一日任命

正五位勳六等 安田勝次郎

從六位勳六等 有泉朝次郎

從六位 河 村 徹

瀧田傳吉

永田隼之輔

津久井誠一郎

谷 口 巖

土屋理喜治

三卷 俊 夫

谷河梅人

大川清一

生野 數 馬

中辻喜次郎

德丸貞二

富田榮太郎

吉鹿善次郎

杉坂六三郎

陳 天 來

陳 智 貴

郭 廷 俊

楊 潤 波

林 清 月

許 丙

辜 皆 的

歐 陽 光 輝

張 清 港

魏 清 德

蔡 彬 淮

張 福 老

六九

○本任期間異動

第三回 大正十三年十月一日任命

從六位 谷河梅人

三卷俊夫

谷口巖

歐陽光輝

郭廷俊

中辻喜次郎

杉坂六三郎

張清港

大越大藏

生野數馬

張福老

大正十三年六月二十一日死亡 大川清一

從六位勳六等

富田榮太郎

魏清德

蔡彬淮

有泉朝次郎

許丙

楊潤波

土屋理喜治

德丸貞二

安田勝次郎

吉鹿善次郎

陳智貴

竹內虎雄

正五位勳六等

陳增福

陳其春

正五位勳五等 矢野猪之八

村松一造

幸皆的

○本期間異動

大正十四年五月十九日市外轉住退職

河村徹

同 年十二月一日依願解職

蔡彬淮

同 年同 月同日任命

山中義信 黃金生

第四回 大正十五年十月一日任命 (○印ハ常置員)

谷河梅人

○三卷俊夫

谷口巖

歐陽光輝

○郭廷俊

○中辻喜次郎

杉坂六三郎

從六位勳六等

張清港

張福老

富田榮太郎

魏清德

有泉朝次郎

○許丙

楊潤波

○本期間異動

土屋理喜治
德丸貞二
○正五位勳六等
安田勝次郎
吉鹿善次郎
陳智貴
竹內虎雄
村松一造
幸皆的

陳增福
陳其春
山中義信
黃金生
坂本信道
銀屋慶之助
星加彦太郎

昭和二年二月一日依願解職

三卷俊夫

同年同月同日任命

大栗巖

同年同月二十一日死亡

張福老

同年六月二十四日任命

李延齡

同年八月八日市外轉住解職

竹內虎雄

同年十月二十六日依願解職

許丙

同年同月同日任命

近藤喜惠門

方玉墩

第五回 昭和三年十月一日任命 (○印ハ常置員)

邨松一造

中辻喜次郎

○正五位勳六等 安田勝次郎

○谷口巖

土屋理喜治

○谷河梅人

從五位勳五等 鈴木重嶽

大栗巖

銀屋慶之助

星加彦太郎

○吉鹿善次郎

○德丸貞二

陳其春

李延齡

陳增福

從六位勳五等

張清港

楊潤波

許智貴

辜皆的

魏清德

黃金生

方玉墩

歐陽光輝

高橋猪之助

近藤滿夫

近藤勝次郎

飯田清

佐野研三

陳茂通

○本期間異動

昭和四年三月十二日死亡

幸皆的

同年十一月十二日依願解職

村松一造

昭和五年一月十日任命

里井勝太郎

陳振能

三 補助機關

市制第十條に基き常設委員を設く。其の擔當を勸業學務衛生土木社會事業財源調査の六部に分ち委託事務に従事せしむ。外に臨時土地整理委員を置き、又市制施行令第四條に基き町委員を置き其の區域を定め区域内に於ける各般の事務を補助せしむ、當初より現在に至る各委員左の如し。

△常設委員 (任期二年)

第一回 大正十一年十月一日任命

勸業委員 赤司初太郎

中辻喜次郎

郵松一造
生野數馬

從四位勳四等

川崎軍治

木村匡

小松吉久

高須時太郎

小宮元之助

河村徹

安田勝次郎

白倉吉朗

生野數馬

尾崎秀眞

大川清一

瀧野種孝

鉅鹿赫太郎

有泉朝次郎

王慶忠

吳昌才

學務委員

杉坂六三郎
林熊徵
李延禧
陳朝駿
楊潤波
陳天來
歐陽光輝
幸皆的
張清港
張福老
黃東茂
吳文秀
林朝儀
黃金生
楊文桂
三村三平



衛生委員

楊潤波 謝汝銓 許丙 魏清德 陳江流 荃和藤治郎 三卷俊夫 谷口巖 白倉吉朗 德丸貞二 富田榮太郎 矢野猪之八 吉鹿善次郎 田代彦四郎 陳朝駿 陳天來

土木委員

從四位勳四等

陳智貴 郭廷俊 林清月 洪輔臣 陳培梁 王祖派 林木川 角源泉 川崎軍治 小松吉久 高須時太郎 木村泰治 後宮信太郎 赤司初太郎 河村徹 谷口巖

社會事業委員

土屋理喜治 田代彦四郎 林熊徵 王慶忠 吳昌才 林清月 吳傳經 角源泉 赤石定藏 木村匡 三好德三郎 小宮元之助 荃和藤治郎 木村泰治 三卷俊夫 谷河梅人

財源調查委員

中辻喜次郎 矢野猪之八 尾崎秀真 大川清一 瀧野種孝 許丙 陳智貴 魏清德 蔡彬淮 瀧田傳吉 永田隼之輔 北村吉之助 津久井誠一郎 安田勝次郎 土屋理喜治 谷河梅人

第二回

大正十三年十月一日任命

勸業委員

德丸貞二	富田榮太郎	邨松一造	吉鹿善次郎	有泉朝次郎	杉坂六三郎	李延禧	高山仰	江崎眞澄	久米孝藏	星加彦太郎	福田定次郎	銀屋慶之助	竹内虎雄
------	-------	------	-------	-------	-------	-----	-----	------	------	-------	-------	-------	------

謝汝銓	郭廷俊	歐陽光輝	幸皆的	張清港	張福老	陳其春	永井德照	赤石定藏	三村三平	杉坂六三郎	三好德三郎	北村吉之助	津久井誠一郎
-----	-----	------	-----	-----	-----	-----	------	------	------	-------	-------	-------	--------

後宮信太郎
中辻喜次郎
生野數馬
邨松一造
林熊徵
李延禧
楊潤波
陳天來
歐陽光輝
幸皆的
黃東茂
吳文秀
林朝儀
黃金生
張清港
楊文桂

學務委員

張福老	有泉朝次郎	小松吉久	鉦鹿赫太郎	瀧野種孝	尾崎秀眞	生野數馬	白倉吉朗	河村徹	小宮元之助	高須時太郎	川崎軍治	安田勝次郎	木村匡	三村三平	王慶忠
-----	-------	------	-------	------	------	------	------	-----	-------	-------	------	-------	-----	------	-----

吳昌才
謝汝銓
楊潤波
許丙
魏清德
陳江流
吉田坦藏
白倉吉朗
谷口巖
三卷俊夫
荻和藤治郎
矢野猪之八
吉鹿善次郎
田代彦四郎
德丸貞二
富田榮太郎

土木委員

陳智貴
郭廷俊
洪輔臣
林清月
陳培梁
林木川
王祖派
陳天來
川崎軍治
木村泰治
後宮信太郎
高須時太郎
田代彦四郎
土屋理喜治
谷口巖
小松吉久

社會事業委員

河村徹
林清月
吳傳經
王慶忠
林熊徵
吳昌才
矢野猪之八
荻和藤治郎
中辻喜次郎
谷河梅人
三卷俊夫
木村泰治
木村匡
三好德三郎
小宮元之助
赤石定藏

財源調查委員

尾崎秀眞
瀧野種孝
柏熊福太郎
賀來倉太
魏清德
蔡彬淮
陳智貴
許丙
杉坂六三郎
有泉朝次郎
歐陽光輝
津久井誠一郎
土屋理喜治
萩松一造
北村吉之助
谷河梅人

第三回

大正十五年十月一日任命

勸業委員

德丸貞二	吉鹿善次郎	安田勝次郎	富田榮太郎	幸皆的	張福老	張清港	謝汝銓	陳其春
高山仰	久米孝藏	星加彦太郎	福田定次郎	銀屋慶之助				

郭廷俊	李延禧	平田藤太郎	太田重助	吉岡德松	等々力智惠太	蔡彬淮	大歲德太郎	中川善郎
竹內虎雄	永井德照	杉坂六三郎	三好德三郎	津久井誠一郎				

後宮信太郎

中辻喜次郎

生野數馬

村松一造

林熊徵

李延禧

楊潤波

陳天來

歐陽光輝

辜皆的

黃東茂

吳文秀

林朝儀

黃金生

張清港

楊文桂

學務委員

張福老

有泉朝次郎

小松吉久

鉅鹿赫太郎

尾崎秀眞

生野數馬

白倉吉朗

小宮元之助

高須時太郎

川崎軍治

安田勝次郎

吳昌才

謝汝銓

楊潤波

許清丙

魏清德

衛生委員

陳江流 吉田坦藏 白倉吉朗 谷口嚴 三卷俊夫 葦和藤治郎 吉鹿善次郎 德丸貞二 富田榮太郎 陳智貴 郭廷俊 洪輔臣 林清月 林木川 王祖派 陳天來

土木委員

川崎軍治 木村泰治 後宮信太郎 高須時太郎 土屋理喜治 谷口嚴 小松吉久 林清月 吳傳經 林熊徵 吳昌才 葦和藤治郎 中辻喜次郎 谷河梅人 三卷俊夫 木村泰治

財源調査委員

三好德三郎 小宮元之助 尾崎秀真 柏熊福太郎 賀來倉太 魏清德 蔡彬淮 陳智貴 許丙 佐野研三 杉坂六三郎 有泉朝次郎 歐陽光輝 津久井誠一郎 土屋理喜治 村松一造

社會事業委員

谷河梅人 德丸貞二 吉鹿善次郎 安田勝次郎 富田榮太郎 辜皆的 張福老 張清港 謝汝銓 陳其春 郭廷俊 李延禧 平田藤太郎 太田重助 吉岡德松 等々力智惠太

第四回 昭和三年十月一日任命

勸業委員

蔡彬 淮
大歲德太郎
高山 仰
星加彦太郎
福田定治郎
銀屋慶之助
邨松 一造
中辻喜次郎
木村 泰治
荒木正二郎
村崎 長昶
櫻井貞次郎
河東 富次
有田勉三郎

中川善郎

曾我純太郎
辻本正春
飯田 清
桑田剛助
中川善郎
谷山愛太郎
陳 天 來
方 玉 墩
黃 金 生
黃 東 茂
林 朝 儀
李 延 齡

財源調査委員

郭 邦 光
陳 朝 煌
楊 漢 龍
陳 振 能
吉岡德松
吉田 勉
中村誠道
小林惣次郎
近藤勝次郎
高橋猪之助
海野 幸德
古川榮次郎
重田榮治
平田藤太郎
大歲德太郎
陳 其 春

土木委員

歐陽光輝
許 智 貴
張 清 港
許 雨 亭
吳 澄 淇
李 金 燦
陳 天 順
土屋理喜治
德丸貞二
藤江醇三郎
船越倉吉
太田重助
平戶吉藏
神谷仲藏
園部良治
阿部道衛

學務委員

今道定治郎
浦田永太郎
等々力智惠太
李添盛
蔡彬淮
許丙
陳增福
楊泉
李永福
小松吉久
小宮元之助
安田勝次郎
白倉吉朗
尾崎秀眞
鉅鹿赫太郎
谷口巖

社會事業委員

大栗巖
富田榮太郎
生野數馬
谷河梅人
魏清德
楊文桂
陳江流
呂阿昌
蔡天註
許智貴
謝汝銓
楊潤波
黃贊均
楊育南
劉銀漢
荻和藤治郎

衛生委員

三卷俊夫
佐野研三
鈴木重嶽
吉鹿善次郎
大澤貞吉
飯田清
近藤滿夫
小泉進作
常見辨次郎
竹林德松
田代彦四郎
木村謙吾
有泉朝次郎
佐藤林吉
郭廷俊
蔡彬淮

張清港
柯秋潔
施福龍
小林常吉
葛岡陽吉
松野茂介
山本榮喜
內保傳次
小林準一
谷口巖
石川重男
龜若鐵次郎
上領雅
竹林德松
林小英
江崎正隆

南 政 吉
田代彦四郎
宮下與太郎
西尾善兵衛
植田喜太郎
葦和藤治郎
石井仁三郎
池上政吉
吉田坦藏
黃 玉 對
李 朝 北
大 栗 巖
木村米太郎
辻 久 三
園部良治
富田榮太郎

九〇
友田守惠
關 浦 吉
倪 希 昶
佐藤竹太郎
鍾 阿 林
永江豐次郎
王 祖 派
陳 義 塗
楊 春 生
木村謹吾
謝 唐 山
佐野研三
大塚芳太郎
周 郁 文
陳 松 標
楊 仲 佐

△臨時土地整理委員

○昭和三年五月四日委囑

高 敬 遠
陳 茂 通
王 成 渠
李 金 燦
近 藤 滿 夫
前田治吉
谷 口 巖
安田勝次郎
谷河梅人
郭 廷 俊
陳 其 春
吉鹿善次郎
高橋猪之助

九一
柯 秋 潔
張 文 伴
栗原仙勝
陳 培 根
八羽八郎
木村泰治
江上恒之
坂本彦太郎
土屋理喜治
後宮信太郎
葦和藤治郎
村崎長昶

吉岡 德松
重田 榮治

△町委員

(任期一年、昭和四年以降二年)

○大正十年六月十七日任命

德丸 貞二
石坂 新太郎
吉鹿 善次郎
福田 定次郎
土屋 理喜治
近藤 勝次郎
高橋 由義
谷口 巖
村崎 長昶
岡村 勝次郎
園部 薫

九二

近藤 勝次郎

伊藤 正介
永田 壽行
柏熊 福太郎
常見 辨次郎
許和 尙
唐仁 原景俊
劉銀 漢
周子 雲
許松 樹
林禮 源
加藤 忠太郎

周 金
陳 春池
高 焯堯
高 標謙
目黑 內記
木村 匡
和田 鶴一
洪 振祿
水野 春次
吳 吉山
平田 藤太郎
富田 榮太郎
谷山 愛太郎
吳 天來
藤山 正
蔡 寶

九三

蔡 彬淮
寺田 清繁
李 永福
林 鄉雲
吳 永富
翁 亭
高來 民治
楊 春生
中村 勘吉
陳 通水
楊 育南
林 振生
山本 善治
關 浦吉
等々力 智惠太
小林 丈夫

楊 泉
賀 來 倉 太
高 橋 靜 人
大 沼 安 吉
東 郷 實
尾 崎 秀 眞
西 尾 善 兵 衛
蓑 和 藤 治 郎
田 代 彦 四 郎
周 心 名
八 羽 八 郎
陳 尙 九
陳 直 卿
張 福 彩
張 老
蔡 烏 財

九四
陳 江 流
蔡 受 三
許 春
黃 君 治
張 清 港
張 金 龍
松 崎 兼 藏
王 秋
謝 唐 山
大 川 清 一
王 忠
周 郁 文
郭 廷 俊
陳 松 標
重 田 榮 治
顏 龍 光

○大正十一年六月十七日任命

施 福 龍
有 泉 朝 次 郎
陳 天 來
劉 金 聲
吉 岡 德 松
松 野 茂 介
森 遠 重
吉 鹿 善 次 郎
福 田 定 次 郎
土 屋 理 喜 治
近 藤 勝 次 郎
高 橋 由 義
谷 口 巖
村 崎 長 昶

九五
白 倉 吉 朗
佐 野 研 三
王 用 中
橫 光 吉 規
佐々木國重
伊 藤 正 介
永 田 壽 行
柏 熊 福 太 郎
常 見 辨 次 郎
唐 仁 原 景 俊
劉 銀 漢
周 子 雲
許 松 樹
加 藤 忠 太 郎

陳春池 高焯堯 木村匡 和田鶴一 洪振祿 吳吉山 平田藤太郎 藤山正 蔡彬淮 李永福 林卿雲 吳永富 高來民治 中村勘吉 楊育南 林振生

山本善治 關浦吉 等々力智惠太 小林丈夫 楊來倉太 賀沼安吉 大沼安吉 尾崎秀真 西尾善兵衛 葦和藤治郎 田代彦四郎 八羽八郎 陳尙九 陳直卿 張福老

蔡烏財 陳江流 蔡受三 許君春 黃君治 張清港 張金龍 松崎兼藏 王秋藏 謝唐山 大川清一 王忠 周郁文 郭廷俊 陳松標 重田榮治

顏龍光 施福龍 有泉朝次郎 劉金聲 佐野研三 王用中 橫光吉規 林有才 小山田篤二 陳金水 周深 三卷俊夫 太田重助 中川善郎 張福郎 伏脇外次郎

○大正十三年二月一日任命

黃金生
吳永裕
陳棋楠
陳培根

吉岡德松
松野茂介
森遠重
吉鹿善次郎
福田定次郎
土屋理喜治
近藤勝次郎
高橋猪之助
谷口巖
村崎長昶

鳩野修造
陳金水
伊和地重義
關浦吉
田代彦四郎
小林丈夫
等々力智惠太
賀來倉太
尾崎秀眞
津久井誠一郎
楊泉
冀和藤治郎
周深
西尾善兵衛
山田榮次郎
丸龜德十

木村謹吾
陳天印
莊仲

永野熊記
伊藤正介
永田壽行
戸水昇
加藤忠太郎
周宗善
許松樹
林有才
陳春池
高燧堯

三卷俊夫
木村匡
洪淵泉
大栗巖
木村光太郎
黃世泰
富田榮太郎
平田藤太郎
吳佳仁
谷山愛太郎
林成祖
張景明
蔡彬淮
李永福
佐生久吉
林卿雲

吳永富
黃金生
飯田清
中村勘吉
佐藤竹太郎
吳永裕
楊育南
陳棋楠
林振生
八羽八郎
陳尙九
張彩
陳培根
張福老
蔡烏財
大塚芳太郎

佐野研三
木村謹吾
王用中
有泉朝次郎
陳天印
李俊啓
重田榮治
顏龍光
施福龍
陳松標
張清港
郭廷俊
蔡受三
松崎兼藏
陳直卿
黃君治

○大正十四年二月一日任命

陳江流
王秋
張金龍
謝唐山
李金燦
李土
大川清一
王忠
周郁文

柏熊福太郎
常見辨次郎
莊子雲
周子雲
劉銀漢
唐仁原景俊
橫光吉規
佐藤才郎

土屋理喜治
近藤勝次郎
高橋猪之助
谷口嚴
村崎長昶

○大五十四年二月一日
安藤謙明
伊藤正介
後藤介次
戸水昇
加藤忠太郎
周宗善
許松樹
林有才
陳春池
高燦堯
鳩野修造
陳金水
伊知地重義
關浦吉
田代彦四郎
小林丈夫

一〇二
等々力智惠太
賀來倉太
尾崎秀眞
津久井誠一郎
楊泉
葦和藤治郎
周深
西尾善兵衛
山田榮次郎
丸龜德十
三卷俊夫
木村匡
洪淵泉
大栗巖
木村米太郎
黃世泰

○大五十四年
富田榮太郎
平田藤太郎
吳佳仁
谷山愛太郎
林成祖
張景明
蔡彬淮
李永福
佐生久吉
林卿雲
吳永富
黃金生
飯田清吉
中村勘吉
八十川清
吳永裕

一〇三
楊育南
陳棋楠
林振生
八羽八郎
陳尙九
張彩
陳培根
張福老
蔡烏財
大塚芳太郎
佐野研三
周郁文
王用中
木村謹吾
有泉朝次郎
李俊啓

○大正十五年二月一日任命

陳天印 星加彦太郎 顏龍光 施福龍 重田榮治 陳松標 張清港 郭廷俊 菅野鶴龜 陳直卿 黃君治 蔡受三 陳江流 王秋

一〇四

張金龍 謝唐山 李金燦 李土 矢野猪之八 楊漢龍 柏熊福太郎 常見辨次郎 莊仲 唐仁原景俊 劉銀漢 周子雲 須田一二三 西尾正一

杉坂六三郎 松野茂介 小林常吉 吉鹿善次郎 福田定治郎 土屋理喜治 近藤勝次郎 高橋猪之助 谷口巖 村崎長昶 安藤鎌明 伊藤正介 後藤介治 戶水昇 松田良清 林小英

一〇五

許松樹 林有才 陳春池 高焜堯 鳩野修造 陳金水 高桑保二郎 關浦吉 田代彦四郎 小林丈夫 等々力智惠太 賀來倉太 尾崎秀眞 津久井誠一郎 楊泉 蓑和藤治郎

周 西尾善兵衛 深
山田榮次郎
丸龜德十
三卷俊夫
神谷仲藏
洪淵泉
大栗巖
木村米太郎
黃世泰
富田榮太郎
平田藤太郎
吳佳仁
谷山愛太郎
林成祖
張景明

蔡彬淮
李永福
宮下文平
林卿雲
吳永富
黃金生
飯田清
中村勘吉
八十川清
吳永裕
楊育南
陳棋楠
林振生
八羽八郎
陳尙九
張彩

陳培根
張福老
蔡烏財
大塚芳太郎
佐野研三
周郁文
王用中
木村謹吾
蔡受三
李俊啓
陳天印
星加彥太郎
顏龍光
施福龍
重田榮治
陳松標

張清港
郭廷俊
細谷吉二郎
陳直卿
黃君治
李君土
陳江流
王江秋
張金龍
謝唐山
李金燦
陳詩韻
矢野豬之八
楊漢龍
柏熊福太郎
常見辨次郎

○昭和二年二月一日委囑

莊 仲
唐仁原景俊
劉 銀 漢

鈴木重嶽
葛岡陽吉
小林常吉
吉鹿善次郎
福田定治郎
近藤勝次郎
高橋猪之助
荒川 哲
谷口 巖
村崎長昶
安藤鎌明

一〇八

周 子 雲
須田一二三
西尾正一

伊藤正介
御法泰玄
戶水 昇
松田良清
林 小 英
許 松 樹
林 有 才
陳 春 池
高 燧 堯
鳩野修造
陳 金 水

高桑保二郎
關 浦 吉
江崎正隆
大坪種辰
等々力智惠太
賀來倉太
尾崎秀眞
津久井誠一郎
楊 泉
菱和藤治郎
周 深
西尾善兵衛
植田喜太郎
三卷俊夫
丸龜德十
神谷仲藏

一〇九

洪 淵 泉
大 栗 巖
佐藤林吉
黃 世 泰
今道定治郎
平田藤太郎
有馬彦二
太田重助
谷山愛太郎
吳 佳 仁
林 成 祖
李 松 圳
蔡 彬 淮
李 永 福
永江豐次郎
林 卿 雲

○昭和四年二月一日委囑

黃	李	陳	吳	張	謝	李	陳	楊
君	治	江	金	金	唐	金	詩	漢
治	土	流	水	龍	山	燦	韻	龍

鈴木重嶽	葛岡陽吉	小林常吉	吉鹿善次郎	福田定治郎
------	------	------	-------	-------

吳	黃	飯	中	佐	吳	楊	陳	林	八	陳	張	陳	張	周	張	大
永	金	田	村	藤	永	育	棋	振	羽	尙	培	尙	培	秋	福	塚
富	生	清	勘	竹	裕	南	楠	生	八	九	根	彩	根	冬	老	芳
		吉	吉	太郎					郎					郎	冬	太郎

一一一

近	朝	莊	唐	劉	周	須	西
藤	比	仁	仁	銀	子	田	尾
滿	奈	原	原	漢	雲	一	正
夫	正	景	景	漢	雲	三	一
	二	俊	俊				
	仲						

近藤勝次郎	高橋猪之助	小林準一	谷口巖	材崎長昶
-------	-------	------	-----	------

一一〇

佐	周	王	木	陳	李	陳	星	顏	施	重	陳	張	郭	平	楊
野	郁	用	村	天	俊	天	加	龍	福	田	松	清	廷	山	仲
研	文	中	謹	順	啓	印	彦	光	龍	榮	標	港	俊	元	佐
三	文	中	吾	順	啓	印	太郎	光	龍	治	標	港	俊	助	佐

○ 御 府 四 年 一 月 一 日 公 署

龜若鐵治郎
兵頭高一
上領雅
大澤清高
竹林德松
林小英
許松樹
林有才
陳春池
高焯堯
鳩野修造
陳金水
橫山謙助
關浦吉
江崎正隆
大坪種辰

南政吉
宮下與太郎
尾崎秀眞
大島鷹造
楊泉
葦和藤治郎
周深
西尾善兵衛
植田喜太郎
三卷俊夫
池上政吉
神谷仲藏
吳寶山
大栗巖
佐藤林吉
河村徹

澁谷武次郎
黃世泰
平田藤太郎
有馬彦二
友田守惠
吳佳仁
谷山愛太郎
林成祖
李松圳
蔡彬淮
李永福
深川圓作
林卿雲
吳永富
黃金生
飯田清

和田彰
陳義塗
林焜灶
陳棋楠
楊育南
林振生
中村勝次郎
王用中
大塚芳太郎
重田榮治
佐野研三
周郁文
星加彦太郎
施福龍
陳朝麟
楊漢龍

汪	陳	吳	陳	高	張	高	郭	楊	周	張	謝	陳	陳	李	陳
明	松	金	天	敬	清	池	廷	仲	清	金	唐	振	天	士	詩
燦	標	水	印	遠	港	龍	俊	佐	桂	龍	山	能	順	韻	韻

李	陳	許	八	陳	柯	周	近	前	葉	唐	劉	周	須	西
金	培	雨	羽	尙	秋	秋	藤	田	榮	仁	銀	子	田	尾
燦	根	亭	八	九	潔	冬	滿	治	田	原	漢	雲	一	正

第五章 市の財政

一 豫算

市制實施當初年度即ち大正九年度に於ては、市税は全く之を徴收せず、歳出は總て州補助金を以て之を支辨し、翌大正十年度より初めて市税を徴收して、市財政上の獨立を見るに至れり、爾來年一年市勢の發展に伴ひ、施設事業増大し、爲に連年財源の窮乏を痛感しつゝも、専ら既定歳出の節約に依り歳計を維持し來りしが、昭和新政に方り市勢興隆の機運に際會し、昭和二年度に於ては既に二百七十萬圓に増加し、翌三年度には四百十八萬圓に、更に昭和四年度には一躍五百六十萬を突破し、市制施行當時に比較すれば實に三倍餘の膨脹を見たり、之れ戸口の増加、一般經濟の膨脹、物價の騰貴、生産の増加、施設事業の發展等要するに、市民生活の進歩に伴ふ結果なりと稱すべし、然れども昭和五年度の豫算は現下の緊縮時代と經濟狀態とに鑑み、市民の實生活に寄與し、市勢の内容ある發展に資し、而かも其の事業實行に

就ては市財政の現在及將來を考慮し、可及的市民の負擔を重からしめざるもの、即ち其の事業自體の採算立ち且つ市民の生活に深き關係を有し、將來市財政の根幹を培養せらるべき事業を選択し、之が經費を含めて豫算を編成し、前年度に比し實に百七十三萬餘圓を減額せり、而して之れが經理に當つては總て緊縮の方針に依り、今市制施行以來各年度豫算の消長を示せば左の如し。

年 度	一 般 會 計	特 別 會 計	計
大 正 十 年 度	一、六三八、七〇九	—	一、六三八、七〇九
大 正 十 一 年 度	一、七〇九、三九九	二〇九、一七〇	一、九一八、五一九
大 正 十 二 年 度	一、六〇一、〇三七	四四六、〇〇〇	二、〇四七、六三七
大 正 十 三 年 度	二、〇九九、七七四	一〇七、一四七	二、二〇六、九二二
大 正 十 四 年 度	一、七八八、一八八	七七、四六三	一、八六五、六五一
大 正 十 五 年 度	一、八二四、六〇三	—	一、八二四、六〇三
昭 和 元 年 度	一、七二四、七〇七	九七九、三四三	二、七〇四、〇五〇
昭 和 二 年 度	三、一〇八、五七一	一、〇七八、七七二	四、一八七、三四三
昭 和 三 年 度	—	—	—
昭 和 四 年 度	二、七五一、九〇四	二、八五五、二七八	五、六〇七、一八二

昭 和 五 年 度	二、八二二、八四二	一、〇四六、五四二	三、八七〇、三八四
-----------	-----------	-----------	-----------

二 市有財産

△土地建物其他 (昭和五年三月末現在)

土地	六十九萬二千九百五十一坪五一九	價額	五、二七九、二五四圓	(價額ニハ墓地、火葬場道路敷地ヲ含マス)
建物	二萬六千九百四十五坪七一三	價額	三、九三六、一〇九圓	
其他		價額	三、一五六、八一二圓	
計			一二、三七二、一七五圓	

△基本財産

土地	千九百九十六坪八八〇	價額	六三、五七一、〇〇〇
積立金			一三、〇〇二、七二〇
計			七六、五七三、七二〇

△積立金

- 公共施設資金積立金
- 慈善事業資金積立金
- 公會堂建設資金積立金

計

四〇、〇三四・二六〇
 三、九六六・〇九〇
 五三、八四三・八二〇
 九七、八四四・一七〇

△公設質舗資金

公設質舗資金

三九〇、〇〇〇圓

三 市公債及借入金

△市公債

舊債の償還に充つる爲、昭和二年度に於て、臺北市舊債整理公債を發行せり、其の總額は百萬圓(利率七分三厘)にして、昭和二年度より毎年之を償還して、昭和九年度

に至つて完済するものなり。而して既に仕拂を了したるもの三十七萬四千圓にして、現在高六十二萬六千圓あり。

△借入金

- 臨時水道擴張工事費借入金
- 消費市場改築費借入金
- 中央卸賣市場新營費借入金
- 市區改正用地買收費借入金

計

七八四、〇〇〇圓〇〇
 九五、二九五圓五七
 四〇〇、〇〇〇圓〇〇
 二〇〇、〇〇〇圓〇〇
 一、四七九、二九五圓五七

四 稅務

△諸稅賦課徵收の沿革

市制實施前即ち大正七八年は財界最好調時代市況亦殷盛にして、諸稅自然增收も尠からず、納稅成績も自ら良好なりしが、大正九年に至り日を逐ふて不振を加へ

不景氣の聲喧しからんとするの秋に方り、市制の實施となり諸税の加重を避けたりと雖も、尙營業稅雜種稅に附加稅を課するに至り、更に同十年度よりは第三種所得稅創設せられ、市況愈々沈衰金融梗塞し、同十二年度に於て營業稅率を引下げられしに拘はらず、滯納者續出し納期内に完納する者三分の一に満たざる状態なりしが、爾來極力之が矯正に努めたるに、同十三年度末より漸次納入成績向上し、同十四年度に入りては第三種所得稅の免稅點引上げられたる爲一層成績良好となり、更に昭和二年度より納稅成績優良團體に獎勵金を交付し加るに納稅に關する觀念養成に努力したる結果近來著しく優良なる成績を示すに至れり。

△市稅歲入一覽表

科 目	區 分	
	大正十一年度	大正十二年度
市 稅	七〇、三六〇・四	七〇、九二〇・二
地 租	一五、八三三・三	一五、八三三・三
所 得 稅	四二、三二二	五、九三三・三
市 稅	三、九〇九・七	三、九〇九・七
地 租	一、六三六・〇	一、六三六・〇
所 得 稅	三、二七三・三	三、二七三・三
大正十一年度	九〇、一〇二・四	九〇、一〇二・四
大正十二年度	九〇、一〇二・四	九〇、一〇二・四
大正十三年度	九〇、一〇二・四	九〇、一〇二・四
大正十四年度	九〇、一〇二・四	九〇、一〇二・四
昭和十五年	九〇、一〇二・四	九〇、一〇二・四
昭和十六年度	九〇、一〇二・四	九〇、一〇二・四
昭和十七年度	九〇、一〇二・四	九〇、一〇二・四
昭和十八年度	九〇、一〇二・四	九〇、一〇二・四
昭和十九年度	九〇、一〇二・四	九〇、一〇二・四
昭和五年度	九〇、一〇二・四	九〇、一〇二・四

戶 稅	區 分	
	大正十一年度	大正十二年度
戶 稅	三、四二一・三	三、四二一・三
營 業 稅	二七、〇三三・四	二七、〇三三・四
雜 種 稅	六、五七九・九	六、五七九・九
戶 稅	三、四二一・三	三、四二一・三
營 業 稅	二七、〇三三・四	二七、〇三三・四
雜 種 稅	六、五七九・九	六、五七九・九
大正十一年度	三六、〇三四・〇	三六、〇三四・〇
大正十二年度	三六、〇三四・〇	三六、〇三四・〇
大正十三年度	三六、〇三四・〇	三六、〇三四・〇
大正十四年度	三六、〇三四・〇	三六、〇三四・〇
昭和十五年	三六、〇三四・〇	三六、〇三四・〇
昭和十六年度	三六、〇三四・〇	三六、〇三四・〇
昭和十七年度	三六、〇三四・〇	三六、〇三四・〇
昭和十八年度	三六、〇三四・〇	三六、〇三四・〇
昭和十九年度	三六、〇三四・〇	三六、〇三四・〇
昭和五年度	三六、〇三四・〇	三六、〇三四・〇

備考 本表中昭和五年度ハ豫算額ヲ示ス

△年度別戶稅及戶稅割負擔額

年 度	生 産 千 圓 當 戶 稅	戶 稅 一 圓 當 戶 稅 割	生 産 千 圓 當 戶 稅 及 戶 稅 割
大 正 十 一 年 度	五、一〇〇	一、七二九	六、八二九
大 正 十 二 年 度	二、三六〇	七、二二四	九、五八四
大 正 十 三 年 度	一、〇〇〇	七、七〇七	八、七〇七
大 正 十 四 年 度	一、三〇〇	一、〇〇〇	二、三〇〇
大 正 十 五 年 度	一、一八〇	一、二二五	二、四〇五
大 正 十 六 年 度	一、一八〇	一、二二五	二、四〇五
大 正 十 七 年 度	一、一八〇	一、二二五	二、四〇五
大 正 十 八 年 度	一、一八〇	一、二二五	二、四〇五
大 正 十 九 年 度	一、一八〇	一、二二五	二、四〇五
大 正 十 年 度	一、一八〇	一、二二五	二、四〇五
大 正 九 年 度	一、一八〇	一、二二五	二、四〇五
大 正 八 年 度	一、一八〇	一、二二五	二、四〇五
大 正 七 年 度	一、一八〇	一、二二五	二、四〇五
大 正 六 年 度	一、一八〇	一、二二五	二、四〇五
大 正 五 年 度	一、一八〇	一、二二五	二、四〇五
大 正 四 年 度	一、一八〇	一、二二五	二、四〇五
大 正 三 年 度	一、一八〇	一、二二五	二、四〇五
大 正 二 年 度	一、一八〇	一、二二五	二、四〇五
大 正 一 年 度	一、一八〇	一、二二五	二、四〇五

- 臺北市墓地使用條例 昭和三年三月三十一日 臺北市條例第一號
- 臺北市中央卸賣市場使用條例 昭和四年八月二十五日 臺北市條例第一號
- 臺北市葬儀自動車使用條例 昭和五年四月一日 臺北市條例第一號
- 臺北市圓山運動場使用條例 昭和五年四月二十四日 臺北市條例第二號
- 臺北市乘合自動車使用條例 昭和五年四月三十日 臺北市條例第三號
- 督促手數料 (國稅徵收法)

△金庫制度

大正九年十月一日臺北市金庫の位置及事務取扱銀行を左の通り定めたり。

位置 臺北市役所内
 事務取扱銀行 株式會社三十四銀行

第六章 社寺宗教

△神社

官幣大社臺灣神社 明治三十四年十月鎮座式を舉行せられし以來一般内地人の敬神思想を振作すると同時に本島人の神社に對する崇敬心を馴致し近來各地方の參拜者著しく増加し、昭和四年度中の參拜者内地人一四七、〇六三人、本島人五八、六八九人、蕃人四七五人、其の他三二五人、計二〇六、五五一人の多數を算するに至れり。

建功神社 昭和三年七月鎮座祭を行はれたるものにして改隸以來本島に於て公務の爲戰死殉職せし功勳者の英靈一萬五千有餘柱を合祀せるものなり。

無格社臺北稻荷神社 近來内臺人の參拜者増加の傾向を示しつつあり。

△神道

神道は金光教天理教神習教實行教扶桑教等の各派にして各其の教會所を設け
布教師を置き鋭意教務擴張に努めつゝあり。

△佛 教

内地佛教の傳來は領臺當時の從軍布教師等が本島に駐錫して開教に努めたる
に初まり漸次隆盛に向ひたるものにして現に本市に別院又は布教所を置くもの
左の如し。

- 曹 洞 宗 臨 濟 宗 眞宗本願寺派 眞宗大谷派
- 眞 言 宗 日 蓮 宗 淨 土 宗 天 臺 宗

△基督 教

天主教教會及長老教會は改隸前既に本島に渡來し本市に教會を設け其の後日
本基督教會組合基督教會日本聖公會ホーリネス教會等相踵で渡來し各教會を設
置し布教師を置き教勢擴張を爲しつゝあり。

△舊慣に依る 寺廟

本島人の寺廟に對する信仰は依然として舊態を脱する能はざるものあるも、近
時内地僧侶の活動に依り漸次佛教に接觸連絡を保たんとするの傾向を示せり、而
して本市に於ける主なる寺廟を掲ぐれば左の如し。

- 劍 潭 寺 龍 山 寺 霞海城隍爺廟 慈 聖 宮
- 保 安 宮 清 水 岩 孔子廟(目下建設中)

其の他市内に點在する寺廟數五十、齋堂數七、外に神明會數九十あり。

○童 謠

風鈴と風

風りんさんが 風よんだ
旭小學校 宮尾五重子

風はちりりん すぐにげた

第七章 教育

一一八

一 市の教育

本市に於ける教育機關は初等教育として市立小學校七校、公學校十一校外に師範學校附屬小學校一校、附屬公學校二校あり、中等教育として州立中學校二校、高等女學校三校、實業學校二校、師範學校二校、專門學校として醫學專門、高等商業の二校と大學專門部あり、高等普通教育として七年制度の高等學校あり、其の他州立盲啞學校及各種の私立學校にして、昭和三年度には臺北帝國大學の開校ありて茲に學系全く整備せらるるに至れり。

現行の學制は大正十一年二月の制定に係り、原則としては内地の學制に則り、唯普通教育に於て國語を常用する者と否とに依り小學校、公學校の別を設け、師範教育に於ても之に準じたる制を定めたる特例あるのみ、其の他は内地と同一なり、尙教員俸給は内地と異り、小公學校は州費中等學校以上は國費を以て支辨せられつ

あり。

臺北市に於て施設する學校は小學校、公學校の普通教育にして、之に視學機關及學校衛生機關を整備し新時代の教育に順應せんとして大に策勵し實績効果を擧げつゝあり。

本市の教育施設が最近十年間に於て如何に變遷發達せしかは左表に依り教育費の狀況を見て之を知るを得べし。

△教育費累年比較表 (經常部)

年 度	豫 算 額	學 級 數	一 學 級 當	兒 童 數	一 人 當
大正十一年度	一九一、九三四 円	二五八 級	七二二、二四 円	一八、一五三 人	一三〇〇 円
大正十一年度	二二二、〇〇九	二八三	七〇七、一〇	一五、四五六	一、二九五
大正十二年度	二二〇、二〇八	二九七	六五五、〇六	一六、三〇〇	一、一九四
大正十三年度	二二五、七三五	三二〇	六四八、〇六	一七、五二八	一、二八三
大正十四年度	二二〇、九八七	三二三	六二六、五〇	一六、四一八	一、二七五

一一九

平均	昭和十五年				
	昭和五年	昭和四年	昭和三年	昭和二年	昭和元年
平均	計				
二〇八、四一四	二〇八、四一三	二〇八、四七五	一八九、九八〇	一九二、九一九	二〇七、〇八四
三二五	三、一四八	三六七	三三四	三二五	三二一
六、六二五	六、六二四	五八八、九八	五六九、二九	五三七、八九	五八四、三七
一七七、六四	一七七、六四二	一三、七八五	二一、〇四六	一九、六〇八	一六、七八一
一一〇三	一一〇三	九、四九		八、九一	一一、一八

△其の二 (臨時部)

年度	豫算額	内訳	
		營繕土木費	補助費
大正十年	四二二、九九四	四二二、九九四	
大正十一年	二四五、一〇五	二二七、〇〇五	一二五、〇〇〇
大正十二年	一六四、八二一	一五五、三二一	九、五〇〇
大正十三年	一七二、〇九八	一六一、〇九八	一〇、〇〇〇

平均	昭和十五年				
	昭和五年	昭和四年	昭和三年	昭和二年	昭和元年
平均	計				
一六五、一五五	一六五、一五三	六四、六六四	二二、三二九	五七、七四〇	五八、一六〇
一五七、八一五	一五七、八一五	五八、二二四	二二、六八四	五二、六九〇	五三、三二〇
七、三三〇	七、三三〇	六、四五〇	六、四五〇	五、〇五〇	四、八五〇

△小學校

小學校教育は明治三十年六月國語學校第三附屬學校(臺北第二尋常高等小學校)の設立に濫觴し當時兒童數僅に三十四名に過ぎざりしが次で臺北第一、第三、第四の各尋常高等小學校を設立して今日に及び、此の間教育制度の改廢に伴ひ幾度か名稱の改正あり現在に於ては旭壽南門、樺山、建成、錦の各尋常小學校並末廣高等小學校の七校にして學級總數百四十六學級、職員數百六十一人、兒童數九千四百八

十八人を算せり。

元來本島に在りては義務教育制度を施行するに至らざるも事實は之を施行せると等しく現在學齡兒童に對し九八・九六%の就學歩合を示せり尙大正九年より本島人兒童の共學を認むるに至りし結果現在三百七十八人を收容し其の實績極めて良好なり。

△公學校

公學校は明治二十九年五月大稻埕に臺北國語傳習所及艋舺學海書院に國語學校第二附屬學校を設立せられたるを始とし、同三十一年公學校令の發布に依り國語傳習所を廢して公學校に改め同時に大龍峒に第三附屬公學校を設立し、爾後順次各所に之を設立し現在は龍山、老松、太平、日新、蓬萊、大橋、大龍峒、朱厝崙、東園、大安、永樂の十一校にして學級總數二百二十一學級、職員數二百三十八人、兒童數一萬三千八十五人を收容しつゝあり、學齡兒童に對する就學歩合は市制實施當時に在りて

は平均三六・一六%に過ぎざりしが近時本島人の向學心著しく昂進し入學希望者頗る増加するに至りたるを以て本市は極力學校増加の計畫を進め志望者全部の收容に努めたる結果現在五七・五八%に達せり。

△幼稚園

市内に於ける幼兒保育機關としては現在六箇所に幼稚園の設けあり、何れも私立にして臺北幼稚園、臺北樹心幼稚園、大正幼稚園、昭和幼稚園は主として内地人幼兒を愛育幼稚園、艋舺幼稚園は本島人幼兒を保育しつゝあり。

△書房

本島人の經營する初等教育私塾にして近來新教育思想の發達に伴ひ著しく其の數を減ぜりと雖も市内に猶十六箇所あり。

二 社會教育

△青年教習所

昭和四年六月臺北市告示第十一號を以て本市に太平青年教習所及龍山青年教習所を設置す、同所は公學校卒業生に二箇年間人格的教育を施し善良なる公民健全なる國民を養成せんとするものにして現在職員數十一人、生徒數九十八人あり。

△國語講習所

老松・日新の二箇所に市設國語講習所を置き國語の講習を爲しつゝあり。

△同風會

一般市民に國語を普及し風俗の改善と生活の向上とを圖り善良なる國民としての資質を充實せしむるの目的を以て臺北市同風會を組織す、而して既設の大稻埕萬華大龍峒朱厝崙大安東園同風會を統一し之を支會として教化事業の進展を策勵し漸次母國の國風に親ましむる方針なり。

△青年會

皇室中心主義の下に忠孝の本義を明にし、質實剛健なる美風を振作し、健全なる國民、善良なる公民たるの素質を養ふ目的を以て青年會を組織し大に純眞なる青年の本領發輝に努めつゝあり、其の團體現在十一團あり、即ち西門新起榮町本町大成兒玉町川端町府後會の八青年會は内地人を以て組織し、大稻埕日新艦舦の三青年會は本島人の團體なり。

時の標語

(臺北市募集當選)

時間に待つたなし
一大事少しの時の違ひから
汽車に乗る氣で時間を守れ
時間勵行自他の爲め
ごなたも時を違へずに
時間第一

(一等)
(二等)
(二等)
(三等)
(三等)
(三等)

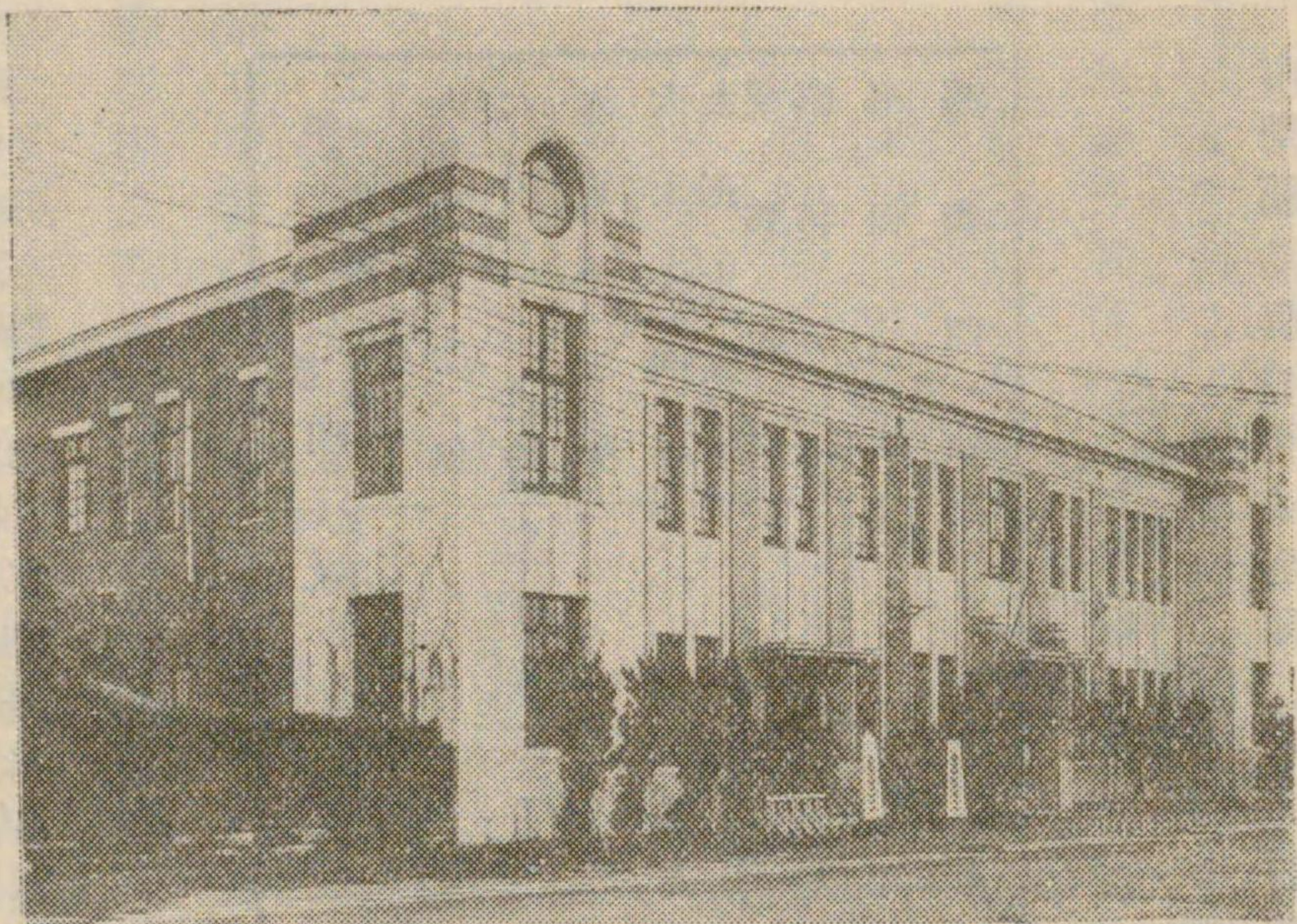
第八章 社會事業

△方面委員

方面委員制度は大正十二年九月州方面委員規程に基き本市を現在十五方面に區分し委員四十五名内無任所五名を囑託し救療機關として醫院長四名に醫務を、妊産婦救護機關として産婆七名に方面顧問を委囑し、市役所に聯合方面事務所を置き公私設救濟指導機關と相策應して銳意其の目的に向つて努力しつゝあり昭和四年中の取扱件數は五千九百十二件に及べり。

△社會事業助成會

社會事業の普及發達を促進し併せて其の助成を圖る目的を以て昭和四年二月本會を組織し事務所を市役所に置き銳意其の目的達成に努力しつゝありて創立尙日淺きも著々功績を擧げつゝあり。



職業紹介所・簡易宿泊所

△窮民救助

窮民に對しては市費を以て爲すものゝ外臺北仁濟院日本赤十字社臺灣支部醫院私立林本源博愛醫院臺北醫院等と連絡を取り衣食の資たる金品を給與し或は施療を爲し以て之が救助に努めつゝあり。

△職業紹介

大正十二年六月明石町に臺北市職業紹介所を開設したるに逐年利用者激増の傾向を示したるを以て昭和二年七月簡易宿泊所竣工と共に事務所を御成町に移轉し紹介斡旋に努力の結果相當効果を收めつ

つあり事業開始以来の成績は左の如し。

△臺北市職業紹介所年次成績調

年次	取扱別		求人	職	紹介	就職
	求	人				
大正十一年	五九四	一、〇四一	一、〇四一	四二一	三四大	
大正十二年	一一一〇	一、八九一	一、八九一	七六七	五五三	
大正十三年	八四九	一、六〇二	一、六〇二	五七六	四一七	
大正十四年	一一三三	一、九七六	一、九七六	七九〇	五八八	
大正十五年	一、〇八七	一、九七六	一、九七六	八六七	五三三	
昭和元年	一、六〇二	二、〇三六	二、〇三六	一、〇〇〇	一、〇〇〇	
昭和二年	二、七一〇	二、三二五	二、三二五	一、三三六	一、三三六	
昭和三年	三、〇二四	三、一六一	三、一六一	一、七三五	一、七三五	

△簡易宿泊所

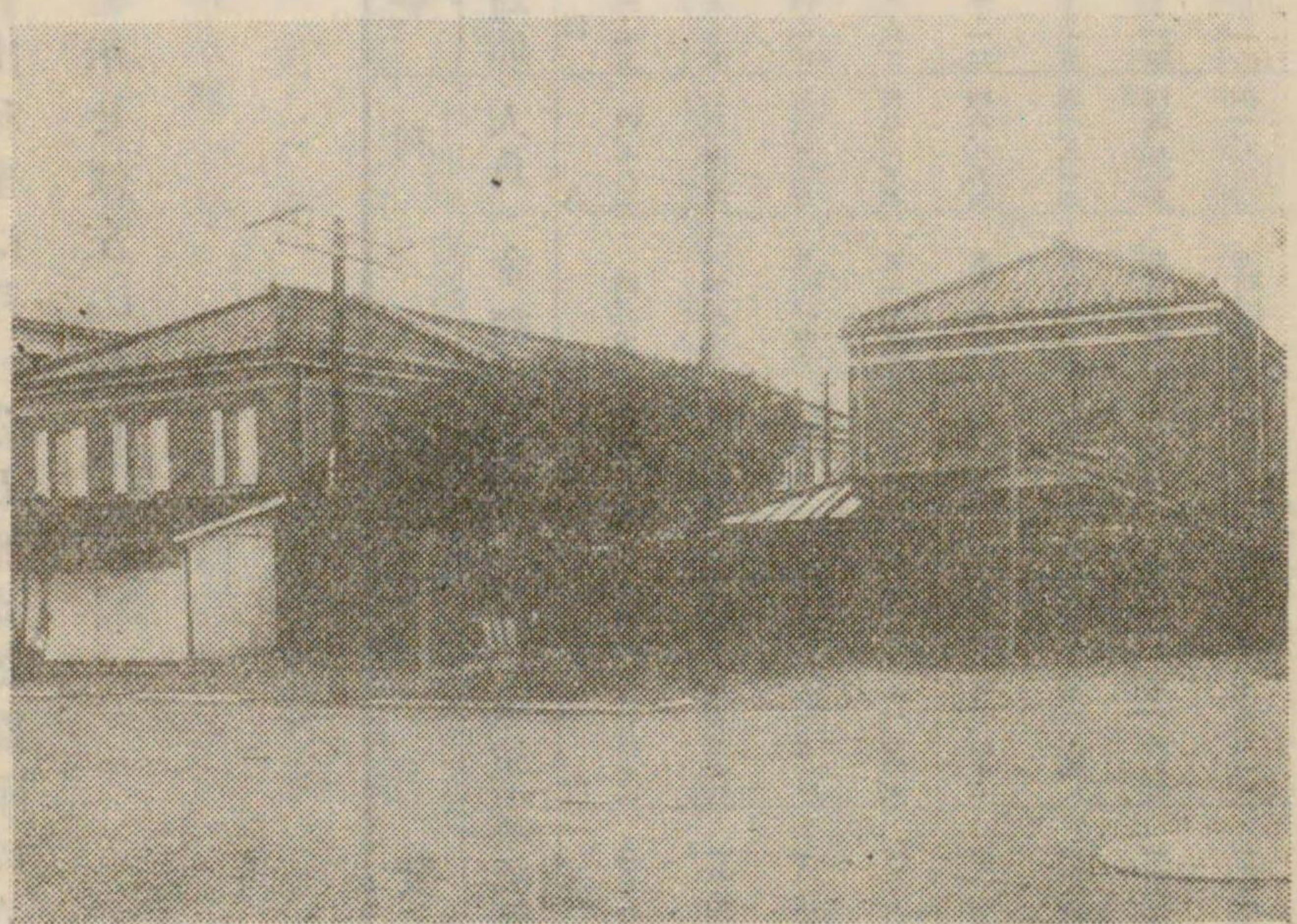
市營簡易宿泊所は昭和二年の新築に係り同年七月より事業を開始せり、爾來宿

泊者多く設備としては寢臺十六、浴室娛樂室及食堂等あり、階下の一部は職業紹介所事務室及御成町公設質舗に充て居れり開始以来の宿泊者數左の如し。

昭和二年(自七月至十二月)	一、二三九人
昭和三年	三、二三四人
昭和四年	三、二八〇人

△公設質舗

公設質舗は大正九年六月の創始に係る臺北市營公設質舗と昭和五年四月開設の御成町公設質舗の二箇所あり共に市經營にして現在資本金三十九萬圓を以て經營



公 設 質 舗

し下級金融機關として利用者多く而して貸出利率は月一分五厘、流質期限は六箇月にして大正九年開始以來各年營業概況を示せば左の如し。

△營業概況

年次	貸		出		質		受		利		息		流		質	
	人員	金額	平均額	人員	金額	平均額	人員	金額	平均額	人員	金額	平均額	人員	金額	平均額	
大正九年六月十六日開業	九、八三一	二五二、八三三	二五七二	四、七八二	一一八、三六六	二四七五	四、七八二	四、二七四	〇、八九三	八七三	二〇〇一二	二二、九〇	二、〇一二	二、〇一二	二、〇一二	
十年	三〇、〇六九	七五四、三六二	二五〇八	二二、四〇七	五九八、一七五	二五、五五	二二、四〇七	三、四九七六	一、四九四	二、九〇五	五三、五七二	一八、四〇	一、八四〇	一、八四〇	一、八四〇	
十一年	三五、九一二	八〇〇、四八八	二二、二八	三〇、五二五	七三六、八七一	二四、一三	三〇、五二五	五〇、八四六	一、六六五	三、三七〇	六一、七〇一	一八、三〇	一、八三〇	一、八三〇	一、八三〇	
本年度ヨリ市二移管	四六、七一六	八五一、四七五	一八、二二	三八、三五七	七四一、四六三	一九、三二	三八、三五七	五二、九五	一、三八〇	四、四一九	六一、四四七	一三、九〇	一、三九〇	一、三九〇	一、三九〇	
十三年	五〇、六四二	七五三、八三四	一四、八八	四六、八五九	七五五、四七六	一六、一二	四六、八五九	五六、六三一	一、二〇八	四、二四一	五一、四七七	一一、二二	一一、二二	一一、二二	一一、二二	
十四年	四九、三二八	七六六、四六二	一五、五四	四一、八二二	六五八、七二八	一五、七五	四一、八二二	五〇、三三五	一、一九九	四、二一九	四九、二七〇	一一、六七	一一、六七	一一、六七	一一、六七	
十五年	五二、二二二	七六八、六三四	一四、七二	四五、九〇五	七〇四、四八一	一五、三四	四五、九〇五	五七、五四二	一、二五三	六、二九〇	七六、六九七	一一、二八	一一、二八	一一、二八	一一、二八	
昭和元年	四六、五二二	六七二、二四九	一四、四五	四一、九二〇	六三六、五〇三	一五、一八	四一、九二〇	五四、〇八三	一、二八九	五、四〇四	五八、七一一	一〇、八六	一〇、八六	一〇、八六	一〇、八六	

年次	人員	金額	平均額	人員	金額	平均額	人員	金額	平均額	人員	金額	平均額
三年	四五、三八六	六五六、四二四	一四、四六	四〇、六二四	六〇四、六一八	一四、八八	四〇、六二四	五〇、三〇六	一、二三八	五〇、五九	五三、四九五	一〇、五七
四年	四八、七三六	七一四、八一七	一四、六六	四一、五二八	六二九、一八六	一五、一五	四一、五二八	五〇、八四七	一、二二四	五、二八三	六四、〇〇三	一一、一一

△主なる私設社會事業

本市に於ける主なる私設社會事業は時勢の要求に伴ひ漸次發達して成績優良なるもの亦尠からず、殊に左記四事業には特に思召を以て御内努金御下賜の恩典に浴せり。

- 財團 臺北仁濟院 (堀江町) 創立 明治三十二年 窮民救養、施療、行旅病人精神病者受托收容事業
- 法人 林本源博愛醫院 (建成町) 同 明治四十二年 無料入院施療施藥事業
- 護國 十善會 (西門町) 同 大正二年 無料宿泊職業紹介事業
- 三成協會臺北一新舍 (古亭町) 同 明治四十年 免囚保護事業
- 愛々々 寮 (綠町) 同 大正十二年 窮民救助事業

第九章 兵 事

一四二

△在郷軍人

帝國在郷軍人會臺北市聯合分會を市役所内に置き其の下に城内城南城西城北の四分會を設く、在郷軍人現在數は四千五百五十餘人にして就中職を官廳に奉ずる者最も多く、總數の四六%を示し次で商業銀行會社員其の他にして筋肉労働者は却て少數なり、之が爲其の生活状態は概して安定、思想亦穩健着實にして各々其の業に奮勵しつゝあり、又其の服役上に於ける義務履行は概して確實良好なり。

○童 謠

夜

樟山小學校 西川敏夫

しづかな夜だ

蟲がなく

星が流れた

また一つ

第十章 産 業

一 市の産業

本市が市制施行以來最近十年間に於て著しき發達をなし、人口は優に二倍を超過し、市の歳入出は今や四百萬圓を上下して約三倍に達せるは、即ち産業の發達を物語るものにして、本市が臺灣に於ける文化の中心にして且つ經濟の樞軸たるは言を俟たざる所なれども、運輸交通の機關漸次發達整備するに従ひ自ら産業都市として名實俱に島都たるの名に耻じざるに至れり、從來本市特有の産業たりしものは勿論、最近の發達に屬する商工業亦尠しとせず、今其の生産發達の狀勢を示せば左表の如し。

△市の生産額 (單位圓)

一四三

年別	種別						
	農産	畜産	林産	水産	鑛産	工産	合計
大正十年	一、四八八、二四八	五二一、四七七	?	四六、五七六	二二〇、一一一	二七、五四七、二〇七	二、八八七、五一九
大正十一年	一、八八七、八六一	二七八、四一九	二、二八〇	五五七、一六	三〇一、〇〇〇	二六、九〇〇、五七九	二、九、五四、九五五
大正十二年	一、二九五、一六七	四二五、三九四	九、〇七八	五四、六二二	二八、四七一	二七、四〇五、〇九一	二、九、二七、八三三
大正十三年	二、二七四、三六二	四八九、七六六	一四、三三四	八八、三二六	二五、〇四六	三〇、八七四、六四七	三、三、七、六、六、三、七
大正十四年	二、〇〇〇、三三五	四五一、二四九	一〇、四五〇	九〇、八一九	六〇、四六五	三五、〇〇二、三八四	三、七、六、一、五、五、九
大正十五年	一、〇七六、九〇二	四七八、三三三	六、八七〇	八四、五五四	六〇、三〇〇	三三、五九二、二二七	三、四、二、九、九、一、七、五
昭和元年	一、四三二、八一七	五二二、三三五	七、一六〇	八三、九七九	七四、一七四	三三、六六四、六一四	三、五、七、七、五、〇、六、九
昭和二年	一、九一五、一九四	五二五、二一九	一〇、三〇〇	八五、六七七	七三、七九七	三四、九五七、〇〇五	三、七、五、五、七、一、九、二
昭和三年	一、四五八、五二三	四七八、四六四	一〇、三〇〇	八七、三二二	七三、七九七	三一、〇九一、九五二	三、三、二、六、三、六、六、七
昭和四年			一六、一九二		一三一、二二五		

△農業

本市に於ける耕地は市街の發展、住宅地の擴大と共に歳々減縮し、本市總面積四千二百二十六甲中現在田千九百九十九甲、畑六百十九甲に過ぎず而して農家戸數は千九百八十三戸にして自作者三百八十五戸自作兼小作者五百二十一戸小作者千

七十七戸あり昭和四年中の重要農産物を掲ぐれば左の如し。

米	五四、一〇二石	價額	一、〇三九、六六七圓
蔬菜類	六、七九八、七七八斤	同	二〇〇、九七四圓
香花作物	六九七、九九一斤	同	九九、八三八圓
果實類	六四五、八七〇斤	同	六四、四九五圓
甘藷	一、六三一、五二〇斤	同	三二、六三〇圓

△畜産

畜産は牛豚及家禽を主とす、本島人は養豚思想發達し従て之が飼育盛にして其の數八千三百三十一頭に達するも、本市に於ける需用を充す能はず年々約四萬餘頭を移入するの狀態にあり、牛は水牛黄牛洋牛印度牛雜種牛等にして千百八十九頭を算し就中水牛最も多し、山羊二百三十二頭にして馬は僅かに三十八頭に過ぎず、家禽は鶏家鴨鶩七面鳥等にして六萬九千三百七十羽を飼養す。

△水産

特に記すべきものなきも扁魚鰻鮨魚鱧魚烏魚鯽魚等數量五萬六千七百十斤價額一萬九千圓なり。

△鑛業

市内六張掣に石炭鑛區五箇所あり其の總面積二十六萬二千二百四十二坪產額三千七百九十萬斤價額十三萬一千二百十五圓なり。

△工業

本市工業の主なるものは特産品として製茶金銀紙及重要品として粳摺精米製糖菓子等にして一箇年生産價額五十萬圓以上のものを列舉せば左の如し。

包種茶	七、九九三、九五三斤	價額	六、四六七、二九四圓
烏龍茶	五、九〇九、八七五斤	同	三、五四七、六九八圓
金銀紙	二、六四八、三二〇斤	同	二、六四八、三二〇圓
精米	一四一、〇二七石	同	二、八七八、七七四圓
粳摺	二〇五、六七二石	同	二、二一五、五三二圓

砂糖	九、四二八、四一〇斤	同	一、五四七、〇九二圓
菓子糖	—	同	一、〇七三、九五四圓
石鹼	九四四、九〇〇貫	同	九五九、三六六圓
麥酒	五四、九六三箱	同	九二四、二四一圓
木製品	—	同	八六〇、五〇四圓

△商業

本市は基隆淡水の兩港を控へ運輸の便備はり島内物貨の集散地たると共に南支南洋發展の根據地として商業殷盛を極め取引常に活況を呈しつゝあるも財界不況の影響を受け市況沈滞の色あるは遺憾とする所なり。本市に於ける商事會社數左の如し。

株式會社	會社數			資本		
	本店	支店	計	本店	支店	計
	一四	一三	二七	一五九、四五〇、五〇〇圓	一一、八三〇、〇〇〇圓	一、二八九、四八〇、〇〇〇圓

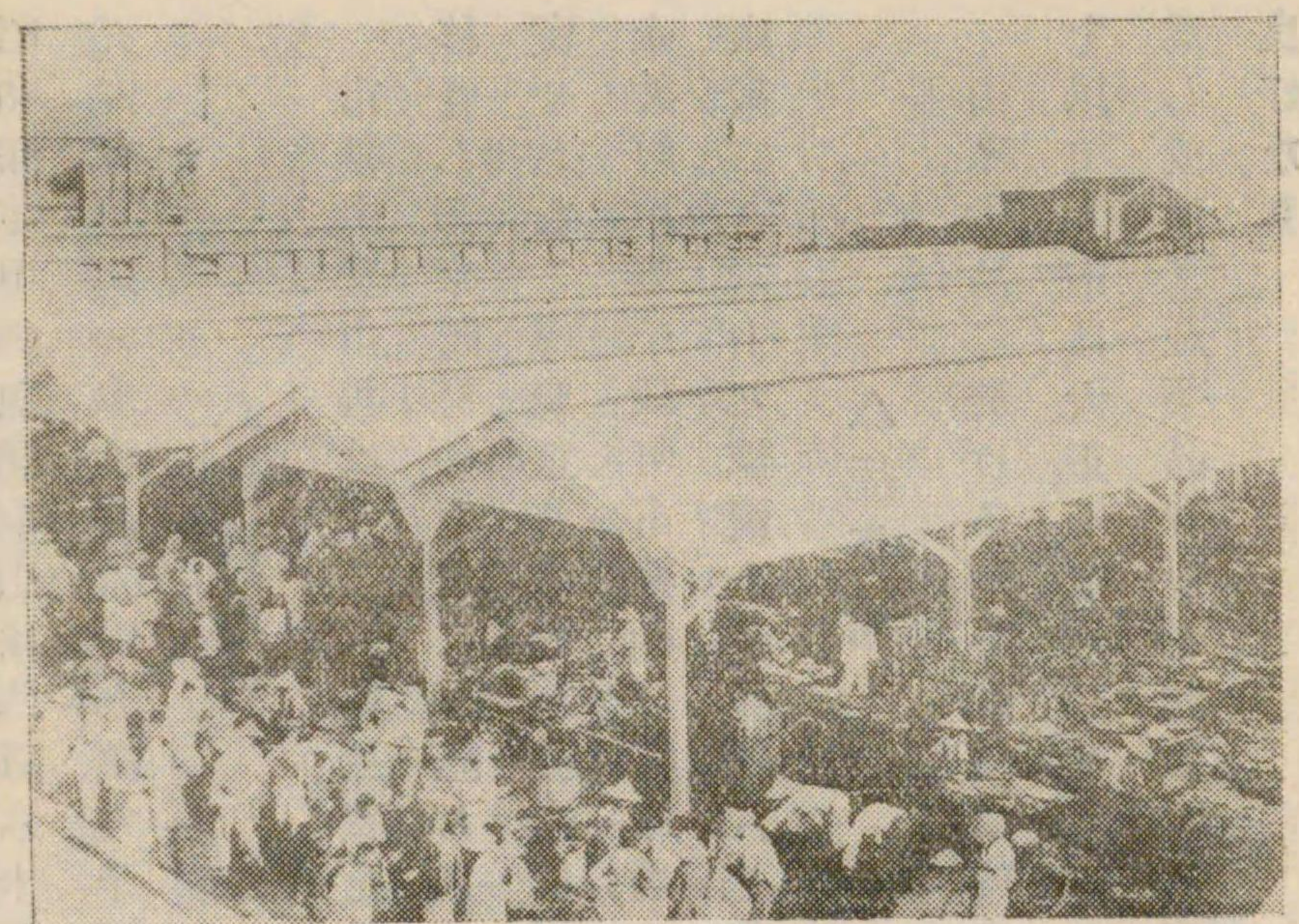
合資會社	七三	一、五九八、八〇〇	一、五九八、八〇〇
合名會社	二四	二、七五五、〇〇〇	二、七五五、〇〇〇
合計	三三	一、三三六、〇〇〇	一、三三六、〇〇〇
			一一、八七〇、〇〇〇
			一、七六四、九〇〇

△金融

金融市場に在りては米茶製糖資金及肥料購買資金の外著しき需用なく金融概して緩慢なり。

銀行は臺灣銀行臺灣商工銀行華南銀行臺灣貯蓄銀行三十四銀行臺北支店日本勸業銀行臺北支店彰化銀行臺北支店等あり昭和四年十二月末日現在預金四千九百四十九萬五千三百二十九圓餘貸出金一億一千五百七十三萬三千六百二十圓あり。

産業組合は信用及信用兼營組合十七購買組合四利用販賣購買組合六合計二十七組合ありて漸次堅實なる發達を遂げ地方産業及經濟の發展に資する所尠からず又下級金融機關として無盡會社一あり相當活動しつゝあり。



中央卸賣市場

△家畜市場

家畜市場は從來本場と分場の二箇所を設置したるが昭和五年度より一箇所と爲し生豚山羊黄牛水牛雜種牛の取引を爲しつゝあり特に生豚は取引盛んにして目下豚のみは糶賣を行ひ日々の相場は之を各消費市場に通報し居れり昭和四年中の取引家畜頭數は三萬九千六百七十五頭價額百六十九萬一千百九十圓を算せり。

△中央卸賣市場

從來は魚市場と蔬菜市場の設けありたるが之を統一して昭和五年度に於て中央卸賣市場として之を新設開場せり而して

昭和四年中の魚類取引は八百六十萬一千五百七十七斤價額百三十八萬五千三百五圓、蔬菜類の取引は六十九萬六千三百八十圓を算せり。

△消費市場

市營消費市場は、元公共衛生費を以て經營し來りしが、大正十年四月之を本市に移管し爾來時勢の要求に順應し益其の改善擴張を圖り物價を調節し優良品を廉賣せしむる等銳意其の機能發揚に努めつゝあり、現在設置する市場は西門町市場、永樂町市場、千歲町市場、御成町市場、綠町市場の五箇所にして昭和四年に於ける賣店數三百六十九總賣上金額三百七萬二千九百九十八圓を算せり。

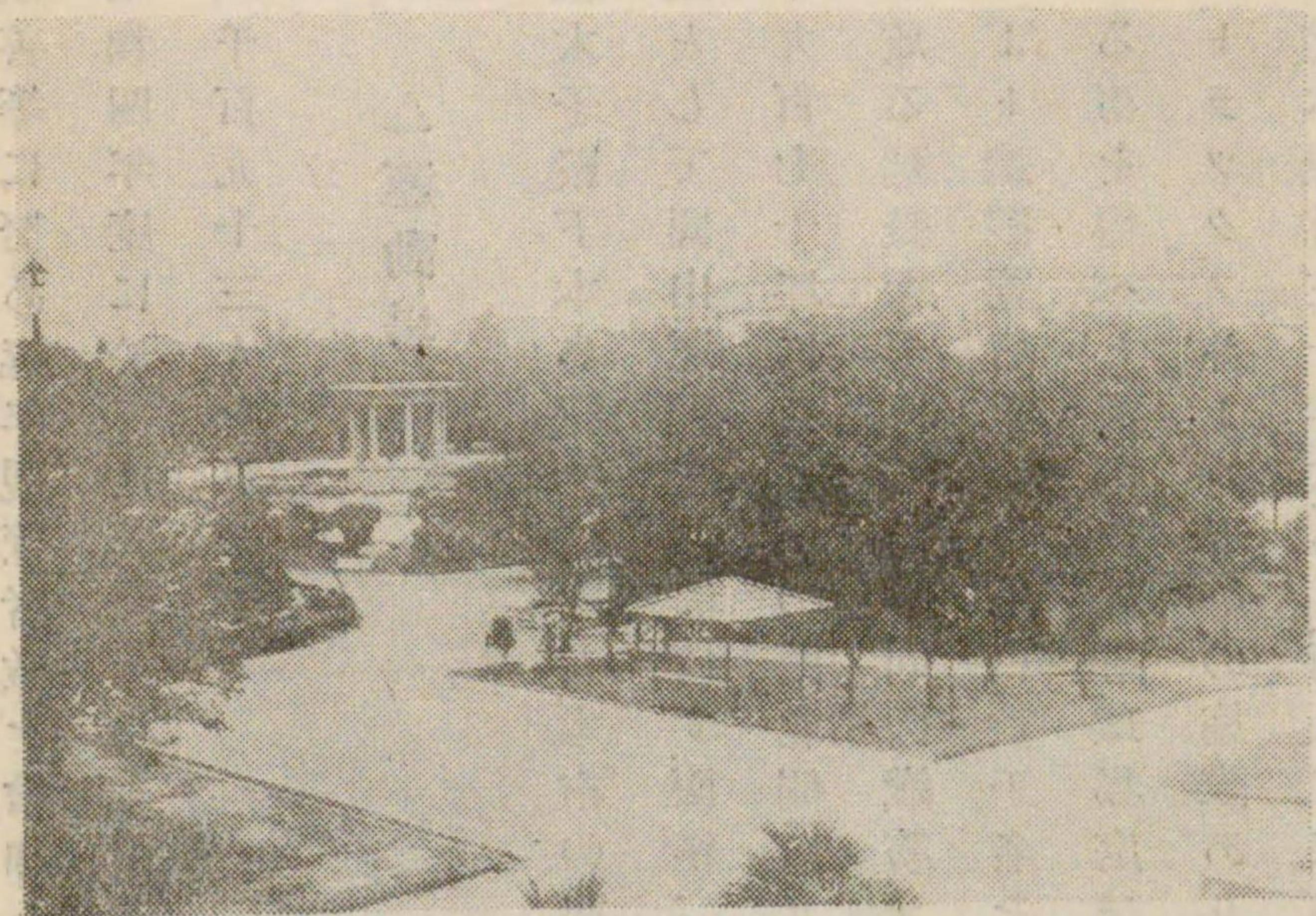
△蔬菜園

由來本島に於ける蔬菜栽培は賤業視せられ其の進歩甚だ遅々たるものありしを以て、本市は大正十年九月蔬菜園を設け内地及西洋種並本島優良品種の栽培を爲し或は又蔬菜品評會を開催する等指導獎勵に努めつゝある結果其の成績大に良好なり。

第十一章 公共施設

△公園及動物園

臺北公園及圓山公園の二あり、圓山公園の中に動物園を附設す。臺北公園は明治三十二年の開設に係り總面積二萬三千六百六十四坪餘なり、圓山公園は大正四年十一月御大典記念事業として設置せられ其の面積二萬九千六百六十六坪餘あり、動物園と共に大正九年制度改正の時臺北州より移管せられたるものなり、動物園は我國五大動物園の一にして動物の數三百六十有餘を收容し其の充實を計ると共に施設

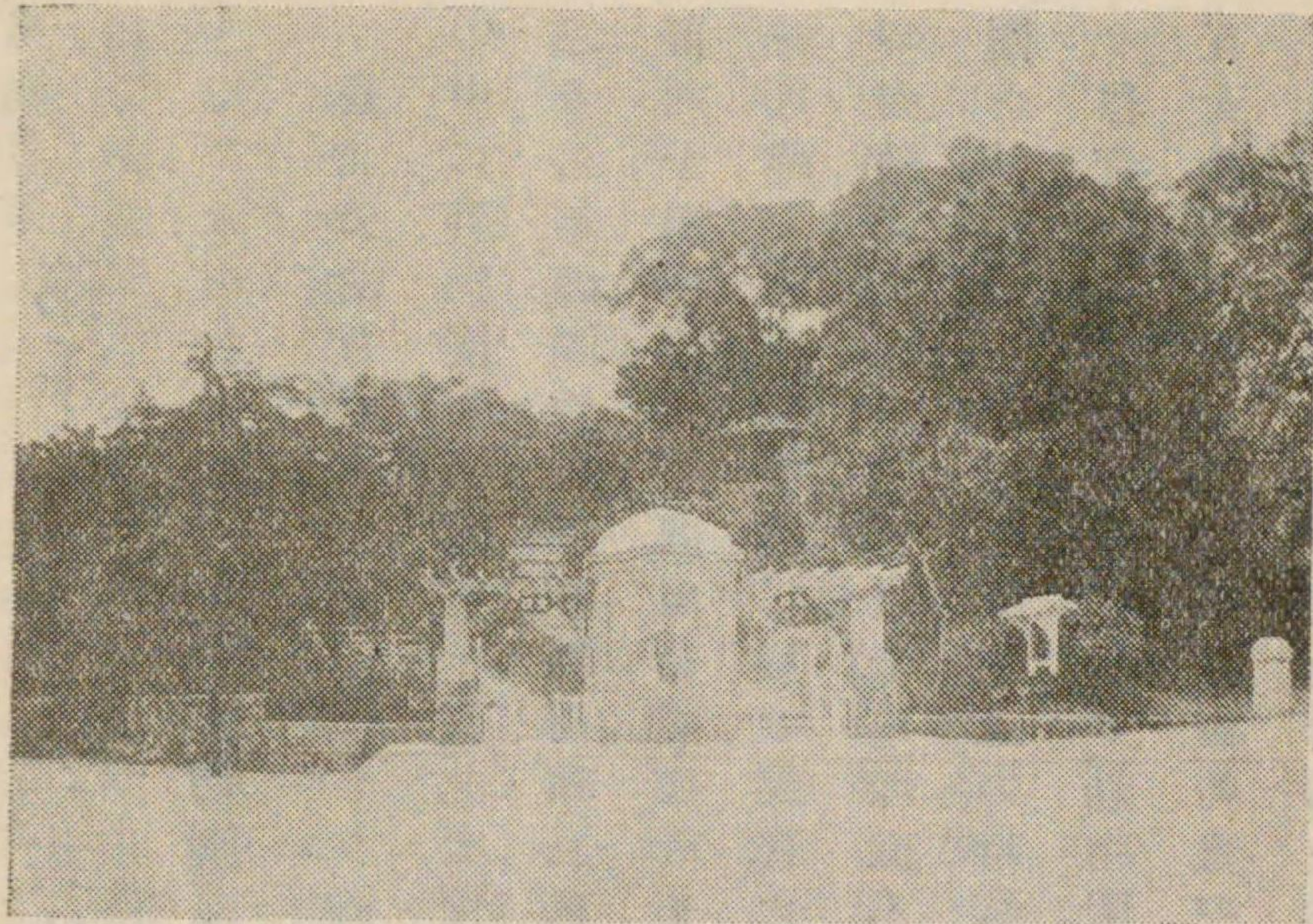


臺北公園

の改善等に努め逐年観覧者数を増加し、最近昭和四年度に於ては其の入場人員十四萬六千九百九十三人を算せり。

△運動場

皇太子殿下本島行啓に際し、本市の記念事業として圓山運動場を設置す、面積二萬一千九百七十坪にして、場の西北側に九連より成る延長七十四間幅四間の鐵筋コンクリート造観覧席を設け優に數千名を收容する事を得べし、場内には野球場庭球コート、トラック、フールド等の施設あり、又二階建休憩所(三十坪六)あり、而して毎年市

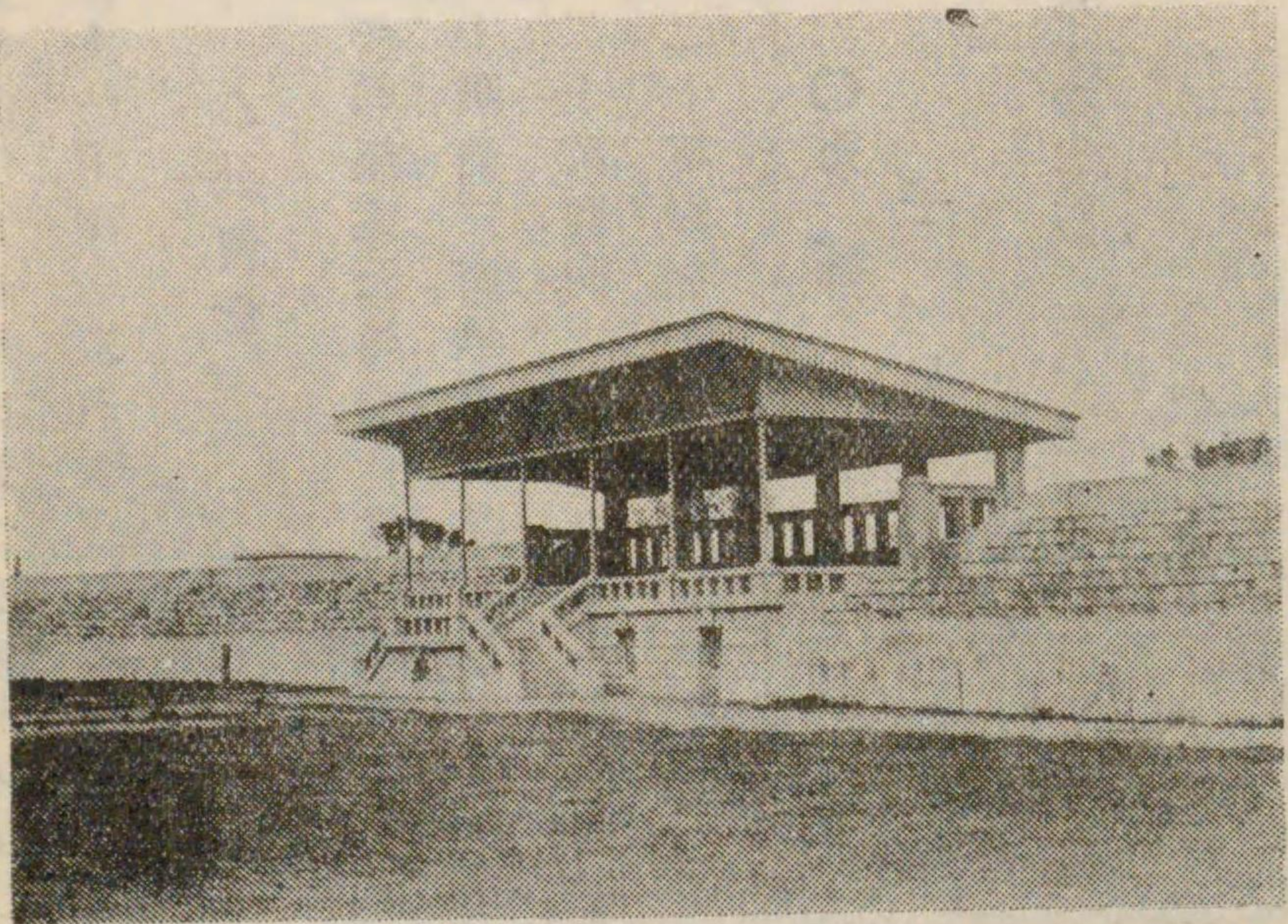


圓山動物園

内各學校の行啓記念聯合運動會を此の地に開催す。

△水泳場

市營水泳場二箇所あり、東門町水泳場は大正十五年七月新設開場に係り、大小水泳池に分ち大水泳池は長五十米幅十六米半、水深一二米乃至二八米、容水量一、四〇〇立方、小水泳池は二七〇平方、容水量一二五立方、全部鐵筋コンクリート造にして、附屬建物等を合せて總工費約四萬圓を要せり。明石町水泳場は元臺灣基督教青年會の經營に係りたるものを昭和三年本市



圓山運動場



東門町水泳場

一五四
に繼承して、女子用に充つ水泳池の長二十
米幅十一米深一米乃至三米なり。

△公會堂

多年の懸案たる公會堂の建設は所要經
費八十萬圓、三箇年繼續費として昭和五年
度に二十萬圓、同六年度に四十萬圓同七年
度に二十萬圓を支出するものなり。

○童謠

子星

日新公學校 溫

冷

小さな小星が

すうーささんだ

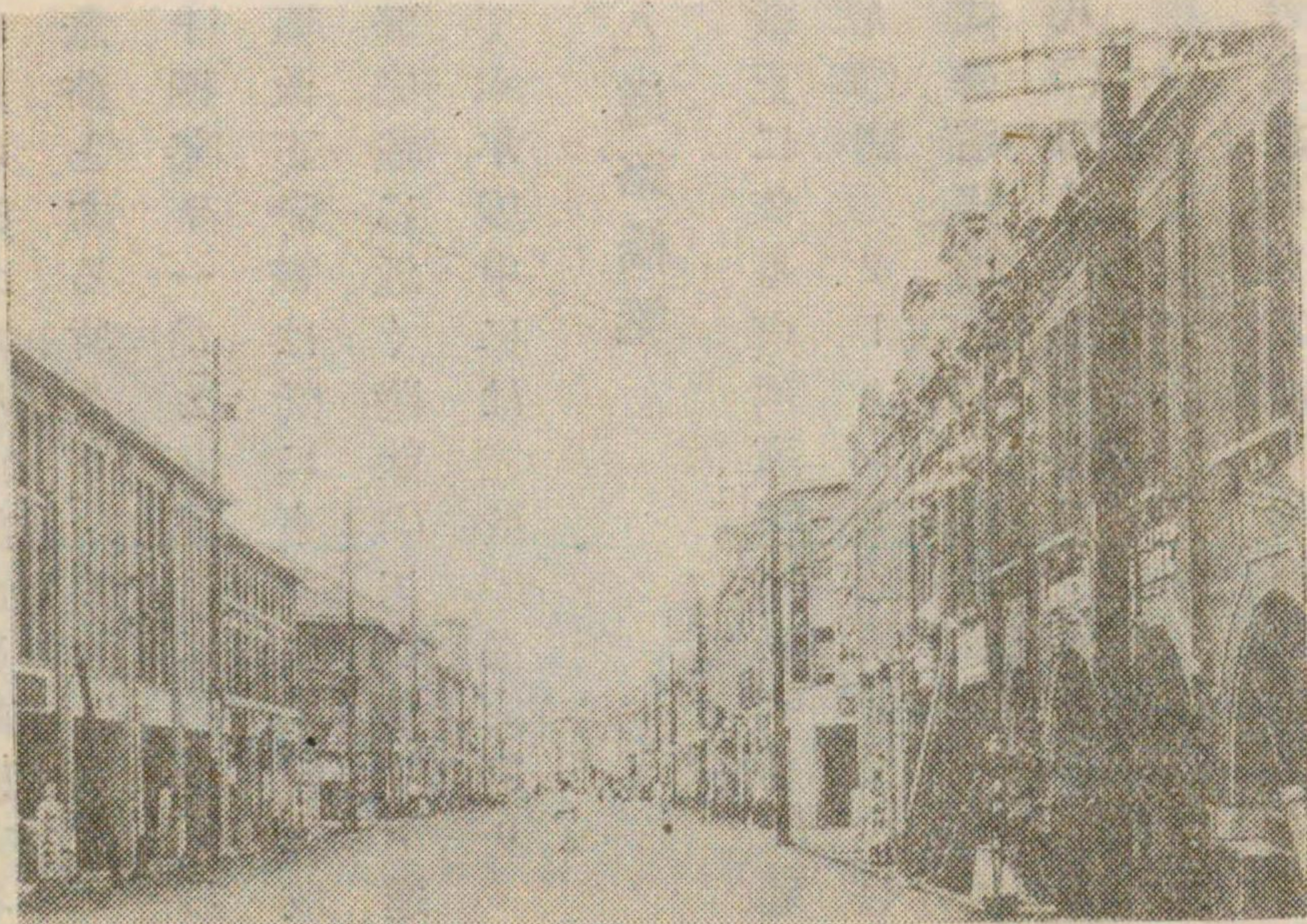
母さんお星へ

乳のみに

第十二章 土木水道

△市區計畫

本市の市區計畫は明治三十三年八月に創
まり、爾來市街の發展と共に屢々計畫を變更
し、同三十八年十月に至り改めて全市二百五
十五萬餘坪に十五萬の人口を容るべき計畫
の下に著々工事を進め來りたるも未だ豫定
計畫の約五分の三に達したるに過ぎず。然る
に人口は年約三分強の率を以て増加し、既に
二十三萬餘人に達せり、從て市部も亦著しく
發達し計畫區域外に家屋を建設する者甚だ
多きを加へたるを以て既定計畫の完成を急



京町通 (後正改區市)